



機巧少女は傷つかない2

海冬レイジ

海冬レイジのるろお



9784840132459



1920193005806

ISBN978-4-8401-3245-9  
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー



## 機巧少女は傷つかない2

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。そのトップを決める戦い〈夜会〉開幕前日、自室に戻った雷真とパートナーの夜々が目にしたのは、宙吊りにされた少女〈と犬〉だった! 「どういうプレイですか、雷真。女を部屋に連れ込んで……吊るして……!」 「妙な誤解をするな!」 少女の正体は、雷真の初戦の相手〈静かなる騒音〉プレイ。そして彼女の目的は……雷真の暗殺!? フレイが仕掛ける数々のトラップ(と、色々と勘違いする夜々の嫉妬)に雷真が閉口する中、ついに夜会が開幕する——。シンフォニック学園バトルアクション第2弾!

MF文庫J

「雷真がふたつの脂肪の塊で骨抜きにされちゃいます……!」  
(夜会)開幕。雷真に白い暗殺者の手が迫る——?

**コミック化決定!** 詳細は裏面に

MF文庫J

580

「機巧少女は傷つかない」  
**コミック化決定!**

月刊コミックアライブ6月号より連載開始!!  
(4/27発売号)

最新情報はこちらをチェック! → [www.machine-doll.com](http://www.machine-doll.com)

特設サイトに無料待受画像を配信中!

アニメイト

<http://anime.jp/>

検索から「アニメロ」で検索



<http://www.tv-tokyo.co.jp/machidoll/>



※ 画像・音楽・動画・小説・漫画・ゲーム・その他、様々なコンテンツが揃っています。各コンテンツの詳しい情報は、各コンテンツのページをご覧ください。詳しくは各コンテンツのページをご覧ください。





## 海冬レイジ

かいとう・れいじ

変形ロボが好き！ 毎月買っちゃうので、お金とスペースがありません。困っていたら、神様が言いました。「だったらYOUTO小説でやっちゃいなYO！」で、やりました。……でも、今月も買います。

いまだに新人気分が抜けないキャリア6年目の職業作家。札幌市在住。1月8日生まれ、A型。ほかに「幻想画グリモアリス」シリーズ（富士見ファンタジア文庫）など。

【イラストレーター】

## るろお

控えめが好き！ 毎回薄くなっちゃうので、作画の幅が広がります。困っていたら、担当が言いました。「だったらYOUTO大きいの描いちゃいなYO！」で、描かされました。……でも、今度も（控えめさん）描いてます。



2 Facing "Sword Angel" 機巧少女は傷つかない

海冬レイジ

るろお



9784840132459



1920193005806

ISBN978-4-8401-3245-9  
C0193 ¥580E

定価：本体580円(税別)  
メディアファクトリー



## 機巧少女は傷つかない2

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。そのトップを決める戦い〈夜会〉開幕前日、自室に戻った雷真とパートナーの夜々が目にしたのは、宙吊りにされた少女（と犬）だった！「どういうプレイですか、雷真。女を部屋に連れ込んで……吊るして……！」「妙な誤解をするな！」少女の正体は、雷真の初戦の相手〈静かなる騒音〉プレイ。そして彼女の目的は……雷真の暗殺!? プレイが仕掛ける数々のトラップ（と、色々と勘違いする夜々の嫉妬）に雷真が閉口する中、ついに夜会が開幕する——。シンフォニック学園バトルアクション第2弾!

メディア

## J 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない1 Facing "Cannibal Candy"  
[イラスト るろお]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"  
[イラスト るろお]



2

Facing  
Sword  
Angel

機巧少女は  
傷つかない

海冬レイジ

Illustration  
ころお



粗末な部屋の中央で、  
ふらーん、と謎の物体が揺れている。  
ネットだ、魚網のようなものが、  
天井からふら下がついていた。  
その中であつたのは、白くて、なめらかな何か。





シャルは目を見張った。

シグムントが翼を広げ、

警戒感をあらわにする。

〔何で魔力……！ これが

人間に出せる出力なの……!?〕

ロキとケルビムがそろって

飛び退き、距離を取った。

「俺も交えてくれよ。  
ダンスの相手がいないんだ」

Red  
Akabane  
赤羽雷真

「おともします雷真。  
雷真が行くところ、お風呂の中までも」

Black  
Yagya  
夜々

「ふん、余裕ぶっちゃつて。  
ムカつく無礼者ね」

Charlotte Belge  
シャルロット・ブリュ

「あのままでは、  
あの娘……死ぬぞ！」

Sigmund  
シグムント

Freya  
フレイ

「私だって  
人形使い……」

Rabi  
ラビ

「がう！」

「I'm ready」

Yellow  
Kerubim  
ケルビム

「目を閉じろ。  
これで終わりだ」

Blue  
Hoki  
回キ

# contents

- Prologue 白い暗殺者 .....p11
- Chapter 1 夜会、開幕前夜 .....p21
- Chapter 2 秘密の片鱗 .....p52
- Chapter 3 くだらない質問 .....p85
- Chapter 4 救われた命を .....p117
- Chapter 5 ヴァルブルギスの夕べ .....p149
- Chapter 6 愚か者の選択 .....p180
- Chapter 7 てのひらで踊る魔剣 .....p213
- Epilogue 白い殺人鬼 .....p246



**Unbreakable  
Machine-Doll**

マシンドール  
**機巧少女は傷つかない 2**  
Facing "Sword Angel"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



# Prologue

## 白い暗殺者



「素敵です雷真。夜々は……夜々はもう……はあああん♡」

少女は喜悅の声をあげ、くねくねと身をよじらせた。

その正体は人間ではなく、最高級の自動人形だ。やわらかな木漏れ日の下を、浮かれた調子で歩いている。

ここは英国、ヴァルブルギス王立機巧学院。夜会の開催を明日に控え、学院全体が熱気を帯びている。案外、彼女もその熱気に当てられたのかもしれない。

それはそれとして、雷真はうんざりして言った。

「妙な声を出すな夜々。また変態扱いされるだろ。主に俺が」

「体育では無敵ですね。見ましたか、皆さんの羨望の眼差し！」

夜々は聞いていない。うつとりと目を細め、くるくると回る。

「夜々は嬉しいんです。皆さんが雷真を認めてくれたみたいで。雷真がどんなに素敵で、格好よくて、夜々にだけ優しいかってことを」

「おまえの幻想がダダ漏れなのともかく、それはマヌケな勘違いだぜ。ここは魔術師の学校、運動ができたって何も格好よくねーさ。……つか、むしろ最悪にダサイ男だよ俺は。」

毎日毎日、補講だの追試だので嫌になるぜ」

凝った眉間を親指でもみほぐす。

「土曜だったのに、午後から二コマの補講だつとよ。さつさと寮に戻って、テキストを回収。学食で昼飯を食ったら、すぐに校舎に戻るぞ」

「はい♡」

笑顔で返事をする。しかし、夜々の笑顔は、自室に戻るなり砕け散った。

粗末な部屋の中央で、ぶらーん、と謎の物体が揺れている。

ネットだ。魚網のようなものが、天井からぶら下がっていた。

その中であつたのは、白くて、なめらかな何か。

それが誰かの肌——ふともも——だと気付いたのは、『見えてはいけない布』をたつぷり五秒も凝視してからだった。

制服姿の少女がひとり、両足を高く上げた、青少年には有害っぽいポーズで吊るされている。頭の右で結んだ髪は幻想的な真珠色。妙に長いマフラーと、ガーターベルト、ふわふわのリボンベールが可愛らしい。

彼女の尻につぶされる格好で、黒い毛並みのオオカミ犬も、仲良くネットに入っていた。肩に装甲がつけられているところを見ると、自動人形のようなのだ。

えーと……何コレ？



夜々は暗黒星雲のごとく、とよとよと暗いオーラを漂わせた。

「どういうブレイですか、雷真。女を部屋に連れ込んで……吊るして……！」

「妙な誤解をするな！ 俺はおまえと一緒にだったろ！」

「更衣室で〇・三秒ほど目を離しました！」

「〇・三秒じゃ口説けもしないからな？ あと、窃視は立派な犯罪だからな？」

少女が悲しげに体をゆすって、ぶらぶらと何かをアピールした。

目のやり場に困りながら、ネットをゆるめ、床におろしてやる。

床に足がつくと、少女はネットから這い出そうとして、逆にネットにからまった。手足が動かせず、マグロのようにびちびちと跳ねる。

ニブい。雷真はあきれながら、ナイフでネットを切ってやった。

「う……ありがとう」

はつかねずみのように震えながら、少女が礼を言う。

控えめに見ても美しい少女だ。紅い瞳は宝石のよう。気弱そうな顔つきとは裏腹に、体の一部分だけ、妙に自己主張が激しい。

ふたつのふくらみが重力に逆らっている。雷真は思わず赤面しつつ、

「俺の部屋で何をやってる？ 場合によっちゃ警備に突き出す——うおっ!?」

語調に敵意を感じ取ったのか、突然、オオカミ犬が飛びかかってきた。

「がう！」

「でけーなこの犬！ おまえ、自動人形か？ 俺の部屋に何の用だ！」

「がうがう！」

「吠えるな。見た目だけじゃなくて、中身まで犬ころなのか？」

少女が犬を抱き寄せ、おどおどしながら引き離した。

「ラビは、しゃべれないけど……私の……家族」

「……今の発言は取り消す。よろしくな、ラビ。俺は赤羽雷真だ」

雷真はオオカミ犬に視線を合わせ、右手を差し出した。

犬はつぶらな瞳で雷真を見上げ――

がぶっ！

「い——つてえ！」

「血が出てます雷真！ 早く消毒しないと！」

「舐めるな夜々！ おまえが犬か！」

などと騒いでいるうちに、いつの間にか、少女の姿が消えていた。

こつ然といなくなる。ニブいように見えて、逃げ足だけは速いようだ。

「……何だったんだ、今のは」

雷真は室内を見回した。

あたりには、スプリング、滑車、ゴムひもなどが散乱している。

「どうやら、罌<sup>わら</sup>を仕掛けようとして、自分で引っかかったらしいな」

「まさか……ハニートラップ!?」

夜々のひたいがさっと青ざめる。続いて、ごっこ、と謎<sup>なぞ</sup>の地震が発生した。

「……いや、どこもハニーじゃないだろ」

「あの女の（パンツ見せ攻撃）で雷真は箒<sup>ほうりく</sup>絡寸前でした！ そんなにパンツが好きなら、

夜々を見てくださいいっ夜々のを！」

「たくし上げるな！ 恥じらいを持って！」

ひどく面倒くさいことになりそうな気がする。夜々の目つきも危ない。できれば二度と会いたくないな、と雷真は思った。

ところが、再会ときは、思いのほか早く訪れたのだ。

寮を出て間もなく、夜々が警戒の色をあらわにして、木陰をにらんだ。

木陰からびよこんと飛び出しているのは、特徴的な真珠の髪、そして犬のしっぽ。

雷真はため息をつき、こちらから声をかけた。

「俺に何の用だ？」

少女はびくびくしながら木陰を出て、おずおずとバスケットを差し出した。

「何だ？」

「さっきのこと、おわびしたいと思って……お弁当、作ってきました」  
ぐわしゃつ、と夜々がテキストを握りつぶした。

「やっぱり、二人はそういう関係……っ！」ごっこい。

「あからさまに毘たる！ 何でさっきのおわびがもう完成してんだ！」  
「私、料理……得意だから……」びくびく。

「あんたも得意とか関係ないからな？ 時間と空間を超越してるからな？」

少女が震える手でバスケットを開ける。料理が得意というのは本当らしい。見た目にも  
美しいサントイッチが、びっちり丁寧に詰め込まれている。

「いや……気持ちほろいかな、俺たちはこれから学食に」

めぞ、と涙ぐむ少女。仕方なく、雷真はひとつ手に取った。

鼻を近付ける。別段、おかしなニオイはしない。

夜々の怨念じみた視線を感じながら、ばくつとひと口。

「ぶほっ！ えほっ！ 何入れた？」

「う……眠り薬——が調達できなかったので、お塩をどっさりと」

「……塩？」

「カリウムとナトリウムのバランスが崩れて、細胞が壊れるのではと……」



「いつそ永眠させようっていうお茶目なアイディアなんだろうが、こんなもの、のみ込む前に気付くからな？」

バスケットの中身を全部たいらげたら、確かに致死量なのかもしれないが。

「つたく、何だって……いや、いい。関わり合いはごめんだ。行くぞ、夜々」

背を向け、歩き出そうとしたとき、五感が違和感を訴えた。

見ると、すぐ目の前の地面だけ、あからさまに土の色が違う。

背後の少女は何かを期待する目でこちらを見ている。

雷真は白々しい気分で、変色した土を避け、斜め前に踏み出した。

背後から、めそつ、と悲しげな響きが聞こえた。すんすんと鼻を鳴らす音まで。無性に

いたたまれない。雷真はわざわざ足を戻し、変色した土を踏んだ。

ぼす、つと地面が抜ける。新聞紙で作ったらしい〈フタ〉が落ち、ぽっかりと小さな穴

がうがたれた。深さはおよそ三十センチ。

「……何だ、これは？」

「落とし穴……」

「前衛的な回答だな。小人でも捕まえるつもりだったのか」

「それ以上深いと、私が出られなくなっちゃう……」

「……まあ、この深さでも骨折することはある。一応は、悪意的なトラップだ」

少女はほんのり頬を染めた。別に誉めたわけではないのだが。

「あの、それじゃ……一緒に風呂に入りましょう」

ぱりっ、と夜々がテキストの束を引き裂いた。

雷真は半眼になって、

「……風呂？」

「穴に落ちて……汚れちゃったから」

いそいそと道を開け、木立の奥を示す少女。

そこに、あるはずのないバスタブが鎮座していた。

「何で……こんなところに」

少女は心持ち誇らしげに、

「森林浴……」

「いや、全然うまくないからな？」

あまりにも怪しすぎて、逆に興味を惹かれてしまう。思わず近寄る雷真に、えーいつ、

と少女がぶつかってきた……が、雷真は足を踏ん張り、跳ね返した。

こてん、とあっけなく転がる少女を無視して、バスタブをのぞき込む。

「……何だよ、これ」

「虫風呂……」

少女は尻もちをついたまま、蚊の鳴くような声で答えた。

「虫風呂に落とせば、さしもの貴方も、精神崩壊をきたすはず……」

「確かにミミズとムカデがのたくつてるが——たったの五匹だな？」

「五匹捕ったところで、私の精神が崩壊しかけたので……」

恥ずかしそうにうつむく。自分でもヘタレだという自覚があるらしい。

「あの、じゃあ、今度は……」

「まだ何かネタがあるのか」

「う……これが、本命です。私の寝室に、きてください。……う、うふん」

ぎこちなく「しな」をつくる。本物のハニートラップだ！

夜々があうあうと言葉にならない声を出し、テキストを引きちぎって紙吹雪にした。

これ以上は色々な意味で危ない。雷真はため息をついて、

「おい、いい加減にしろ。一体何がしたいんだ。もう十分つき合ってやったろ。言っとくが、遊んでやる暇はないぜ？」

格好つけた台詞だが、補講に追われて暇がないのだから、全然格好よくない。

雷真ににらまれ、ガタガタ震えながら、少女は気丈に宣言した。

「貴方を、暗殺、します」





# Chapter 1 夜会、開幕前夜

## 1

「あきれた！ あきれたわー あきれ果てたわー」

学生たちで賑わう土曜の午後。鉄筋コンクリートで造られ、壁が一面ガラス張りというモダンな学生食堂に、少女の声がこだました。

妖精のごとき美少女シャルロット・ブリュー。

彼女と同席しているのは雷真と夜々。さらに、小さなドラゴン——シャルの相棒シグムントが、テーブルの上でチキンにかじりついていた。

「三度も言うなよ」

目をそらす雷真。シャルは雷真にフォークを突きつけて、

「『暗殺する』なんて言われて、見逃したの？ 見下げ果てたチキン野郎ね！」

「そんなことで見下げ果てるな。俺にどうしろって言うんだ」

「その場で返り討ちにしてやればよかったのよ」



「さすが、天下の（暴竜）さまは言うことが違うな」

苦笑しつつ、魚のフライにフォークを突き刺す。

「あいにく俺は文明人でね。野蛮人の真似はしない」

「貴方が文明人ですって？ ふんー 私を襲って、『女の子の大事なものを暴力で奪おうとしたくせに』」

「妙な言い方するな！ お食事中の皆さまがいらん誤解をするだろ！」

という危惧は、既に現実のものとなっていた。ひそひそとささやく声とともに、敵意があたりに充満する。振り返るまでもなく、女子学生たちの視線が痛い。

夜々は下唇を噛み、ふるふると震え出した。

「雷真……そんな……そんなことを……っ！」

「おまえも信じるな夜々。つか、おまえも一緒だったからな？」

「ひどいです雷真ー そんなことに夜々を使うなんて！」

泣き崩れる。何かもう、説明しても無駄っぽい。雷真は頭痛をこらえ、

「ま、それはともかくだ」

スルーした。「ともかく!?」と色めき立つ夜々を手で制し、続きを言う。

「返り討ちってのは無理だ。向こうは機巧戦闘を仕掛けてきたわけじゃない」

「そんなこと言って、本当は勝つ自信がなかったんじゃない？」

意地悪く笑いながら、シャルは手帳を取り出し、ページに視線を走らせた。

「白い髪で、犬を連れてるなんて、この子しかいないわ」

びし、と書き込みのひとつを指で示す。

「三回生、フレイ——登録コード〈静かなる騒音〉。序列は第百位。二つ繰り上がって、

ひとつ下がって、今は九九位だわ。貴方の初戦の相手よ」

「何だって？ あいつ……夜会の参加者だったのか」

まさか〈手袋持ち〉とは思わなかった。弱気な表情といい、ビクついた態度といい、とても成績上位者とは思えない。

「何よ、知らなかったの？」

「トッブランカーは把握してるが、下の方はウロ覚えだ」

「ふん、余裕ぶっちゃって。ムカつく無礼者ね」

黙り込んだ夜々から、おどろおどろしい空気が漂ってくる。その瘴氣を手帳でバタバタと払いのけつつ、シャルは自信たっぷりに胸をそらした。

「見えたわ。貴方の腕が立つと見て、夜会開催前に消そうって魂胆よ」

「何だそりゃ。『初戦の相手』ってことは、最初に当たるんだろ？」

「ばかなの？ 死ぬの？ 実戦じゃ勝ち目がないからよ」

「——」

「あきれた。本当に自覚がないのね。貴方は風紀委主幹の……」

言いよどむ。それから、過去を振り切るように、強く言う。

「フェリクス・キングスフォートを倒しているのよ。序列こそ百位だけど、貴方は危険なダークホース。五十位以下の連中は、みんな戦々恐々よ」

そのとき、鳥の皮を引っ張っていたシグムントが、不意に首をもたげた。

「噂をすれば、だな」

ガラスの向こうを見やる。シャルも、雷真も、夜々も、そちらを見た。

食堂の前の通りは、学院を南北に貫くメインストリート。そのど真ん中で、熊狩り用の檻（おり）をセッティングしている者がいる。

真珠色の髪は嫌でも目立つ。もちろん、それはフレイで、かたわらには彼女の相棒ラビの姿もあった。意外なパワーを発揮して、大きな檻（檻）を牽引（けんいん）してくる。

ラビが止まると、フレイは鉄格子（てつこうし）をくぐり、檻（檻）に入った。

半裸の女性が表紙の、いかがわしいグラビア誌を取り出す。

それを檻（檻）の中に置く。どうやら、獲物をおびき寄せるエサ……らしい。

信じたくはない。信じたくはないが。

（あんなものに釣られるような男だと……思われてるのか、俺は……!?）

軽く死にたくなる雷真の前で、案の定——と言うか何と言うか、鉄格子のロックが外れ、

がしゃんつと閉まった。

閉じ込められたまま、ぼつんと立ち尽くすフレイ。

十数秒も経ってから、ようやく状況を把握したらしい。あわてて〈檻〉の中をさまよい、マフラーを踏んでコケた。

起き上がれずに、じたばたともがく。……果てしなく、ニブい。

ラビはラビで、おろおろと〈檻〉の外を回る。こちらあまり賢くはない。

ふと、その耳がピンと立つ。何かに気付いた様子で、ラビが後ろを振り返った。

細身の男子学生がひとり、〈檻〉の前にやってくる。

引き締まった体軀。肩にハーフサイズのマントを引っかけている。横顔ははっきり端整。

美男子と言って差し支えないが、目つきが鋭く、相手を怯ませる人相だ。

その髪は——特徴的な真珠色。

銅板を組み合わせて無理やり人型にしたような、異形の自動人形を従えている。

ひと言で言えば、『痛そう』な自動人形だった。棘のようなものが飛び出しているし、

エッジというエッジが刃物のように薄い。全身が金属で構成されていて、極めて人工的な

存在。両手に一本ずつ、巨大なブレードを携えている。長さは夜々の身の丈ほど。おそら

く、重量で叩き斬るタイプの剣だろう。

その男子学生を見て、シャルは驚いたように言った。

「（剣帝）ロキだわ」

「剣帝……（自ら廻る焰の剣）？」

「そうよ。（十三人）のひとりにして、（元帥）閣下の対抗馬と目される男。実戦演習では

負け知らず。二回生ながら、学院で十指に入る実力者よ」

「へえ。何つーか……あいつとフレイ、似てないか。特に色が」

「そりゃそうよ。だって姉弟だもの」

「姉弟——？」

言われて見れば、確かに顔のつくりが似ている。だが、仲良し姉弟というわけではないようだ。ふた言、み言、言葉を交わしたかと思うと——

突然、ロキがフレイのマフラーをつかみ上げた。

反射的に、雷真は立ち上がっていた。シャルはぎょつとして、

「ちよつと、ライシン——首を突っ込む気？」

「様子を見てくるだけさ。行くぞ、夜々」

「待ちなさい！ ロキはマグナスみたいな紳士じゃないわ。前みたいな調子でからんだら、ただじゃ済まないわよ？」

親切な忠告を無視して、歩き出す。

「ふん。どうなっても知らないから！」

シャルは憤然として、パスタを巻く作業に戻った。食事を終えたシグムントが、小さな舌で皿を舐め、満足げにしつぱを振った。

## 2

閉じ込められたフレイの前に、突然、弟ロキが現れた。

「何をバカなことをやっている」

フレイは青ざめ、ビクつき、目をそらした。

ロキの視線がフレイの胸元に刺さる。豊かなふくらみの上、ポケットからはみ出しているのはパールホワイトに輝く手袋——夜会参加者の証だ。

鉄格子の向こうで、ロキの目つきが険しくなった。

「まだガントレットを持っていいのか。棄権しろと言ったはずだ。あんたは誰にも勝てしない。生き残れるはずもない。怪我をする前に棄権しろ」

「……でも」

「痛い目には遭いたくないだろう。大人しくオレの言うことを聞け」

「……でも」

「くどい！」

フレイのマフラーをつかみ上げ、ロキは強引に引つ張った。ひたいが鉄格子にぶつかり、フレイの目の奥で火花が散る。

「弱い者がでしゃばるな！ 強い者に従え！」

「がうっ！」

主の危機を感じ取り、ラビが吠えかかる。だが、ロキにひとにらみされると、しつぽを股に挟んで、腰を退いた。ガタイは立派なくせに、主に似て気が弱い。

ロキは乱暴にフレイを突き放した。

「そんなに使命を果たしたいなら、今すぐ白黒つけてやる——ケルビム！」

呼びかけに応じ、自動人形が動いた。がしゅん、と背中のパーツが回転、翼のように広がる。そこには八本の棘——鋭利な短剣がマウントされていた。

「Command」

電話越しのような、機械的な音声が発する。

フレイはよろよろと立ち上がり、〈檻〉の一番奥まで下がった。

「う……行くよ、ラビ」

「がう！」

「私だって、人形使い……！」

精神を集中し、てのひらから魔力を放射する。それはラビの体内に流れ込み、魔術回路



を起動させた。

ルネサンス以降の自動人形は単なる〈兵隊〉ではない。魔術を発動するための〈魔法具〉でもあるのだ。

それが機巧魔術。儀式や魔法陣から魔術師を解放した、近代的詠唱法。

ラビの毛が逆立ち、表面に電気のようなものが走る。力が溜まり、充実する。そして、ラビが吠えると同時に、静電気の塊のような「何か」が飛んだ。

耳を塞がれたような、不可解な音圧が生じる。石畳を砕き、土砂を盛大にまき上げながら、「何か」はまっすぐ突き進んだ。

ケルビムは避けず、「何か」にブレードを叩きつけた。

ごうっ、と不自然に大きな風切音が鳴る。いかなる魔術のたまものか、それだけのこと  
で、ラビの「何か」は霧散してしまった。

フレイが目丸くする。紅い瞳に怯えが走り、逃げ腰になった。

既に決着がついたも同然だが、ロキは冷酷に「行け」と命じた。

「I'm ready」

跳躍するケルビム。やはり不自然な突風が生じ、ケルビムへと流れ込む。その風に乗るような軽やかな機動で、ケルビムはラビに斬りかかった。

ラビは俊敏にかわす。しかし、相手の動きはそれに勝る。二撃。三撃。ケルビムは執拗

に攻撃し、ラビはたちまち追い詰められた。

ブレードはいかにも重い。鉄の刃がうなりを上げ、ラビの首をはねる――

「――？」

フレイの位置からは、闇がすべり込んできたように見えた。

ふわりと広がる黒い闇。それは彼女の黒髪、そして着物の袖だ。

美しい少女がひとり、ラビとケルビム、両者のあいだに出現していた。ほっそりとした

手が重いブレードを受け止め、ラビを優しく押しのけている。

「貴女は……ライシン・アカバネの……」

フレイは目を見張る。この少女型自動人形が、ここにいるということは。

「まったく、血の気の多い連中だな。夜会は明日の夜からだぜ？」

面倒くさそうにつぶやく声。

思った通り、赤羽雷真が、とほけた顔で立っていた。

### 3

「こんなところでおっ始めるなよ。(剣帝)陛下」

軽い調子で言いながら、用心は怠らず、雷真は注意深く敵を観察した。

こうして並べて見ると、ロキとフレイには共通点があった。髪の色はもちろん、瞳の色も、肌の色もうりふたつ。端正な顔立ちもそっくりだ。

ただし、体格はまるで違う。胸まわりをのぞけば、フレイは華奢で、非力そう。一方、ロキは見るからにバネがある。殴り合いでも強そうだ。

厄介だな……と思いながら、彼の自動人形に視線を移す。

巨大なブレードを振り回す臂力は侮れない。その上、ラビの咆哮を無効化した、不可解な魔術回路を搭載している。背中の短剣も気になる。

使い手も厄介なら、自動人形も相当に厄介。一筋縄ではいきそうもない。雷真はうすら寒いものを感じながら、〈剣帝〉ロキと対峙した。

すうっとロキの双眸が雷真をとらえる。その瞬間、雷真は戦慄した。

（こいつ……体内に化け物を飼ってやがる……！）

途方もない魔力。身にまとう凄み。〈元帥〉の対抗馬というのは嘘ではない！

ロキは凍りつくような声で、冷ややかに言った。

「誰だ、貴様は」

「日本の傀儡師、赤羽雷真だ」

「せっかくの登場で悪いが——失せろ」

「断る」

「殺すぞ」

「それも、断る」

「……オレは謙虚で寛大だ。が、どうにも許せないものが三つある。オレに命令する奴。オレに歯向かう奴。そして、身の程知らずの東洋人だ」

「気が合うな。俺も傲慢な西洋人は大嫌いだ」

両者の視線が激突し、目には見えない火花が散った。一触即発の気配。巻き添えを恐れ、やじ馬たちがあわてて離れていく。

ややあつて、ふう、とロキはため息をついた。

「バカな奴だ。いつそ気の毒になる。相手の力量も見抜けないんだろう？」

「バカはおまえだ。他人様を安易にバカと断じる奴は大抵バカだからな」

「ふざけるな。オレの成績はA A A + 平均だ」

「成績でしか知性を測れないってのがバカの証明なんだよ。お仕着せの尺度で人間を評価するなんざ愚の骨頂だぜ」

「そうやって安いプライドを守っているのか。実に哀れなバカだな。大方、単位が取れずに留年しているんだろう？ 追試と補講に追われているんだろう？」

「バカめ。編入したばかりで留年もクソもあるか。追試は……その、まあ、何だ」

「ふ。やはりバカだな」

「いや、おまえがバカだ」

「貴様だ」「おまえ」「貴様だよ」「おまえだ」

今にもひたいがぶつかりそうな間合いで、不毛な口論を続ける。

「あの……雷真？」「ロキ……」

夜々とフレイが、遠慮がちに声をかける。しかし、少年二人は子どもじみた言い争いに熱中していて、それを無視した。

「不愉快な東洋人め。ならば、腕尽くでオレを止めてみろー」

言い終わる前に、ロキの自動人形が襲いかかってきた。雷真が夜々に防御を命じようとした、まさにそのとき。

まばゆい光の奔流が両者を割った。

光はフレイの《檻》を巻き込み、鉄格子を消し飛ばした。

「そこまでよ。っていうか、何をくだらない言い争いしてるのよ」

美貌の少女があきれ顔で言い放つ。その背後には全長八メートルほどの竜。鋼のうろこがビロードのごとく輝き、雄々しい翼には威厳すら漂っている。

そのド迫力にフレイがおののき、《檻》の中で尻餅をついた。

ロキは鋭い目をますます鋭くして、美少女をにらみつけた。

「貴様もオレの邪魔をするのか、シャーロット・ブリューー」

「シャルロットよ。貴方たちがつぶし合うのは勝手だけど、TPOってものをわきまえて欲しいわね。こんなところでドンパチやられちゃ、みんなの迷惑なのよ」

おまえが言うな、歩く天災——と周囲の誰も思ったはずだが、もちろん、それを口にする命知らずはいない。

「それ以上やるって言うなら、私も交せてもらおうわよ？」

「そいつに味方するんだな？」

「べっ——別に誰の味方とかそんなじゃないわ。その変態がどうなろうと知ったことじゃないけど、高貴なる者の義務が公共の福祉で、一宿一飯の恩はサムライの渡世に仁義なき戦いのよ」

「恩……？」

びくり、と細い眉が動く。ロキの瞳が改めて雷真をとらえ、鋭く光った。獲物を見つけ、た獣のように見えたのは錯覚か。

「そうか。そのバカがフェリクスをやった……（下から二番目）か」

「だったら、何だ？」

お互いに魔力を蓄えたまま、にらみ合う。

やじ馬が息を詰めて見守る中、ロキはふいつと視線をそらした。

興味を失くしたように背を向ける。彼の自動人形も臨戦態勢を解き、ブレードを下ろし

た。「翼」のようだった背面パーツも格納される。

ロキはそのまま立ち去ろうとして、足を止め、肩越しに雷真をにらんだ。

「夜会は棄権しろ。そして、二度とオレたち姉弟に関わるな」

雷真は鼻で笑って、「断る」と答えた。

鋼鉄の機械人形を引き連れて、ロキは去っていった。

気がつくとき、雷真の背中に、じっとりと冷や汗がにじんでいた。

シャルが割り込んできた以上、形としては三対一。形勢は明らかに不利だった。だが、ロキは「不利だから」矛を収めたのではない。あのまま戦っても、勝つ自信があったはずだ。だからこそ、ああも無造作に背中を見せられる。

ロキの姿が見えなくなると、ぴかーっと光を放ちながら、シグムントが仔竜に戻った。夜々もほっとした様子で、珍しくため息などついている。

やじ馬の波が引いていく中、雷真は「檻」に入り、フレイに手を差し伸べた。フレイはぴくっとしたが、「立てるか？」とたずねると、小さくうなずいた。

「ふん。私にはひと言もないのね、無礼者！」

と憤慨するシャルの足に、ラビが鼻をすり寄せ、しつぽを振った。シャルは思わず顔をほころばせ——すぐに引き締め、せき払いをした。

立ち上がったフレイは、べこり、と雷真に頭を下げた。

「う……ありがとう……ラビを護まもってくれて」

「俺おれが勝手にやったことさ。それより、〈剣帝けんてい〉と何をモメてたんだ？」  
とっさに答えられない。

助けられた手前、一応は説明しようとした……ようだ。だが、フレイは途中で口をつぐみ、視線をさまよわせ、やがて目を伏せ、ひと言。

「ロキは……私を、恨にくんでるから」

「恨にくむ？ どういうことだ？」

それ以上、フレイは何も言わなかった。一礼して、立ち去る。そのさみしげな背中を、ラビがぼてぼてと追いかけていった。

気になる態度だ。雷真らいしんは不自然に瞳孔どうこうを開いている夜々——は無視して、そのとなり、ふてくされ気味のシャルを振り返った。

「三回生なら、もうコース分けされてるよな。あいつ、何学部だ？」

「私は辞典じゃないわよ、無礼者」

不機嫌に言い捨ててから、視線を斜め上にやり、つぶやく。

「フレイは確か……機巧戦術科コース。史学部のはずよ」

「そうか。ありがとよ」

「……まさか、探りに行くつもり？」



「行くぞ、夜々」

「ちょ——本気なの!? よしなさい、そんなこと」

「だが、あいつには何か事情がありそうな——」

「だから、やめろと言ったのよ」

シャルは冷淡な目をして、切り捨てるように言った。

「相手の事情を理解したら、戦いは負けるのよ」

シャルの言うことは、わかる。

もし、フレイに何か切実な理由があるのなら。それを知ってしまったら。

戦いの場において、それは致命的な「躊躇」を生む。足かせになる。

だが——

「知らずに倒しちゃったら、後悔するかもしれないだろ」

「勝つこと前提? 自信過剰な男!」

「負けるつもりはねーよ。だからこそ事情を探っておきたいのさ。この前だって、おまえから参加資格を奪わなくてよかったと思ってるんだぜ?」

そう言うとき、シャルの頬が見える赤くなった。

「なら、好きにしなさいよ! 私は絶対、手伝わないんだから!」

「はい、よう」

シャルが示す先には、太古の亀を思わせる、古めかしい建物があった。

いくぶんエッジが丸くなった石造り。欠け落ちた彫刻が歳月を感じさせる。

「何はさつとしてるのよ。本当にグズな男ね。さっさと行くわよ」

おまえ、手伝わないとか言ってなかったか？

……なんていう言葉が喉まで出かけたが、口は災いのもとだ。雷真は突っ込まず、なるべく背後を見ないようにして、シャルを追いかけた。そんな彼の後ろから、どす黒い妖気をまき散らしつつ、不機嫌な夜々が続く。

エントランスに入ったところで、「ヒッー」「うわっー」と悲鳴があがった。

さすがは有名人。ロビーに居合わせた学生たちが、シャルの顔を見るなり、落ち着きを失った。腰を抜かし、ベンチからずり落ちる者までいる。

他人のことは言えない。視線の何割かは雷真に向けられている。それでも《魔術喰い》退治の英雄。当然、面が割れている。危険人物として。

やりにくいながらも、シャルと二人で聞き込みを開始する。フレイが所属している研究室を中心に、嫌がる学生たちをつかまえて、情報を聞き出してみると。

「か、彼女とは、話したことがないよ。無愛想だし、全然笑わないし……」

「い、いつも遅くまで勉強してるみたいですけど」

「ここ、交友関係ですか？ しし、知らなくてすみません！」

「胸、デカイですね」

などなど。結論から言えば、まったく役に立っていない。

シャルは半眼になって、雷真をにらんだ。

「何よ。こんなくだらないことを聞きにきたわけ？」

「俺に言うな。連中に言え」

噂通り、フレイは人付き合いが苦手なようだ。さけていると言ってもいい。集めた情報から浮かび上がるのは、ひとりで学業に励む内気な少女。そんな態度でも、きらびやかな容姿のために、目立ってしまうのだから気の毒だ。

（ある意味、誰かさんに似ているな……）

雷真の視線に気付き、シャルが挙動不審になった。

「な、何見てるのよ、変態」

「いっそ担任の教授に聞いた方が早いな。ちょっと行ってみようぜ」

「……ねえ」

遠慮がちな声。妙にもじもじしながら、シャルが伏し目がちに雷真を見た。

何を察したものの、夜々の瞳から急速に光がなくなる。

はつきり言つて、嫌な予感しかない。雷真は警戒しつつ、

「……何だよ？」

「貴方も、やつぱり……その……大きい方がいいわけ？」

「何が？」

「バカなの？ 脳みそが干からびてるの？ 文脈から判断しなさいよ。まったく、バカはこれだから嫌なのよ、まったく！」

「はいはい。バカなわたくしめに教えてくださいませ、お嬢さま」

「む……胸の話に決まつてるじゃない！」

かあああつと耳まで赤くなるシャル。

夜々の瞳孔が底なし沼のようになってるのは置いておいて。

なぜ、急にこんなことを言い出した？

一般論として、男子の意見を聞きたいのだろうか？

とりあえず、シャルがそこに劣等感を覚えているのは間違いない。雷真は上げ底くさいシャルの胸をチラ見しつつ、無難な回答をした。

「惚れちまつたら、関係ねーだろ、胸のサイズなんて」

「そ——そう？」

「嘘です。雷真はフレイさんみたいな、たゆんだゆんの胸が好きなんです」

夜々の余計なひと言で、シャルの笑顔はたちまち砕け散った。まなじりが見る見る切れ上がり、ひたいに無数の青筋が立つ。

「不実よ！ 下品よっ！ 女の価値を胸で決めるなんて最低の人間性よ！ 何が『事情を知っておきたい』よ！ 胸に釣られただけじゃないっこの変態！」

ばちーんっ、と雷真の頬が鳴る。

そのまま、シャルは大またで立ち去った。帽子の上でシグムントが振り返る。ドラゴンの表情はよくわからないが、どこことなく、同情しているように見えた。

張られた頬をさすりつつ、雷真はつぶやいた。

「夜々……」

「はい」

「俺の胸を真っ黒に染める、このどす黒い感情は一体何だと——」

「だって……っ！ 女狐が変な色目を使うから……っ！」

「使ってねーだろ！ ただのお悩み相談だろ！」

「馬鹿ですっ。雷真は馬鹿ですーっ」

ぎやあぎやあと、史学部の下で言い合う二人。

ふと、その頭上に、厳かな鐘の音が降ってきた。

「雷真……始業の鐘です」

雷真は青ざめ、史学部の校舎を飛び出した。

## 5

「魔力とは即ち意識の力、知性の力というわけだ。当然、気絶した人形使いは魔力を放出しない。もつとも、人体が禁忌人形の〈部品〉になることからわかるように、魔術式によつて無理に引き出すことも不可能ではなく——」

淡々とした声に合わせ、コツコツという黒板の音が規則的に響く。

昼食の後だけに、無性に眠気を誘われる。雷真があくびを噛み殺した瞬間、教授は振り向きざまにチョークを投げた。

にじんだ涙で反応が遅れる。チョークは見事、雷真のひたいに炸裂した。

「雷真！ 大丈夫ですか雷真！」

夜々が鉛筆を放り出し、雷真のひたいをさする。

「相変わらずいい度胸をしているな、〈下から二番目〉。テキストは失くす、時間には遅れる、あげく私の講義を聞き流すなど」

声の主、教壇に立つのは白衣を羽織った知的な美女。赤毛の髪をアップに留め、銀緑の

眼鏡をかけている。雷真の担任、機巧物理学の教授キンバリーだ。

眼鏡のレンズ越しに、凍りつくような視線が飛んできた。

「夜会の参加者は誰もが成績優秀だ……が、君は機巧戦闘の腕前だけで参加資格を得た。従って、学力がまるで追いついていない。そんな可哀相な子のために、一回生の必修単位レベルの基礎的な教育を施してやろうという、大変ありがたい今回の企画——一体全体、誰のおかげだと思っている？」

「すべて、キンバリー先生のおかげデス」

「夜会の開催は明日に迫っている。君には遊んでいる暇などないだろう？ 小言など言いたくもないが、もう少し真面目にやりたまえ」

キンバリーは厳しいが、どちらかと言えば淡泊だ。こんなふうに、くどくど説教するのは珍しい。よほどあきれたのだろうか。

黙っているのも忍びなく、雷真は口答えした。

「そうは言うけどよ、夜会は機巧魔術のどつき合いだ。実際に開幕しちまえば、アホの子の俺も、優秀極まる（十三人）連中も、条件は同じだろ？」

キンバリーの眼鏡がずり落ちた。まさか、という顔で雷真を見つめる。

「ひょっとして君は……理解してないのか？ ガイダンスには出たんだろう？」

「出るには出たが、寝不足と心労で——睡魔に負けた」

「やれやれ……。前にも言ったが、学院は徹底した実力主義だ。そうでもなければ、私のように若くてピチピチの女が教授になれるはずなからう」

「ピチピチなんて古語を口走った時点で、既に若くないと思うけどな」

再びチョークが飛んでくる。雷真かみまことはあわてて手で払いのけた。

「夜会もまた実力主義の世界だよ。優秀な者が優遇され、劣る者は冷遇される。百位などという最下の者は、ほかの誰だれより厳しい立場だ。たとえば、戦う順番」

「順番？ 夜会はバトルロイヤルなんだろう？」

「いや。ロイヤルランブルだ」

その単語には聞き覚えがある。その昔、戦いを見せ物とする魔術師たちが、より観客を熱狂させるために考案したという、特殊な興行形式だ。

「最初の夜は百位の者——つまり君と、九九位の者が戦うことになる」

いきなり出番だ。とすると、相手はフレイだろうか？

「どちらかが相手の手袋を奪えば、戦いはそこで終了する。その結果がどうあれ、翌日には九八位の者が参戦してくるぞ。その次の夜は九七位。こうして夜ごと、新たな敵が交戦フィールドに現れるわけだ。中断期間を除いてな」

「じゃ、常に一対一なのか？」

「そうとは限らんさ。戦いには制限時間がある。そら、その窓から見える時計塔、あれが



零時を告げるまでがダンスの時間だ。それまでに決着がつかなければ」

「——次の日、戦場が騒がしくなる」

キンバリーがうなずく。なるほど、そこが夜会のミソだ。「生き残る」者が増えれば、戦局はどんどん混乱していく。下位の者が徒党を組んで、上位の者を倒す……なんてことも、あるかもしれない。

雷真は少し考え、

「なら、最後の夜までサボってりゃ、勞せず（マシヤル）とやれるのか？」

「言っただろう、実力主義の世界だと。百位も九九位も初戦で当たり——一見、条件は同じだが、両者は決して同列ではない」

謎めいた返答。どういう意味だ？

「九九位の者は、君の言う『サボタージュ』ができる」

「つまり、俺にはその権利がない」

「そうだ。最低でも一時間、交戦フィールドにとどまる必要がある。……まあ、これには例外もあるんだが、今は考えなくていい」

「わかってきたぜ。翌日には、九八位にサボる権利があり——」

「九九位は、君に対してのみサボタージュの権利を持つ。上位の者の意向は、下位の者のそれに優先されるというわけさ。サボタージュに限らず、な」

「質問。九九位には、最後の最後まで俺とやらない選択肢もあるのか？」

「そう都合よくはいかない。夜会は一夜限りのものではないんだ。上位の者と戦っているときに、下位の者が割り込んできたら、どうなる？」

「二対一……場合によっちゃ、もつと悲惨なことになるな」

「下位の者は、その夜のうちにつぶしておくのがセオリーだ。そうすれば、常に一対一を維持できる」

だとすると、確かに、フレイにとって雷真は邪魔な存在だろう。上位の者とやるとき、雷真にチヨロチヨロされては集中できないし、何より危ない。

では、シャルの言う通り、フレイは雷真をつぶそうとして、暗殺を企てた？

フレイは気弱だし、残忍でも狡猾でもない。彼女が人を殺してまで、魔王を目指すとは思えない。いや、そこまでする理由があるのだろうか……？

雷真が思考の海に沈みかけたとき、格調高い鐘の音が聞こえてきた。

「終業の鐘か。やれやれ、くだらぬ雑談に時間を食ってしまったな。残りは自分で学習し、明日までにレポートをまとめておけ。三十枚程度でな」

一瞬でテキストをまとめ、さっさと出て行ってしまうキンバリー。その颯爽とした態度が、今は少々うらめしい。

「三十枚って……マジかよ？」

雷真は青くなり、借り物のテキストを見下ろした。この分厚い、英語で書かれた専門書を明日までに読めと？ 三十枚でまとめろと？

「……つか、今の雑談程度の時間じゃ、このテキスト終わらねーからな？ 超クソ真面目にやっただけ無理だからな？」

「元氣を出してください雷真。レポートは夜々も手伝います」

「ああ……アテにしてるぜ、夜々。ものすごく」

泣きたい気分でテキストをしまう。一方、雷真に頼られた夜々は、にこにこ嬉しそうにノートを閉じた。

校舎を出て、寮へと戻る小道を歩く。燃えるような夕焼けの下、樹のトンネルは夕闇に沈み、二人の姿も闇にまぎれる。

歩きながら、雷真は独り言のようにつぶやいた。

「……姉弟、か」

「はい。いろいろ姉さまと雷真は、きっと素敵な義姉弟になれます♡」

「そんな桃色妄想はどうでもいい。そうじゃなくて、昼間の、あの二人だよ」

どうでもいいと言われて落ち込む夜々。しかし、素早く立ち直り、

「フレイさんと、ロキさんですか？」

「ああ」

「あまり、似てませんでしたね。雰囲気が全然違います」

「いや。よく似てた」

強気と弱気。一見、対照的に思えるロキとフレイの表情には、不思議と似通うところがあった。どちらも瞳に生気がなく、どちらも笑わない。

「姉弟なのに、どうしていがみ合うんでしょうか？」

「……………」

失言に気付き、夜々は見る間に意気消沈した。今にも泣き出しそうな声で、

「すみません……。夜々は……」

「バーカ。何をヘコんでる」

ぼん、と夜々の頭に手を置いて、いつも通りに笑いかけてやる。

「キョウダイにも色々あるんだろうぜ。あるいは、キョウダイだから、かもな」

「雷真……」

「そして、失くしちまってから、わかることもある」

それきり、雷真は黙り込み、思案に暮れた。

夜々はとこと足速め、雷真の正面に回って、想い人を見上げた。

「雷真……気になるんですか？」

「ああ」

「目を覚ましてください！ あんなものはただの脂肪の塊かたまりです！」

「胸じゃねえ！ 暗殺するとまで言われてるんだぞ？ 気になるのはそこだ」

「嘘うそです！ 夜々の目を見て言ってください！」

「何度でも言ってる。あんな風船みたいな胸、まったく興味はな……い」

「そらした！ サッて！ サッて！」

「バカ、違う。今のはアレだ、目が夕焼けに入って、ゴミに染みて」

「台詞せりふを囁ささんでるー！」

首を絞められてはたまらない。雷真はあわてて寮へと駆け出した。

## 6

雷真が寮の自室で、夜々の厳しい〈取り調べ〉を受けている頃。

学院の堅牢な門——〈ゲート〉の内部に作られた応接室では、ひとりの紳士がソファに身を沈めていた。

すらりとした長身。知的な相貌そうぼうは研究者ふうにも見える。だが、身なりはしゃれていて、体格も貧相ではなく、いわゆる研究者のイメージとは一味違う。役者が学者に扮やしたよう

な、独特の雰囲気があった。

紳士は紅茶のカップを傾け、窓の向こう、夕暮れの空に目をやった。

「……変わらないな、ここは」

地上に突き立つ剣のような、時計塔のシルエットを眺める。

「何もかもあの頃のまま——腐っている」

そのとき、応接室の扉がノックされた。

少女がひとり、警備員に連れられて、室内に入ってくる。

真珠色の髪の子学生。オオカミ犬ふうの自動人形オートマートンを連れていた。

「う……お呼び……ですか、お父さま……？」

消え入りそうな声でたずねる。その視線は紳士ではなく、足もとに向けられていた。

紳士はやわらかく微笑み、立ち上がって、少女を迎え入れた。

「そう固くなるな、フレイ。様子を見にきただけだ」

「様子……？」

「いよいよ明日あす、夜会が始まるだろう？」

フレイはびくりと身をすくめた。紳士はそつとその肩に手を置き、

「おまえには期待している」

「私……？　ロキ、じゃなく……？」

「あれは特別だ。あれと己を比べて、卑屈になるのは愚かなことだぞ。おまえの才能は誰よりも私が理解している。おまえがどれほど努力しているのかも」

フレイは不安げに紳士を見上げる。その言葉を信じていいものか、迷っている顔だ。

「生活費——は足りているようだな。不自由があるなら、いつでも言うがいい。……つと、そうそう、おまえにおみやげがあった」

スーツのふところに手を差し入れ、一枚の写真を取り出す。

そこに写っていたのは、十数匹の犬だった。ハウンドにテリアと、犬種はさまざまだが、いずれもおそろいの装甲をつけている。

写真を見て、初めて、フレイの顔から緊張が消えた。

しかし、その表情はすぐに曇ってしまう。

「う……あの、お父さま……約束は……？」

「もちろん、覚えているとも。おまえは安心して務めを果たせ。テストが上手くいけば、またみんなで暮らせるのだから」

「……はい、お父さま。写真、ありがとう」

彼女の紅い瞳には、もはや迷いはなかった。



## Chapter 2 秘密の片鱗

1



おとな 大人たちは、いつも兄のことを話していた。

「いやはや、天全殿てんぜんの天分ときたら」

「まさに鬼神、神童ですな」

「あの器、百年に一度の天秤てんひんでしょう」

「いずれ赤羽あかばねの名を天下に轟とどろかせましょうぞ」

そして、その会話には、いつもお決まりの続きがある。

「それに引き換え、雷真殿らいしんは……」

「十二を過ぎたというのに、傀儡くわいにはとんと興味がないそうで」

「才ほんようも凡庸ぼんようと聞きますが、意欲がないのでは、どうにもなりません」

向けられる視線は冷ややかだ。失望と、軽侮けいぶと、ほんの少しの哀れみ。

そんな大人たちに、たぶん、心のどこかで反発していた。



つまらない自意識。うすっぺらなブライド。絶対的な才覚を持つ兄への憧れ。そして、嫉妬。そんなものに追い立てられて、修練場から逃げ出した。

父は厳格だったが、待つことを知っている男だった。一向にやる気を見せない息子を、修練場で辛抱強く待っていた。

しかし、それにも限度がある。

町場の道場に通り詰め、ときに泊まり込み、家に戻らない——そんな生活が三年も続き、庭のかきつばたが咲く頃、ついに堪忍袋の緒が切れた。

「おまえが入れ込む武芸とやらが、どれほどのものか、見せてみよ」

修練場呼び出され、父が操る人形三体に、蹴られ、殴られ、投げ飛ばされ、たつぷり小一時間も痛めつけられた。手も足も出なかった。

肉体で行う武芸など、父の傀儡の前では、取るに足らないものだった。

そのことを徹底的に思い知らせ、息子の気持ちに傀儡に向けようとしたのだろう。だが、もちろん、こちらも、そのくらいで大人しくなるようなタマではない。

足腰が立たないくらいに痛めつけられてなお、その場で父に啖呵を切った。

「父上。この際、はっきり言います。傀儡なんか、俺は一生やりません！」

父は眉ひとつ動かさず、無言でこちらを見下ろしていた。

真冬の富士を思わせる冷厳さ。数多の人形を支配する眼力は、五十を過ぎてなお峻烈だ。

震えがくるほどの視線に耐え、必死ににらみ返していると、

「ここは傀儡師の家だ。傀儡をやらぬ者を、置いておくわけにはいかぬ」

「……お世話になりました」

売り言葉に買い言葉。床に手をついて頭を下げ、修練場を辞去。その足で自室に戻り、荷物をまとめた。着替えやら布団やらを風呂敷に包み——ふと気がつけば、戸口のところに、困り顔の母が立っていた。

「本気で出て行くの？ だって、これからどうするの？」

「大丈夫だよ。師範が『道場にこい』と言ってくれてるんだ」

「親子そろって、意地っ張りねえ」

くす、と笑みをこぼす。母は駄々っ子をあやすように微笑み、それ以上は何も言わず、

荷造りを手伝ってくれた。

そして、玄関先で送り出すとき、不意打ちのようにこう言った。

「父上から言伝よ。『風邪を引くな』って」

一瞬、熱いものが込み上げ、不覚にも涙ぐんでしまった。

あれほど毛嫌いしていたのに、鬱陶しいとさえ思ったのに、十二年を過ごした家を離れ、家族を捨てるのは、やはりつらかった。

だが、ぐずぐずするのは癪に障るし、性に合わない。母への挨拶もそこそこに、気楽な

ふうを装って、振り返らずに家を出た。

門を抜け、通りを少し行ったところで、誰かがあわてて追いかけてきた。

「兄さま！ お待ちください！」

修行の途中で抜け出してきたのか。息を切らして駆けてくるのは、黒子の衣装に身を包んだ、ひとつ違いの妹だった。

黒目がちの眼は、兄たちとはずいぶん違って、丸く、おっとりとして見える。妹はその眼を見る間にうるませ、すがりつくように言った。

「兄さま……本当に家を出てしまわれるのですか？」

「俺は剣と柔術で食っていく。そっちの方が向いてるんだ」

湿っぽいのは苦手だ。だから、おどけた調子で言った。

「犬っころに空を飛べって言っても無理な話だろ。でも、おまえは違う。俺と違って、空を飛ぶ才能がある」

「そんな！ 兄さまだって——」

「立派な傀儡師になれよ。天兄を追いつもりでさ」

妹は、何かを言いかけて、やめた。

兄の決意が固いことを——意地っ張りなことを——知っているのだ。目を伏せ、何かに耐えるように、肩を震わせる。

そして、たまらなくなったように、兄の背中にしがみついた。

その感覚があまりに生々しくて、雷真は覚醒した。

## 2

背中に触れられた瞬間、体はバネ仕掛けのように反応していた。

頭は半分寝ぼけたまま、反射的に侵入者を組み伏せている。

腕を極め、相手の肩をベッドに押しつける。この体勢なら、相手がどんな大男だろうと、簡単には振りほどけない。いざとなれば、肩を外してもいい。

つかんだ腕は細い。吸いつくような肌の手触りは男のものではない。ふわっと甘く髪が香る。暗くて姿は見えないが、どうやら少女のようだ。

「夜々、おまえ！ また性懲りもなく俺の寝込みを襲いやがって！」

「雷真!? 夜襲ですか!? 女狐ですか!?」

雷真の声を受け、夜々が飛び起きる。……向こうのベッドで。

「……アレ？」

では、雷真の下で、必死に肩をタップしている、この少女は？

「持ちこたえてください雷真！ 今あかりをつけます！」

「待て、夜々。あかりはつけるな——」

言い終わる前にランプが点灯。

赤々と燃えるランプの炎で、ふたつの影があらわになる。

関節の痛みで半泣きになっている、真珠色の髪の乙女と。

おろおろと行ったりきたりを繰り返す、黒い毛並みのオオカミ犬。

ぼとん、と夜々の手からマッチが落ちた。小さな炎が床を焦がし、燃え尽きるまで、誰

も何も言わなかった。

やがて、重苦しい沈黙を破って、夜々が言った。

「どういうことですか、雷真……。夜々はベッドに入れてもくれないのに……。ほかの女と同食して……。組み敷いて……。っ！」

「待て待て待て！ どう考えてもおかしいだろ、その誤解！」

ざわざわと夜々の黒髪がうごめく。急速に開く瞳孔。ランプで下から照らされた顔は、

その美しさゆえに、化け物屋敷の怨霊よりも、はるかに怖かった。

「落ち着け！ これはただの暗殺未遂だ。ほら、思い出せよ。おまえだって最初の頃、俺

の寝込みをガチで襲って殺そうと——あ？」

硬いものに膝が触れる。フレイの腰に『ある物体』を見つけ、雷真は狂喜した。それを

奪い取り、高々と掲げて見せる。

「ほら見る夜々！こいつ、ナイフなんか隠し持ってるぞ。やっぱ俺を暗殺しようとしただけだって！こっそり忍び込んできただけだって！」

「う……そのナイフは……」

半ペソをかきながら、それでも氣丈にフレイは言った——余計なことを。

「私の愛が拒絶されたとき……自分の首を突こうと……」

「嘘つくな！そういう冗談は通じねーんだよ！」

ぼろぼろと涙をこぼしながら、ひくっ、ひくっ、としゃくり上げる夜々。

「ちょ……待って、な？これは孔明の毘だ……な？」

直後、深夜のトータス寮に、断末魔のごとき悲鳴が響き渡った。

「うるせーぞライシン！今何時だと思ってる！」

数分と待たせず、ナイトキャップをかぶった男が飛び込んできた。

うすれゆく意識の中、雷真は寮監の勤勉さに感謝した。

## 3

「——ってわけで、硝子さんに伝えて欲しいんだ」



翌朝。トータス寮の一階ロビー。

夜会開催を半日後に控え、学内はどこも高揚した空気が漂っている。そんな中、ひとり不景気な顔をして、電話機に取りついているのは雷真だ。顔といい、腕といい、ボロツと生傷まみれ。ミミズ腫れが痛々しい。

「フレイの身辺を洗って欲しい。本当は自分で調べるつもりだったんだが、どうも、襲撃をしのぐので手一杯になりそうだ」

受話器の向こうで、いろりが息をのんだ。

「では、敵はいよいよ、魔術で攻撃してきたのですか？」

「いや、魔術をぶつけられたわけじゃない。が、ゆうべも危うく死にかけた」

「魔術も使わずに、雷真殿を!? それほどの相手なのですか!?」

「いや、その、そういうことじゃないんだが、まあそうだ」

「我ら姉妹で最も要人警護に適しているのは夜々です。夜々の《金剛力》でも対処できぬとは、恐るべき戦士ですね。わかりました。主に伝えておきます」

「あ、おい、待てよ。何か、妙な早とちりを——あ」

通話が切れる。いろりはあわてていたようだ。誤解させてしまったが……まあいいか。身の危険を感じるといえるのは、決して嘘ではない。

引っかかれた頬がヒリヒリと痛む。この傷をつけた張本人は、朝飯も食わず、まだ部屋



でめそめそやっているに違いない。実に気が重い。

(それにしても……妙だな)

受話器を置いて、しばし、雷真は考え込んだ。

自惚<sup>うぶほ</sup>れているつもりはないが、雷真の五感<sup>ごかん</sup>は人並み外れて鋭敏<sup>えいびん</sup>だ。戦場<sup>せんじょう</sup>帰りの職業軍人にも引けを取らない。たとえ眠<sup>ね</sup>っていても、わずかな物音<sup>ぶつおん</sup>で目を覚ます。

雷真の部屋はボロい。錆びついた鍵<sup>かぎ</sup>を外し、キイキイとうるさいドアを開け、こっそりベッドに近付くなど、並大抵<sup>なみだいだい</sup>のことではない。

まして、フレイはニブいのだ。そんな芸当<sup>げんとう</sup>ができるとは、とても思えない。

そんなことができる<sup>できる</sup>とすれば――

(……魔術?)

気配<sup>きはい</sup>を殺す魔術<sup>まじゆつ</sup>だろうか。隠密性<sup>おんみつせい</sup>を高める魔術<sup>まじゆつ</sup>は、それこそルネサンスの頃<sup>ころ</sup>から研究<sup>けんきゅう</sup>されている。もちろん、それだけの魔術<sup>まじゆつ</sup>ではないだろう。現にロキとやり合ったとき、ラビは舗装路面<sup>ほさうろめん</sup>をえぐり取るほどの「何か」を放った。

「朝っぱらから不景気なツラをしてるわね」

おまえには言われたくない、と思<sup>おも</sup>いながら、振り返る。

ロビーの入口<sup>いりぐち</sup>のところに、不機嫌<sup>ふきげん</sup>そうな顔<sup>かお</sup>で、シャルが立っていた。

きらびやかな金髪<sup>あざみ</sup>が朝陽<sup>あさひ</sup>を浴びて光<sup>あかり</sup>っている。これから日曜礼拝<sup>にちようらいはい</sup>に向かうのか、いつも

通りに制服着用。帽子の上にシグムントを乗せている。

シャルは腰に手を当て、偉そうに胸をそらした。

「フレイのことで、有名な話を思い出したから、わざわざ伝えにきてあげたのよ。ありがたいなさい。謹んで拝聴しなさい」

「聞いてやってくれ、雷真。シャルは寮中の女子生徒に訊いて回ったのだ」

「だだ黙りなさいシグムント！ 生野菜食べさせるわよ！」

「わざわざ悪いな。是非、聞かせてくれ」

シャルはちよつと頬を染め、こほん、とせき払いしてから、続きを言った。

「Dワークスって、知ってるでしょう？」

「……D？」

「あきれたわね。それでも学院の人形使い？」

はあ、とため息をつく。何だか、毎日、あきれられている気がする。

「ここ十年で一氣に名前を売った、新進気鋭の機巧工房よ。魔術回路の開発もやって、五年くらい前には〈音圧操作〉の魔術回路で特許を取ったわ。英国陸軍の次期主力コンベにもノミネートされてる」

「景気のいい工房だな。で、その工房が何だった？」

「フレイの後援者よ。フレイとロキの、ね」

後援者。つまり、巨額の学費を出しているということだ。

「——ってことは、ひょっとして、あいつらが連れてる自動人形オートマトンは」

「Dワークス製の新型ってところでしょね。試作機かもしれない」

「試作機？ 夜会に試作機をぶつけるってのか？」

負けられない勝負に、信頼性の低い試作機を使う？

「おいおい。そんな博打ばくち、打つわけねーだろ」

「逆よ。夜会は極めて過酷な生存競争——たったひとりの勝者と、それ以外の敗者を生み出すゼロサムゲーム。普通にやっても、簡単には魔王ワイスマンになれない。ちよっとくらいギャンブルしてでも、最新の技術を投入したいはずよ。それに」

シャルはちらりとシグムントを見上げ、

「夜会は機巧技術の万国博覧会だわ。古きも、新しきも、優れた機巧が集う場所。ここで通用する魔術回路なら、きつと世界で通用する」

「……なるほど。うってつけの試験場ってわけか」

戦争に出すまでもなくテストができる。機体の回収も容易かつ安全。試作機のテストを兼ねているのなら、魔王ワイスマンになれなかったとしても、うまみがある。

まして、これから軍に売り込もうとしているなら——

デモンストレーションとしても、最高の舞台だ。

「そうになると、当然、俺が邪魔になるよな……」

初戦で叩きつぶされては、テストにならない。デモとしても最悪だ。

雷真をしのいでしまえば、しばらく強敵と当たらずに済む。戦闘結果をフィードバックして、調整を繰り返し、運用方法を研究すれば、さらに強化することも可能だ。

しかし——だからと言って、あのフレイが『暗殺』まで企てるか？

シャルはムスツと黙り込み、難しい顔でそつばを向いた。

「何だ？　どうかしたか？」

「別に。ただ……あまり、いい噂を聞かないのよね」

「噂？　Dワークスの？」

「役人に金塊贈って特許をゴリ押したとか、非合法な実験をやっていると。ロビー活動もかなり下品だし、弱みを握られてる議員も多いって話よ。社長のブロンソンってのがまたすごい色男で、貴婦人たちを次々と……」

シャルははっと我に返り、

「《ペンゴ》みたいな、三流ゴシップ紙が好きそうなネタよ。くだらないわね」

「ちなみに、シャルの愛読紙だ」

「ただ黙りなさいシグムントー！　私はブリーユー伯爵家のシャルロットよ！　私がそんな、程度の低い新聞を読むわけじゃないでしょう！」

伯爵家令嬢がゴシップ紙なんか読むなよ、と思ったが、口にはしない。

「とにかく、これでわかったでしょう？ フレイの『事情』なんて、結局はDワークスの事情ってことよ。新型のテストにしろ、魔王の座を狙うにしろ、夜会で勝ち残るために、貴方を消したいだけよ」

「そうらしいな」

「手加減の必要なんでないわ。今夜、ぎったんぎったんにしてやりなさい」

「……そういや、今夜だったな。俺の番は」

レポートに追われたり、襲撃されたりで、ほとんど忘れかけていた。待ちに待った夜会は、いよいよ今夜開催だ。

シャルはまばたきをして、それから不安げな顔をした。

「緊張もしてないの？ 本当に鈍いのね。……そんな調子で大丈夫？」

「心配すんな。なるようになる」

「自惚れないで。誰も心配なんてしないわよ。貴方みたいな変態」

ふんつ、とそっぽを向き、Uターンする。そのままロビーを出て行く彼女を追いかけて、雷真は寮の前庭まで送った。

「ありがとよ。参考になった」

シャルは背を向けたまま、ぼつりとつぶやいた。

「お守り。」

「ん？」

「私があげた防御印、ディフェンシブ忘れるんじゃないわよ。ハンカチもね」

それだけ言うと、ずんずん歩いて行ってしまう。シグムントがびこびこしつぽを振り、別れの挨拶をした。

「おふくろか、あいつは」

雷真は苦笑して、ふところから銀のペンダントを引っ張り出した。

ルーンが彫られたペンダントは、朝陽を受け、神秘的な輝きを放っている。シャルの気持ちもこもっているだけに、ご利益はありそうだ。

ふと、ペンダントが青白い光を帯びた……ような気がした。

チェーンを通して、指に伝わるかすかな振動。眉間の奥がびりびりと痛み、嫌な予感が全身を支配する。

理屈ではなく本能で、雷真は危険を感じ取った。

そして、現実はず感を裏切らない。

大地を裂き、土をまき散らしながら、砲弾のような『何か』が飛んできた。

中央講堂のバルコニーには、いくつか、優美なテーブルが置かれていた。

学生たちが自由に休めるようになっていた。普段は学生たちで賑わう場所だが、日曜の午前中なので、人影はまばらだ。

そのテーブルのひとつ、トータス寮が見下ろせる席に、女が座っていた。

大きく胸のあいた、特徴的な着物姿。うっすら薄い薄化粧——にもかかわらず、ぞっとするほど色気がある。キセルに煙草を詰める姿は、一枚の絵画のように決まっていた。手つきは優雅で、無駄がなく、何より美しい。

硝子、と呼ばれている女だ。

日本が誇る人形師、稀代の名工（花柳斎）。

彼女の風体、眼帯でも隠しきれない美貌は、恐ろしく目立つ……はずだが、通り過ぎる学生たちは目もくれない。それどころか、気付いてもいない。信じられないことに、どうやら「見えていない」ようだ。

硝子はキセルを吸い、煙を吐き、灰を捨てた。一服で満足したのか、新しい煙草を詰めることはせず、ゆったりと眼下を見渡す。

学院は活気づいていた。夜会の舞台となる広場も、既に設営が終わっていて、式典用の幕やら審判用の天幕やらが設置されている。学生たちはそわそわとして、祝祭日のように

浮き足立っていた。

視線を横にずらすと、トータス寮の古びた外壁が見える。その手前には、寮へと続く樹のトンネル。あまり手入れの行き届いていない、うっそうとした林の中、唐突な〈白〉の色彩を見つけて、硝子はそこに目を留めた。

それは、少女の髪の色だった。

真珠色の髪を持つ、風変わりな女子学生が、林の中に立っている。

両手を天に伸ばし、魔力を集中させている。それは基礎的な魔術の訓練法で、精神統一の行だった。人目につかない場所で、自主的に訓練しているらしい。

しばらく、硝子はじっと少女を眺めていた。

やがて何かに気づき、眼帯に手を伸ばした。

ダイヤルを回すと、かしゅん、かしゅん、とシャッターが開閉し、三つのレンズが次々に入れ替わる。硝子はそのひとつ、赤いレンズで少女を観察した。

何が見えるのか。硝子は少し考え込み、そしてため息をついた。

「……そういうこと。可哀相な子ね」

憐れむような目をする。

そのとき、硝子のすぐ近くを、背の高い女が通りかかった。

赤い髪をアップに留め、教官服の上から白衣を羽織っている。



雷真<sup>らいしん</sup>の担任教授キンバリー。その青い瞳<sup>ひとまなこ</sup>が、硝子<sup>硝子</sup>の方に向けられ——そして。一瞬、交差しないはずの視線が交差した。

キンバリーは足を止めず、何事もなかったかのように通り過ぎる。数歩行ったところで、

「ふ」

と、小さく含み笑いをした。

硝子<sup>硝子</sup>も微笑<sup>ほほえみ</sup>み、再び視線を樹のトンネルに向けた。

その瞬間、硝子の視線の先で、巨大な魔力が膨れ上がった。

## 5

飛んでくるものの正体を、雷真はつかむことができなかった。

空気がゆがみ、波打っている。言うなれば、実体<sup>やいば</sup>のない刃。不可視の刃<sup>やいば</sup>が幾重<sup>いくえ</sup>にも折り重なり、渦巻き、地面をえぐり取りながら突き進んでくる！

見えない「何か」に断裁される土と砂。その直径は一メートル近い。あれに巻き込まれたが最後、雷真はミンチにされてしまうだろう。

とつくに体は動いている。雷真はイナゴのように跳躍した。

全身のバネを使い、余裕をもってかわした……つもりだったが、魔術が及ぶ範囲は見た目以上に広がったようだ。

ばしっ、と左腕に軽い衝撃が走り、制服の袖がざっくりと切れた。

鈍い感覚。痛みはない。それでも、左腕は使わず、右半身から着地する。くるりと回転して立ち上がり、油断なく身構えた。

誰の仕業かはわかっている。この魔術は、既に一度、見ている。

ついに、なりふり構わず強硬策に出たのだろうか。だとしたら、かなりまずい。夜々がくるまで、持ちこたえることができるかどうか……。

「だめ！ ラビ、めっ！」

ところが、襲撃者に雷真を攻撃する意志は——余裕は——ないようだった。

フレイがラビに抱きついて、必死に押しとどめている。

彼女の全身から、目に見えるほどの魔力が漏れ出ている。だが、それは自発的な行為ではないらしい。フレイは狼狽した様子でラビの首にしがみついていた。

ラビは明らかに様子がおかしい。

第一に、眼が違う。普段つぶらな眼が、今は獠猛な野獣のそれだ。牙をむき出し、唾液をしたたかせ、血に飢えた獣の顔で雷真をにらんでいる。

トラブル？ 機巧上の、異常か？

「おい、どけ！」

びくっと振り向くフレイを無理やり引きはがす。ラビが雷真の喉笛のどびしやえに飛びかかってくるが、雷真は自ら後ろに倒れ込み、巴投げとらえなの要領で蹴り上げた。

くるっとうつ伏せになりながら、腰のハーネスに手を伸ばす。円筒形の容器を抜き取り、片手で安全ピンを引き抜く。ラビが着地し、こちらに鼻先を向けた瞬間、手にしたものを投げつけた。

ずばんっ、と耳をつんざく破裂音。ぶん殴られたような衝撃と、暴力的な閃光せんこうが生じ、視界を激しく揺さぶった。

フレイが目を回し、引っくり返る。ラビも二、三步後退し、ぱたりと倒れた。

煙を追い払いながら、雷真はゆっくり立ち上がった。

まずはフレイを抱き起こし、ぼしぼしと頬ほおを張る。

「おい、しっかりしろ。大丈夫か？」

「う……う？」

泳いでいた視線が定まり、焦点が合う。その途端、フレイは飛び起きた。

「ラビ！ ラビ！」

「心配するな。今のはスタングレネード、殺傷用じゃない」

フレイがラビを抱き起こす。ややあって、もつたりと首を起こしたラビは、きょとん、

としていた。首を傾げ、ビスビスと鼻を鳴らす。

いつもの駄犬——もとい、ラビだ。

フレイはラビの首にしがみつき、ぎゅーっと抱きしめた。

それから、思い出したように雷真を振り向き、丁寧にこうべを垂れた。

「ごめりがとう……」

ごめん＋ありがとう、らしい。

「よくわかんねーが、今の対応でよかったんだよね？」

「うん、ありが……う？」

「どうした？」

「……ケガ、してる」

じつ、と雷真の左腕を見つめる。

左腕の傷は思ったよりも深かった。皮膚がざっくりと裂けている。かすめただけでこうなるのでは、直撃していたら、骨ごと切断されていただろう。

フレイは腰の後ろに手を回し、ぱかっとポーチを開けた。消毒薬と絆創膏を取り出して、慣れた手つきで応急処置を施してくれる。

「悪いな。つか、あんた、いつもそんなの持ち歩いてるのか」

「私……ケガとか……多いから」

「ドジだもんな」

「ドジ……」

ショックを受けたらしく、「ドジ……」と繰り返す。

「で、何があったんだ。今のは何だよ？」

フレイは急に黙り込み、うつむいた。

「あんたが俺を狙った、ってわけじゃねーんだろ？ 何で魔術が起動したんだ？」

「う……ごめんなさい」

じんわり、目尻に涙が浮かぶ。

「泣くな。別に怒ってるわけじゃない」

「怒ってる……」

「怒ってねーよ」

「怒ってる……」

「怒ってねーって。ただ、気になったただけだ。様子が変だったからさ」

フレイはだんまりを決め込んでいる。雷真はため息をついて、

「この際、事情をぶっちゃけろよ。俺は悪党だが、鬼じゃあないぜ。棄権するつもりも、負けてやるつもりもねーが、配慮なら、してやれるかもしれない」

フレイは迷ったようだ。視線を泳がせ、戻し、不安げに雷真を見上げて――

やつぱり、やめる。怖じ気づいたのかもしれない。

「ここまできて、やめるなよ。話せ。何で俺を暗殺しなくちゃならない？ あんたは何を抱え込んでる？ それから、〈剣帝〉とは何が理由でこじれ——」

「抹殺しましょう雷真」

突然、別の声が割り込んだ。

フレイの表情に集中していたせいか、雷真も彼女の接近に気付かなかった。

ぬうーっと現れる夜々の影。

夜々はせつば詰まった様子で、まくし立てるように言った。

「機巧魔術に訴えた以上、このひとは名実ともに暗殺者です。夜々にひと言、『倒せ』と命令してください。夜々は完膚なきまでに叩きのめします」

「……そうは言うけどよ」

「決断してください！ このままじゃ本当に危険です！ 雷真が——」

「俺のことなら心配するな」

「ふたつの脂肪の塊で骨抜きにされちゃいます……」

「うん。本音が漏れてんぞ」

「とにかくつ、女狐は皆殺しにすべき——あーっ！」

夜々が気付いたときにはもう、フレイは距離を稼いでいる。

ラビの背中にしがみつき、マフラーをなびかせて遠ざかる。フレイが案外器用なのか、ラビが上手いのか、そんな姿勢でも振り落とされない。

バツの悪い沈黙。

ややあって、夜々はひくつとしゃくり上げた。

ほろほろと泣き崩れる。魔力が勝手に発動して、落ちた涙は即座に結晶化し、鋼の硬度を持つ水玉になった。

「おい、そんなに泣くな。どっか痛むのか？」

「ひどいです雷真……。夜々を遠ざけて、二人で逢引きなんて……」

「俺は片腕を失くしかけたからな？ そんな逢引き、聞いたことないからな？」

しくしく。しくしく。夜々はかなりヘソを曲げている。ここ数日の騒動に加え、昨夜もいろいろあっただけに、いつにも増して不安定だ。

こんな調子で今夜の初戦に差し支えては困る。自分は何も悪くないのだが、雷真は相棒の機嫌を取ることにした。

「ほら、機嫌直せよ。俺は三流の人形使い、おまえだけが頼りなんだぞ」

しくしく。いつにも増してしつこい。

「……じゃ、どうすりゃ機嫌を直してくれるんだ？」

刹那、夜々はきらきらと瞳を輝かせた。まずい———と思ったが、もう遅い。

夜々は両手を組み、目を閉じて、そっと顔を突き出した。

……この体勢は、まさか。

接吻を、しろと？

たたり、と冷たい汗が背中に落ちる。間の悪いことに、周囲にはやじ馬が集まってきていた。今の騒動を聞きつけて、様子を見にきたのだろう。のみならず、ここは寮の真ん前だ。窓という窓から、無数の視線が注がれている。

「雷真……早く……♡」

甘えた声で急かしてくる。人前でそんなことできるかつ、と思う反面、無視すれば後が怖い。それはもう、ものすごく。

だらだらと脂汗を流す雷真。鏡を見せられた蛙のごとく固まっていると。

不意に、何者かの気配を感じた。

音もなく忍び寄ってくる。速い。人間のスピードではない。あっと思ったときにはもう、背中に肉迫されていた。

とんつ、と何かが背中に当たる。

それが凶刃なら、雷真は死んでいたところだが。

「雷真！ 久しぶりー！」

背中に抱きついてきたのは、ふわりと軽い、少女の体だった。





無邪気に笑う少女を見て、雷真と夜々は同時に声をあげた。

「小紫！」

## 6

何か飲むかと訊いたところ、小紫は「ミルクー」と言った。  
寮の自室。小紫はにこにこ機嫌よく室内を見回している。

顔の造作は夜々に似ている。息をのむほど美しい——のに、美しさよりも可愛らしさを感じさせる造形だ。屈託のない表情と、左右で結った紅葉色の髪が、夜々よりずいぶん子どもっぽく見える。足をぶらぶらさせて、嬉しそうにミルクを待つ姿は、仔猫を思わせてキュートだった。

不思議と胸が痛むのは、先ほど飛びつかれたことが、苦い記憶と重なるからか。

雷真は食堂で今朝のミルクをもらい、温めてもらって、出してやった。

「おまえ、ちよつと大きくなったんじゃないか？」

「えへへー、わかる？ もんでみる？」

「はだけるな！ 胸じゃなくて背丈の話だ！」

「やつとセルの分裂が落ち着いてね、設計通りのバランスまで伸びたんだよー」

「へえ。よくわからねーが、もうすぐ夜々と並びそうだな」

「雷真がもんでくれたら、姉さまより大きくなるかも♡」

「胸から離れろ！ 背丈に戻れ！」

「背のことなら、安定期に入ったから、これ以上は伸びないよ」

「安定期？」

小紫は両手でマグカップを持ち、ふーふーと冷ましながら、

「オトナってことだよー。もう、雷真のお嫁さんにもなれるからね♡」

「うふふ、小紫ったらお茶目ね、うふふ。姉さまから、ちよっとお話があります。ここに座りなさい。こーむーらーさーきー！」

ばんばんと小上がりの畳を叩く夜々。

「やめろ、夜々。せっかく導入した小上がりを壊すな」

「そうだよー。そんなふうにならぶと、雷真に嫌われちゃうよー」

がーん、と音がしそうなほどの衝撃を受け、夜々は硬直した。

「そんな……雷真……夜々のこと……嫌い……!?」

また面倒なことになりそうだ。雷真は頭痛を覚えたが、とりあえずは無視して、

「で、硝子さんは何だっけ？」

「フレイさんってひとのこと、知りたいんだよね？」

「ああ——って、俺が電話したのはついさっきだぜ？　もう調べがついてるのか？」

「雷真、今夜は夜会で忙しいでしょ？　だから、早めに動いたの」

何でもないことのように言う。だが、もちろん、そんなことができるはずもない。軍は何か、雷真の知らない理由で、前もってフレイのことを調べていたのだ。

小紫は雷真の要請を受けてやってきた……のではない。

思うに、もともと、やってくる予定だった。

雷真がSOSを出すまでもなく、硝子はフレイの背後を探っていた？

「おまえがわざわざ現れたってことは、おまえの力を使わなくちゃならないってことだな。つまり——これから、どこかに行かなきゃならない？」

「さすが、雷真は察しがいいねー」

につこりと、無邪気に微笑む小紫。

「軍部もね、完全につかんでるわけじゃないの。でも、そこに行けば、フレイさんのことも、軍部が知りたいことも、全部わかるって話だよ」

軍は雷真を使ってDワークスに探りを入れようとしているのだ。英国軍の機密に関わることもかもしれない。

雷真の脳裏には、先ほどのラビの姿が浮かんでいる。牙をむいた獠牙な顔。そして暴走。あの大型自動人形には、何かネタがある。

「要は、軍の命令なんだな。わかった。行こう」

「待ってください雷真。半日もしないうちに、夜会が始まっちゃいます！」

夜々が心配そうに口を挟む。雷真は笑って、

「俺は軍の走狗。密偵が本来の職分だ。そういう契約だろ？」

「でも……いえ、わかりました」

不安を断ち切るように、うなづく。夜々は、きりつと決意を秘めた目をして、

「おとします雷真。雷真が行くところ、お風呂の中までも」

「風呂の中には入ってくるな」

「姉さまはきちやだめだよー」

マグカップを傾けながら、小紫が言う。

「今回はー、私と雷真、二人つきりで行くように言われてるからね」

「そーそんない」

「じゃあ行こー」

小紫はマグカップを置き、雷真に腕をからめた。兄に甘える妹のような仕草だが、当然、夜々が黙っているはずはない。

「ま、ま、待ってください雷真！ 夜々も行きますー」

「だめだ。もしもの場合を考えろ。おまえが学外に出たとわかったら、英国政府に没収さ

れちまう。二度と会えなくなるかもしれない。そんなのはゴメンだ」

「雷真……そんなに夜々のこと……♡」

「それに、硝子さんの命令だ」

びきつ。

「また硝子、硝子、硝子……っ！ 硝子が死ねって言ったら死ぬんですか!？」

「バカ、おまえ、そんなわけ……どうだろう?」

「悩まないでくださいっ」

泣きながら怒る夜々の頭に、ぼむっと手を置いて黙らせる。

かつて幼い妹にそうしたように、くしゃくしゃと髪をかき回し、優しく言った。

「すぐ戻ってくるから、大人しく待ってろ。な?」

「は……はい♡」

ころつと表情が変わる。夜々は頬を染め、機嫌よくうなずいた。

「行くぞ、小紫」

「おっけー。それじゃ、雷真のをちよーだい。私の中にたっぷり注ぎ込んでね!」

その台詞のどこに反応したもののか、きゆううつと夜々の瞳孔が開く。

「俺たち二人を隠蔽するのに、そんなに魔力がいるのか?」

「強めにかけるからね。視覚だけでなく、聴覚と、嗅覚も無効化するよ」

「目、耳、鼻を騙すのか。やけに嚴重だな」

「人間に対しては、完全なステルス状態になるよ。今ここでエッチなことしても、もう姉さまにはわからないからね♡」

夜々はばくばくと、金魚のように口を開閉した。気の早い涙がもうにじみ、わなわなと肩が震え出す。せつかく機嫌がよかったのに、台なしだ。

「ちょ……夜々、わかつてるよな？　もののたとえだからな？」

「うう……」

さつさと出かけよう。雷真は魔力を練って、小紫の背中に流し込んだ。

魔術回路（八重霞）が起動する。構造は把握していないが、制御を小紫に委ねることで、魔術は問題なく発現する。それが機巧魔術のいいところだ。

やがて、夜々の焦点がずれ、雷真を通り抜けた。

瞳には映っているが、夜々はもう、雷真を見ていない。

「さあ、行こー」

という小紫の声も、夜々には聞こえていないらしい。無論、部屋の外でも効果は続く。すれ違う寮生たちの誰ひとりとして、こちらには気付かない。色も、音も、匂いさえ感じてはいないようだ。

彼らに衝突しないよう、廊下のすみを歩きながら、寮の外へ出る。

歩きながら、小紫がくすくすと笑い出した。

「やっぱり、雷真らいしんは優しいねー」

「何だ、やぶからぼうに……。別に優しかねーさ。むしろ残酷な奴だよ。夜々ややをいいように利用して、自分の復讐ふくしやうを果たそうってんだからな」

「ふふっ」

なぜか笑い続ける小紫。その横顔は、どことなく嬉しそうに見えた。

「で、これから、どこに向かうんだ？」

「えっとね……。孤児院！」

「孤児院？」

そして、小紫は言ったのだ。

「フレイさんの『おうち』だよー」





## Chapter 3 くだらない質問

### 1

見えていないとわかっていても、学院のゲートを出るとき、体が強張った。  
雷真は素通りできるが、となりには小紫がいる。銃眼からのぞく鉄のパレルが、今にも火を噴くのではないかと、ガラにもなく不安になった。

幸い、銃口は沈黙を守った。

門を出て、通りを少し行っただころに、自動車が停まっていた。

「軍の車だよ。乗って乗って」

小紫に手を引かれるまま、乗り込む。運転手はすべて心得ているらしい。車体の揺れで「誰か」が乗ったことを理解し、ただちに車をスタートさせた。

市街地を突っ切り、郊外へ向かう。舗装路が切れたところで太陽が隠れ、小雨が降り出し、農道はたちまちぬかるんだ。

怪しまれるのをさけるためか、目的の〈孤児院〉が見える前に車は停まった。



小紫に先導されながら、徒歩で進むことしばし。

前方に富農の家らしき建物が見えてくる。

石造りの二階建て。二棟からなり、造りも立派だ。敷地の中には背の高いサイロがあり、本造の家畜小屋が建てられていた。

「牛舎？ あれ、牛舎だよな？」

「うん。でも全然、牛のにおいがしないねー」

くんくんと小鼻をひくつかせる小紫。牛糞の臭気は、確かにしない。

「どう見ても孤児院って感じじゃないな。本当にここか？」

「ここだよ。硝子の宿から方位四三・一八九度、距離二二・五四六キロメートル」

小紫の言葉に間違いはなかった。敷地の入口に看板が出ていて、はっきり「孤児院」と書いてある。表示によると、管理者は近くの修道院だ。

看板の横をすり抜け、敷地に入っすぐの場所に、粗末な小屋があった。

もとは小作人の休憩所だったらしい。門番らしき男が詰めていたが、もちろん、こちらには気付かない。あくびをしながら、ほんやり農道を眺めていた。

そのかたわらにマスクेट銃が置かれているのを、雷真は見逃さない。

（いやに嚴重だな）

このあたりの治安は悪くない。門番を置いたり、武装する必要はない。

怪しみつつ、敷地の奥、建物の方へと向かう。

近くで見ると、かなり立派な建物だった。規模が大きく、堅牢だ。これを建てた人物は、かなりの金持ちに違いない。

不思議なことに、窓には鉄格子がはめられていた。

「あ、見て、雷真。わんこ！」

小紫に上着を引かれ、牛舎の方を振り返る。

大きくあいた入口から内部が見える。内部は金網でケージが作られ、牛の代わりに犬が入れられていた。

うずうずと、そちらに行きたそうな小紫。彼女は少し奔放で、放っておくと薬のように飛んでいってしまう。仕方なく、雷真は牛舎の方に向かった。

グレートデン、ゴールデンレトリバー、シェパード、ドーベルマン、コリー。さらに、それらの雑種も混じっている。警察犬、もしくは軍用犬に使われるような犬種ばかりだ。

毛艶は今ひとつで、足や肩を鉄の装甲がカバーしていた。

察するに、自動人形。

犬種は違うが、ラビの同型機と見て間違いない。

雷真が牛舎に入り、小紫が金網にはりついていても、犬たちはみな眠っていて、こちらには気付かない。稼働レベルが落ちているようだ。もっとも、仮に万全の状態だったとしても、

小紫の隠形は彼らの感覚を欺いただろう。

「いいな。かわいいな。飼いたいな」

小紫は金網に腕を突っ込み、触りたそうにしたが、手が届かない。

小紫の白い腕がかすめても、大型自動人形は目を覚まさなかった。ピクピクと痙攣するまぶたや耳が、本物の犬にそっくりだ。

ふと、強烈な違和感にさらされ、雷真は立ち止まった。

何だ？　こいつら、自動人形にしては——やけに生っぽくないか？

ロキの自動人形ケルビムとは、まったく逆の方法論で作られている。どちらかと言えば、夜々に近い。生き物っぽさを追求した自動人形だ。

（ここまで犬っぽい必要が、どこにあるんだ？）

軍事に使うなら、もっと機械的な方が「らしい」気もするのだが。

首をひねりつつ、奥へと進む。

奥の突き当たりには、石造りの小部屋があった。

ここだけ、妙に堅固だ。分厚い扉は鋼鉄製。魔術的な封印が施されている。のぞき窓には鉄格子。何かに似ていると思って、気付く。

——牢獄だ。

「雷真、どうしたの？　そこ、気になるの？」

「開けてみようぜ」

「えー！ さすがに扉が動いたら、わんこにわかつちゃうよ！」

「警報結界のたぐいは見当たらない。静かに開けて、元に戻せば、大丈夫だ」

ボーチから工具を取り出し、錠前を外しにかかる。雷真が立てる音は、第三者には認識されない。カチャカチャやっついていても、犬たちは反応しなかった。

かちやり、と小気味よい音がして、錠は外れた。

そつと、開けてみる。

「……カラ？」

中には、誰もいなかった。

小紫と二人、静かに中へすべり込み、後ろ手に扉を閉めた、そのとき――

「何か用かい、小僧」

不意に、耳元で声がした。

2

三階建ての瀟洒な館が、森のほとりに建っている。

貴族の別宅のようなたたずまい。優美な外観を誇るこの建物こそ、グリフォン女子寮だ。

成績優秀な女子学生だけが入居を許される。

その三階、とある窓辺にちょこんと座り、シグムントが目を細めていた。

ひなたぼっこ。暦の上では夏が近付いているが、まだ風は涼しく、肌寒いくらい。それでも、シグムントは心地よさそうに翼を伸ばしていた。

「シグムントー」

不意に、下から呼ぶ声がした。

見下ろすと、黒髪の乙女がこちらを見上げている。

着物姿の艶やかな、東洋の自動人形。その外見は極めて精緻で、人間そっくりだ。

シグムントは窓を蹴り、そちらに舞い降りた。

「どうした、夜々。君がひとりとは、珍しいな」

「シャルロットさんは……？」

「眠っている。昨夜は寝つけなかったようだ」

原因は夜会だ。自分が戦うわけでもないのに、シャルはずいぶんと緊張していた。もちろん、雷真が心配だったのだから——夜々には言わない。

夜々はそんなことにも気が回らない様子で、しょんぼりとしてうつむいた。

「ふむ。しおれているな。何があった？」

夜々は無言のまま、着物のすそをきゅつと握った。

「とりあえず、かけたまえ」

庭園のベンチを示す。夜々は言われるまま、ちよんと浅く座った。ばさばさと飛んで、となりに下りるシグムント。

「どうした。何か相談があったのだろうか？」

夜々は答えない。仕方なく、別のことを言ってみる。

「雷真はどうした？」

今度は反応があった。夜々はかなりためらってから、

「ちよっと、用事があるって……おでかけなんです」

「なるほど。フレイのことを調べに行ったのか」

ずき、と痛みを感じたような顔をする夜々。

「やはりそうか。それで、君は感情を持て余しているというわけだな」

「だって……もう夜会が始まるっていうのに。雷真はそのために、海を渡ってやってきたんです。こんな大事（だいじ）なときに、いくら命令だからって……。それに、雷真は女狐（めぎつね）に甘すぎなんです。殺されそうになったのに……」

不満げだった口調は、しだいに力を失い、やがて消えてしまう。

夜々は怒っているのではない。嫉妬（しと）や不安に翻弄（はんろう）されて、苦しんでいるのだ。

それは、人間の少女が見せる表情と同じだった。

ふと、夜々は声の調子を変え、ぼつりとこんなことを言った。

「シグムントは、人間になりたいって、思ったことはないですか？」

「ふむ。くだらない質問だ——と片付けてしまうのは簡単だが。その言いざまを聞く限り、君はなりたいたいと思っているようだな？」

「人間の女の子は……ずるいです。夜々だって……もし人間だったら……っ」  
うなだれる。その目尻に、じわつと涙がにじんだ。

「もしも君が人間の少女であれば、雷真を護ることはできないだろう」

「——」

「彼を銃弾からかばうことも、彼の銃弾となることも、できはしない」

夜々は唇を噛み、苦しうに、シグムントを見つめた。

「君は極めて優れた自動人形だ。おそらくは唯一無二の高性能機なのだろうな。彼の目的は知らないが——それを果たすのは並大抵のことではなく、ゆえに彼は魔王の座を目指している。彼が君を側に置くのは、君が夜会に必要なからだろう？」

「……………」

「君が担う役目は、どんな少女にも果たし得ぬものだ。そして、彼が必要としているのは、どこにでもある普通の少女ではなく、君のような存在なのだ」

確かめるように、問いかける。





「それでも君は、人間になりたいと思うのか？」

「夜々は……」

うつむき、葛藤する。

ややあつて、夜々は切なげに眉を歪め、

「……人形で、いいです」

微笑んだ。悲しげな、しかし、少しだけ晴れやかな、痛々しい笑顔だった。

「雷真が夜々のことを見てくれなくても、夜々は雷真のお役に立ちます。雷真がたとえ、人間の女の子にうつつを抜かして、夜々のことなんか全然かまってくれなくなっても。女の子と手をつないでも、キスをして、乳繰り合っても……っ」

ばきばきと、ペンチを握りつぶし、背もたれをひっぺがす。

「落ち着け。学院の備品を壊すな」

「やっぱり割り切れませんっ」

髪を逆立て、天に向かって吠える。

「ふむ……これは私見に過ぎないのだが」

怨念じみた迫力にたじろぎつつ、シグムントは言った。

「君は極めて人間的だし、雷真は人形に対しても公正な男だ。私が見たところ、彼が君になびかないのは、人間だの人形だのが問題ではない……のではと」

夜々はきよとん、として、小首を傾げた。

「どういう意味ですか？」

「つまり、言いにくいことだが、君の人間性が少々アレなせい——下がれ！」

「え？」

間に合わない。ずどんっ、と重たげな音とともに、何かが夜々を直撃した。

巨大なハンマーに打ち据えられたような衝撃。

おびただしい血液を噴水のようにまき散らしながら、夜々はパンチを粉碎して、はるか後方へ吹っ飛ばされた。

## 3

稲妻のような戦慄が、雷真の背筋を駆けのぼった。

ささやくような声だが、あからさまな敵意を感じた。相手の気配は——直上！

反射的に身を投げ出し、床を転がる。

反転して見上げると、扉の上のでっぱりに、黒い塊が鎮座していた。

「……ラビ？」

犬だ。耳がピンと立った、オオカミのような外見。

小紫も驚いたようだ。目をまん丸にして、

「わんこが、しゃべった……？」

「そう、犬だねえ。まごうことなき、ね」

そんな二人を犬は冷ややかに見下ろす——否、目は不思議と閉じたままだ。厚ぼったいまぶたは開けず、しかし明らかに、こちらに注目している。

「でも、それとこれとは別の話さね。犬であっても、その住処では尊重されるべきだろう？ 私の領域に許可なく入りこんで、挨拶もなしかい？」

老婆のようにしゃがれた声。放つ言葉も老成している。

一瞬、シグムントに似ていると思った。だが、あちらには知性とは裏腹の若さがあつた。こちらは生命力が衰えていて、まるで死にかけの老人だ。

雷真はじつと相手を観察し——構えを解いて、会釈した。

「悪かった。俺は赤羽雷真だ。日本からきた」

「ちよつと、雷真！」

小紫があわてる。老犬は「ほう」と、感心したような声を出した。

「なまなかの心胆ではないね、小僧。侵入者が、自ら名を明かすのかい」

「あんたはしゃべれるんだな」

「私の知能、及び声帯は人間並みだよ。幸か不幸か、ね」

「話を通じるのは助かるぜ。どうしてあんたは俺たちを認識できるんだ？」

「ますます豪気な小僧だねえ。侵入者が、魔術の秘密を開き出そうってのかい」  
「教えてもらえるなら、それに越したことはない」

老犬は愉快そうに雷真を見た——否、例によつて、まふたは開けていない。だが、雷真と小紫に鼻先を向け、「見るように」顔を上下させた。

そして、あっさりと答えた。

「私には、特別な感知能力が備わっているのさね」

「だが、小紫の隠形おんぎようは完全だ。俺たちの影も、音も、認識できないはずだ」

「受動知覚パッシブセンサリでは感知できないだろうねえ。でも、私の知覚はアクティブだ」  
「能動？」

雷真は首をひねったが、小紫は理解したようだ。そわそわと周囲を気にする。

「どうやら、そっちのお嬢ちゃんお嬢ちゃんは理解したようだね」

老犬は牙をむき出した。ひよつとすると、笑った……のかもしれない。

「心配せずとも、子どもたちは眠っているよ」

「子ども？ 外の大型自動人形オートマートンは、あんたの子どもなのか？」

「一部はそうさね。でも、一部は違う。おまえが口走った通り、私はラビ——あれは正真正銘の息子だ——を含む（ガルム）シリーズのプロトタイプなのさ」

「……〈音圧操作〉の魔術回路」

「おや、詳しいねえ。そう、私たちは〈音圧操作〉の魔術回路を内蔵してる。音をおまえに放ち、返ってくる波長の変化で、私は世界を見、声を聞いているのさね」

そこまで聞いたところで、雷真はピンときた。

「あんた、禁忌人形だな？」

「禁忌とは穏やかじゃないね。どうして、そう思うんだい？」

「この近くに人形使いの気配はない。なのに、あんたは魔術を使ってる。それも、目や耳の代わりに使うような、器用な真似をな。それに、あんたはラビを『息子』だと言った。

それは生体部品を指しているんだろう？」

「ほほう、あながち馬鹿でもない……か」

気配が変わる。ひやりと冷たい、刃物のような殺気をまとい、老犬は言った。

「私がひと吠えするだけで、おまえたちは絶体絶命だが、どうするね？」

ふっ、と雷真は笑みをこぼした。

「……何がおかしいんだい？」

「悠長に過ぎるからさ。あんたにその気があるのなら、とっくにそうしてる」

「――」

「それどころか、あんたは今も声を潜めて、ほかの犬どもに騒がれないよう、気遣いまで

してくれてる。それは一体どうしてだ？」

「……本当に豪胆な小僧だね。おまけに、なかなか知恵も回る」

老犬は苦笑したようだ。それから、さばさばとした口調で答えた。

「私はとくに廃棄処分が決まってる。幸か不幸か、ね。その上、幽閉中の身だよ。この建物で好き放題してる連中に、義理立てする必要はないね」

「廃棄処分だって？ なぜだ」

「何ともくだらない質問だねえ。決まりきったことじゃないか。維持する必要がなくなつたからだよ。私を維持するには、それなりのコストがかかる——」

「ふざけるな！」

小紫がびくつと身をすくめ、縮こまる。老犬も驚いたようだ。もったりとしたまぶたを上げ、目を見開いた。

「……悪い。頭に血がのぼった」

かぶりを振り、自嘲する。

「俺はどうやら時代遅れな性質だね。効率だの、コストだの、数字がでしゃばってくるのは嫌いだ。特に、生きてる奴を数字にしやがるのは」

小紫の瞳が熱を帯びる。老犬もまた、じっと雷真を見つめた。

二人の視線をむずがゆく思いながら、雷真は思いついたことを口にした。

「なあ。俺たちと一緒にいかねーか？」

「……何だって？」

「こんな狭苦しい場所で余生を過ごすのはつまんねーだろ。俺と一緒にいりゃ、しばらく、退屈しないで済むと思うぜ。今夜から祭りも始まるしな」

老犬はまじまじと雷真を眺め、そして「ふふん」と笑った。

「本当に面白い小僧だね。ここには、何を求めて侵入したんだい？」

「実は、フレイって女に命を狙われててな。暗殺されそうになってんだ」

血相が変わる。老犬は牙をむき出し、今にも吠えかかりそうな顔をした。

「どういふことだい。おまえは、あの娘とどういふ——いや、あの娘がなぜ、そんな真似をしなくちゃならない？ おまえが何かしたのかい？」

「俺もそいつを知りたくてね。ここにくればわかると聞いて、見学にきた」

「——」

「夕方には学院に戻らなくちゃならない。案内人がいてくれりゃ、助かるんだがな」

しばしの沈黙。

やがて、老犬はふらりと立ち上がった。足腰は少しヨタっているが、まだ健康のようだ。二メートルの高さをもとせず、すくと身軽に飛び降りる。そこらの犬より、よほど頑丈にできている。



老犬は〈お座り〉し、雷真に首を差し出した。

金属で補強された、いかにも頑丈そうな首輪をはめられている。首輪からは青白い光の束――魔力の鎖が伸び、近くの鉄柱につながっていた。強制的に魔力を吸い出し、鎖の形に収斂しめようさせて、自由を奪うカラクリだろう。

「この拘束を解けるかい？」

雷真は腰のポーチから糸ノコと金やすりを取り出した。どちらも携帯用のため、小さくて扱いにくい。それでも、苦闘すること数分、首輪は切れた。

自由になると、老犬は入口の方へ向き直り、小さくしっぽを振った。

「ついてくるがいい。〈孤児院〉の中を案内してやるよ」

「助かる」

「ただし――おまえはここで、この世の地獄を見ることになるよ？」

試すような視線。黒犬の迫力はかなりのもので、地獄の番犬を思わせた。小紫は尻込みしたが、雷真は肩をすくめ、皮肉っぽく笑った。

「そんなもんは見たくもない……が、フレイの事情は知っておきたい」

「行くんだね？」

「くだらない質問だぜ」

「じゃ、行くとするかねえ。私にも、おまえの魔術をかけてくれ」

「了解だ。……そういや、あんたの名前を聞いてなかったな」

「ヨミ」

地獄の水先案内人が、よりにもよって「黄泉」ときた。

不気味なくらい、びったりな名前だと思った。

彼女が言う地獄とやらは、すぐ側にある。

4

中央講堂から少し離れた医学部校舎に、学院の〈医務室〉はある。

学院は魔術世界の最高学府——とは言っても、学生数は千と数百。医務室は診療所に毛が生えた程度のもので、常駐している医師もひとりだけだ。

今、その医務室の前に、白衣の女性教官が立っていた。

言わずと知れたキンバリー。見るからに重たげな、革のトランクを提げている。

キンバリーが扉をノックすると、中がバタバタと騒がしくなり、直後、不自然な沈黙が訪れた。

（まさか……先を越されたか？）

キンバリーはそつとトランクを床に置き、ふところに手を差し入れた。

音もなく位置を変え、冷たいダガーをつかむと同時に、扉を蹴破る……までもなく、内側から扉が開いた。

開いた扉をすり抜けて、半裸の少女が飛び出していく。

上半身だけ不自然に乱れていて、抱えた上着で胸を隠している。

女子学生の後ろ姿を見送ると、キンバリーはひどく長いため息をついた。ダガーの柄から手を離し、再びトランクを持ち上げ、医務室の中に入る。

中には、白々しく口笛を吹きながら、カルテをまとめている医者がいた。

十年前なら美青年と言われたに違いない。多少くたびれてはいるが、今でもかなりの二枚目だ。黒縁の眼鏡をかけ、びちつとネクタイを締めている。いかにも知的な印象を与えるが、決して優男ではない。眼光は鋭く、不可思議な凄みがある。

キンバリーは冷ややかな視線を医者に浴びせた。

「相変わらずだな、ドクター」

「いや、誤解だ、教授。もちろん治療だ。常識的に考えろ。真昼間の学院だぞ？ 当然、聴診器を当てるために、上着を脱がせたただけだ」

「君のプライベートを詮索するつもりはない。だが、夜のひとり歩きはさせた方が賢明だな。その股間のものを切り落とされては一大事だろう？」

端正な顔を情けなく歪め、内股になる。それから、医者は憤然として、

「詮索が目的じゃないなら何の用だよ!? 俺のお楽しみを邪魔しやがって。腹痛でも起こしたのか? 生理痛か? 更年期障害なら町医者で診てもら——」

ひゅんつ、と鋭い音を立てて、卓上のハサミが飛んだ。

無論、キンバリーが投げたのだ。目にも留まらぬ早業だった。

医者のかめかみをかすめ、ハサミは壁に突き刺さった。

「その無駄口をつぐむかね? それとも、ちょん切られる方がいいかね?」

「……すみませんでした、サー」

「私の用事はすぐ終わる。なに、ちょっと君の意見が聞きたくてね」

「意見だと?」

「ライシン・アカバネのことで」

その名前が出た瞬間、しんと空気が冷えた。

ややあって、医者はカルテを投げ出し、冷笑を頬に刻んだ。

「ふん。やつぱり、きなすったか」

「やつぱり?」

「軍か、学院か、どこぞの諜報機関か。とにかく誰かが探りにくるだろうとは思っていたよ。遅かれ早かれな」

「……なぜ、そう思った?」

「誰だって気になるだろうさ。あのヤンチャ坊主は、キングスフォートの嫡男に大恥かかせて、夜会の参加資格まで奪い取ったんだ。おかげさんで、ウォルター卿は失脚したぜ。今朝の〈タイムズ〉見たか？」

「愚問だな。毎朝、新聞を読みながらコーヒーを飲むのが習慣でね」

「へっ。ラブレターも書けなかった小娘が、立派になっちまいやがって」

メスが壁に突き刺さり、ぎいいんと背中が寒くなるような音を響かせた。ぶわっと、医者めいどのひたいに脂汗が噴き出る。

「話を戻せ。〈下から二番目〉の何が気になる？」

医者は汗を拭いながら、じつとキンバリーを見つめ、あきらめたように嘆息した。

「傷の治りが遅い」

「ふうん……そう言えば、本人も、そんなことを言っていた」

「造血も遅い、細胞分裂も遅い、栄養摂取の効率も悪い」

「……どうということだ？」

疑問を挟むキンバリーを手で制し、説明を続ける。

「だが、それは最初の数日だけだ。その後は普通に回復したよ。いや、学院のお坊ちゃんもお嬢さま連中に比べりゃ、よっぽど体力がある。見る間に傷は癒えた」

「……つまり？」

「本来は、それがあいつのベースなのさ。それなのに、戦闘の直後だけ回復力が鈍った。『治す力』が別のところにいつちまったようなもんだな。そう——まるでツケを支払わされてるみたいに。ツケって怖いよな？」

「おかしな実感を込めるな。それで、ドクターの見立ては？」

「何者かに、生命を吸い取られている」

「——自動人形の修復に充当された、と？」

「そう考えるのが自然だな。だが、普通、それには〈魔力〉を使うもんだ。〈生命力〉が充てられるってのはおかしいだろ」

「では、どう考えればいい？」

「いや、そのままでもいいんだ。第三者の〈呪い〉とか、聞いたこともない新種の〈奇病〉でなけりゃ、自動人形が吸ってると考えるしかない」

「だが……そんなことがあり得るのか？」

「何も珍しいことじゃない。よくある話さ。禁忌人形の主なら、な」

キンバリーは無言で医務室の鍵をかけ、椅子にどつかと腰を下ろした。

「詳しく聞かせてもらおう」

興味津々。自分でもそれとわかるほど、目が妖しい光を放っている。

ふう、とため息をつき、医者は憐れむような目をした。

「まだ引きずってるのか」

キンバリーはとほけて、

「何をだね？」

「おまえさんが博士号を取ったときの論文を見たぜ。『機巧魔術関連技術の対機巧戦闘への応用』——これ以上ないくらいストレートなテーマだ」

「私の論文にケチをつけたいのかね？　まあ、今にして思えば、内容的にも詰めきれず、論に拙い部分もあったと思うが……」

「そんなことを言ってるんじゃない。あの論文がまずいのは、博士の身分を踏み越えかけてるところだ。見る奴が見ればわかるぜ。あれは禁忌に片足突っ込んでる」

興味がない、という顔でキンバリーはそっぽを向いた。

医者はおも食い下がりが、論すように言った。

「学院の教授さまともなれば、十分な出世だろう。ヤバイ研究はやめて、そろそろ、自分の幸せを探してもいい頃だぜ」

「君の幸せは、女子学生にちよつかいを出すことかね？」

「そうそう、これか思いのほか役得で——いや、俺のことはどうでもいいんだよ。おまえさんの青春を取り戻せと言ってるんだ、エイミー」

「ミス・キンバリーと呼びたまえ、ドクター。そんな名前の少女は死んだんだ。あの戦争

でな。それに……残念だが、私はもう研究者で終われるような人間じゃない。私自身が望むと望まざるとにかかわらずね」

「……何だ、そりゃ。どういう意味だ？」

キンバリーは足もとのトランクを両手で持ち上げ、どんつ、と机の上に投げ出した。ロックを外し、フタを開ける。

トランクの中には、ぎっしりと隙間なく、札束が詰め込まれていた。

かくん、と医者のおごが外れた。

「ライシン・アカバネをマークしてもらおう。無論、我々との専属契約だ。英国政府も、学院も、今この瞬間から、本質的には君の敵だ」

悪魔的な笑みを浮かべ、キンバリーは問いかける。

「この金と、狙撃手の銃弾と、報酬に欲しいのはどちらかね？」

「……くだらない質問だな、教授」

医者はせせら笑った。ギラリと鋭い眼光をますます鋭くして、

「もちろん金です、サー」

と媚びた声で言った。



「ここが、フレイの部屋だよ」

ヨミの案内で、雷真と小紫は〈孤児院〉の二階に到着した。

二階には小部屋が並んでいて、まるで学生寮のような趣きだった。その一室、南東の角部屋がフレイの寝室らしい。

扉を開けるなり、小紫がふわー、と驚嘆の声を漏らした。

壁一面に写真が貼られている。

快活そうな少年と、にこやかに笑っている少女。穏やかに微笑む若い夫婦。

雷真が注目したのは少女だった。あどけない顔で幸せそうに笑っている。それがフレイだとわかるまで少し時間がかかった。今の彼女からはとても想像がつかないほど、豊かな表情をしている。怯えたところもない。

当たり前だが、フレイだって笑うのだ。そのことにひどく驚き、逆説的に、今の彼女がまったく笑わないことに気付かされた。

家族。雷真が失くしたものの。奪われたものの。

そして、フレイも失くしたものの。

写真の姉弟は幼い。おそらく、この〈孤児院〉にくる前の光景だろう。

「フレイの両親は優れた人形使いだった……と聞いている」

ヨミが写真を見上げ、心なしか、哀切あいせつを帯びた声で言った。

「アメリカの劇団で、機巧人形劇を見せていたそうだ」

「……フレイってのは、本名なのか？」

「いや、識別コードだね。ここで与えられた仮の名だよ。本当の名前は私も知らない」

「両親はなぜ死んだ？」

「コントロール中の自動人形オートマタが、制御を離れ、暴れたのさ。シヨ一の真つ最中にね。母親の血は立ち見の客にまで降りかかったそうだよ」

「……フレイが、そう言ったのか？」

ヨミはうなずき、肯定した。

小紫が口を覆うおほ。じんわりと瞳ひとみが湿り、揺れた。

写真の中の無邪気な少女と、凄惨さいさんな事故が結びつかず、雷真らいしんは戸惑とまどった。

脳裏にフラッシュバックするのは、自分自身の過去の記憶。血の海、炎の海。そして、喪失感。この痛みと同じものをフレイも抱えている……？

「どういいうきさつがあつて、おまえを殺そうとしているのかは知らないが……フレイは優しい娘だむすめ。幸か不幸か、ね」

しんみりとした口調で、ヨミがつぶやく。

「私たちにも優しくかった。毎日、貴重な休憩時間を削って、ブラシをかけてくれた。固形

飼料ばかりの私らに、肉を食わせてくれたのもあの子だ」

ヨミの毛並みはずいぶんほつれてしまっていて、つやもない。

つまり、この建物には本来、ブラシをかけてくれるような者はいないのだ。

「もちろん皆が彼女になつた。しかし、それゆえに、彼女は選ばれてしまった」

「……ラビの使い手に、か？」

「そうだ。彼女は年五千時間に及ぶ学習と教練を課され、学院に入れられた」

一年あたり五千時間。気が遠くなるほど長い時間だ。

「……幸か不幸か、なんてのは、俺にはわかんねーけどよ」

雷真は写真の中の少女を見つめ、その笑顔を網膜に焼きつけながら、言った。

「悪くはないと思うぜ。あんたみたいに、好いてくれる家族がいるのは」

ヨミは目を丸くして、それから、かすかに笑った。

白衣の男たちが行き交う廊下を、息を殺して進む。

次に案内されたのは別棟の一階。鉄格子の窓がある、あのあたりだ。

屋内の雰囲気は学校に似ていた。教室のように広い部屋がいくつか存在し、黒板が設置されていたり、運動場だったりした。

そのひとつ、食堂のような部屋で、雷真は信じられないものを目撃した。

「孤児院……つてのはあながち嘘でもないらしいな。だが……」

冷や汗をかきながら、室内を凝視する。

（これは一体、何なんだ……!?）

子どもたちが食卓に並び、整然と昼食を摂っている。パンにスープ、サラダに肉が一切れ……というメニュー。特に会話もなく、黙々と、機械のように食事を進める子どもたち——その全員に共通の特徴がある。

真珠色の髪と、紅い瞳。

フレイやロキと、まったく同じだ！

「全員がキョーダイ……なんて、そんなわけねーよな」

事実、同じなのは色だけで、顔の造作や体つきはバラバラだ。

フレイとロキは似ていた。だが、ほかの子どもたちは似ていない。そもそも、フレイの部屋に彼らの写真はなかった。フレイの肉親ではないだろう。

人種？ 民族？

特定の集団だけを集めた施設……なのか？

いや、わかつている。そんなはずはない。これは、そんなものじゃない！

「（約束された子ども）だよ」

雷真の疑念に答える形で、ヨミがつぶやいた。

初めて聞く単語だ。頭上に疑問符を浮かべると、ヨミはあきれたように、

「学院に籍を置く者が、そんなことも知らないのかい。人間の中でも、特に魔力親和性に富む個体さね。百万人にひとり程度、発生するとされてるねえ」

「おいおい……。ここは孤児院じゃなかったのかよ」

「彼らは孤児だよ。まごうことなき、ね。国内はもちろん、大陸や、はるばるインドから連れてこられた者もいる」

「だが、『百万人にひとり』なんてのが、そうそう都合よく孤児に……」

「彼らが、本物ではない、と言ったら？」

「――！」

やはり、そういうことなのか？

小紫はきよとんとしていたが、雷真にはもう、わかりかけていた。

だが、そんなことができるのか？

可能なのか？ 許されるのか？

ヨミはふらりと背を向け、低く、おし殺したような声で言った。

「行こう。もっとおぞましいものを見せてやるよ」

薄暗い階段を下りて、地下へと向かう。

湿った空気が肺を冷やす。不思議と血なまぐさい臭氣に、胸がムカムカした。ふと、後ろの小紫こむらさきが遅れがちなのに気付く。

「どうした、小紫」

「私……何だか、怖い」

ふるっ、と肩が震える。予感めいたものを覚えているようだ。

「ごめんな。だが、おまえだけ帰すわけにはいかないんだ」

そっと手を取り、握りしめる。

「ほら、俺おれにつかまれ。怖かったら、目を閉じてろ」

「うん……ありがと。少し、勇気が出た。雷真らいしんと一緒にだからね」

手をつなぎ、ヨミの後を追う。

階段の中ほどに、いかにも莽猛どうもうそうなドーベルマンが座っていた。

喘みつかれたら無事ではすまないだろう……が、ドーベルマンは反応しなかった。ヨミのように「アクティブ」な知覚を発動できない——しない——らしい。ラビと同じように、犬並みの知能しか持っていないとも考えられる。

「この先は最重要区画さね。ここの職員でも、一部の者しか入れない」

ヨミが最後の一段を下りる。階段の終点には、鉄の扉がはめ込まれていた。

扉を通して、刺すような冷気が伝わってくる。

おそらく、氷室……だ。

冬場の雪や氷、または冷気の魔術を使って作る。最近のものは空気の循環や断熱が工夫されていて、効率がいい。

扉を見る限り、ここはかなり気密がしっかりしている。構造も近代的だ。内部の気温は氷点下に近いのではないか。

雷真は再び鍵開けツールを取り出して、錠前を外した。  
音を立てないよう、慎重に扉を開ける。

吹き込んでくる冷気が鼻に痛い。内部は震えがくるほど寒かった。肌がひきつるこの感じは零下の空気。予想通り、〈冷凍庫〉だ。

「ここは？」

「肉の貯蔵庫だよ」

と答えるヨミの姿が見えない。氷室の中は真っ暗だった。

「あかりをつけるわけにはいかない。少し待ちな」

背中にくっついてくる小紫と、身を寄せ合うようにして待っていると、次第に目が慣れしてきた。どこからか漏れるわずかな光で、眼前に何かが浮かび上がる。

「――！」

思わず声を出しそうになった。となりの小紫は、びくりとのけぞった。

ずらりと並ぶガラスのケース。

不凍液で満たされた容器の中に浮かんでいたものは――

手があり。

足がある。

大きさは小さい。細い。成熟、していない。

子どもの遺体、だ。

「なん……だ……これは……!?」

実にくだらない質問だ。胃液が逆流する。さしもの雷真も気が動転しかけた、そのとき、けたたましいベルが鳴り響き、突然、扉の向こうが騒がしくなった。

「雷真！ たくさんの足音がこっちにくるよ！」

切迫した声で、小紫が叫んだ。





## Chapter 4 救われた命を

1

血をまいて吹っ飛ぶ夜々を、硝子は中央講堂のバルコニーから見ていた。

素早く視線を巡らせ、やつた者を探す。

夜々の吹っ飛び方で、射角や方位が割り出せる。付近の校舎に目をすべらせ、やがて、ある一点に注目した。

パールホワイトの反射光。

白い髪の学生がひとり、医学部の窓辺に立っている。

屋内は暗く、学生の背後は見通せない。しかし、どう見ても、大砲を設置できるようなスペースは存在しなかった。

「あいつを修復してやってはどうだね？」

いきなり声をかけられる。硝子はゆっくりと振り返った。

そこに、白衣の女性教官、キンバリーが立っていた。



挑発的な視線。その双眸は、しつかり硝子に焦点を合わせている。

硝子は微笑み、試すつもりで言葉をつぶやいた。

キンバリーは「おや」という顔をして、

「聴覚も欺瞞できるのか。悪いが、聞こえるように言ってくれないか。花柳斎殿」

硝子は微笑み、隠形の魔術を解く。通りすがりの学生たちが小鹿のように飛び上がった。いきなり着物の美女が現れたのだから、驚くのも無理はない。

「ご機嫌よう、キンバリー先生。坊やがお世話になっているわ」

「ああ、まったく手のかかるガキだよ、あれは。物覚えも悪い。生活態度も悪い。おまけに手癖も悪いようだ」

「あら、手癖まで？」

「こっそり学院を抜け出して、どこで何をやっているのかな？　それ、そんなことをしているから、自慢の自動人形があんな目に遭う」

「その口ぶり、あれが誰の仕業か、ご存知みたいだわ」

空気が張り詰める。学生たちがビクつき、二人の女を交互に見た。

ややあって、先に緊張を解いたのはキンバリーだった。

「保護者との面談は次の機会に譲ろう。それより、下の自動人形だ」

あごをしゃくって、庭園のすみ、血だまりに沈む夜々を示す。

「行って、修復してやれ。まだ、あいつを失うわけにはいかんのだろう？」

「お気遣いどうも。でも、おあいにくね。あの子はそんなにヤワじゃないわ」

「自動人形オートマトンはな。だが、〈下から二番目セカンドラスト〉の方はどうか？」

「その子のことを言ったのよ。私の坊やは、そう簡単には死なない」

確信に満ちた声で告げ、優雅な所作で立ち上がる。

そして、舞のように美しく会釈くしやくをした。

「ご機嫌よう、キンバリー先生。〈時の翁フアイトタイム〉によりしくお伝えくださいな」

ちらりと夜々を見下ろし、何もせずに立ち去る。硝子の姿は再び魔力を運び、肉眼では見えなくなった。学生たちが驚き、呆然ぼうぜんとする。

キンバリーはそれを見送り、苦笑した。

「得体の知れん女だ。もっとも、他人のことを言えた義理ではないがな」  
ひと筋、汗がこめかみに光る。

## 2

警報、なのだろう。ベルがうるさいくらいに鳴り響いている。

天井がドタドタと騒がしい。おそらく、捕り物が始まっている。しばらくすると、小紫こむらさき

が言った通り、足音は階段を下りてきた。

「雷真、どう……どうしようっ？」

雷真の腕に抱きつき、たんたんつと足踏みする。

小紫の魔術が破られたのだろうか？

それとも、この氷室に、侵入者を感知する結界が張られていたのか。

「ヨミ。あんたみたいに、俺たちを認識できる奴はどのくらいいる？」

「人形使いが制御しているのであれば、〈ガルム〉全機が可能さね」

では、今後は常に捕捉される危険があるということだ。

「小紫。さっきの——アクティブとかいう知覚を騙すことはできないか？」

「できるけど……難しいの。雷真には、まだ無理だよ」

予想通りの答え。雷真は腹をくくった。

「なら、突破するしかねーな」

「つくづく豪気な小僧だねえ。だが、単細胞は身を滅ぼすよ」

「何か手があるのか？」

「マヌケだね。逃げるに決まってるだろう」

足音が追ってくる。あせる雷真を尻目に、ヨミはひよこひよこ奥に進み、

「ほら、ここだ。こいつを開けな」

床を示す。雷真はしゃがみ込み、手探りで探った。

段差がある。鋼鉄製のプレートだ。サーボ機構でも組み込んだのか、厚みのわりに軽く持ち上げることができ、手を放すとゆっくり閉まる仕組みだった。

その下は空洞になっていて、もちろん何も見えない。

まさに奈落<sup>ならく</sup>。こゝ、と不思議な音をする。

「抜け道か？」

「いや。ゴミ箱さね」

「ゴミ箱？　じゃ、これは、どこにつなが——」

最後まで言わせてもらえない。背後から蹴<sup>け</sup>飛ばされて、雷真の体が宙に浮いた。

内臓がひっくり返るほどの恐怖、そして浮遊感。

落下の時間はひどく長く、一分ほどにも感じた。もちろん、それは錯覚だ。実際には三

秒ほどで、どぼんつ、とやわらかいものに落ちる。

音の通り、水中だった。足が着かない。何も見えない。流れが速い！

「冷てえ！」

「ガタガタ言うんじゃないよ！」

ヨミが体当たりしてくる。小紫も着水したようで、後ろで水音がした。

体感では、水温は五度もない。心臓麻痺<sup>しんそうまひ</sup>を起こさなかったのは不幸中の幸いだ。しかし、

手足の感覚はたちまち薄れ、じんわり温かくなった。

（まずいな……！）

水練は達者な方だが、着衣のまま冷水にさらされていては、いずれ溺れてしまう。急いで靴を捨て、ハーネスを外す。道具は惜しいが、命あつてのものだねだ。

「どこに続いている？ どのくらいかかる？ 追っ手をまけるか？」

「質問はひとつずつだよ。まず、行き先は機巧都市の下水道——って話だ」

「伝聞形か。おまけに下水道かよ」

「贅沢言つてる場合かい。この速度なら、すぐに出られるさ。もちろん、連中がよっぽどのマヌケなら、だけどね」

先回りして待ち伏せしている可能性がある。あるいは、追ってくるかもしれない。

それでも、泳ぐしかない。

犬かきで進むヨミに合わせ、雷真も平泳ぎで水流に乗る。小紫は案外平気そうで、着物のまま、すすい泳いでいた。

「……ごめんな、小紫」

突然言われ、小紫は驚いたようだ。戸惑うような気配が伝わってくる。

「おまえほどの自動人形を預けてもらつて、このザマだ。下手すりゃ、おまえを奪われるかもしれない。こんな状況にしちまつて、俺は……」

「そんな、違うよー 雷真は悪くないよー それに、これは半分、私のせい……なの。私、本当は、危ないの知ってて……」

「自分のバカさ加減を呪うぜ。硝子さんが手を回してくれたのに、俺は何もつかんじやない。フレイが何で俺を狙うのか、その理由もサッパリだ」

わかったことと言えば、Dワークスが怪しげな研究をしているということ。

そのくらいことは、軍もつかんでいるだろう。硝子がわざわざ雷真を派遣したのには、相応の意味と、何かしらの期待があったはずなのだ。

「くそっ。こんなだから、俺は〈下から二番目〉なんて言われるんだ！」

「おまえが〈下から二番目〉だって!?」

ヨミがすっとんきような声をあげた。暗がりの中、らんらんと目が光る。急に敵意を向けられて、雷真も鼻白んだ。

「……何だよ。どうしたってんだ、急に」

「どうしてフレイがおまえを排除しようとしたか」

低く、抑えつけるような声で、ヨミはつぶやいた。

「話は簡単さ。おまえに敗れることはつまり、計画の凍結を意味するからね……」

「計画？ 何の計画だ？」

「〈ガルム〉の量産計画だよ」

シャルの言葉を思い出す。英国陸軍の次期主力を決めるコンペティション——そこに、Dワークスも参加するのだ。

「じゃあ、やっぱり、夜会でラビを試すつもりなのか？」

「そうさ。稼動実験とデータ取りを兼ねてる」

「ラビがやられたら、どうなる？」

「当然、別機種がDワークス案として提出されるだろうよ」

雷真の脳裏に、翼を持った機械人形の姿が浮かんだ。

「ケルビム……」

「知っているようだね。(エンジェル)は別の研究所で試作された自動人形だ。単機での戦闘能力は(ガラム)をはるかにしのぐ。無機材料のみで構築されてるから、整備性も極めて良好。ただし、コストが高くつき、扱いも難しい。よほど熟達した人形使いでなければ、持て余すだろうねえ」

先の戦闘を見る限り、ケルビムは自我が未熟で、木偶に近い印象だった。複雑な動きをさせようと思えば、繊細なコントロールが必要になるだろう。

「その点、(ガラム)は新米の人形使いでも扱える。よくも悪くも犬だしねえ。整備性は悪いが、コストが安いから使い捨てにでもできる」

雷真は洪面になった。使い捨て。嫌な言葉だ。



「もし（ガルム）の計画が頓挫したら、牛舎にいた連中は、どうなる？」

「もちろん、廃棄処分さね」

その答えで、ピースが埋まった。

夜会で有用性が証明できなければ、犬たちは全員、廃棄処分。

それが、理由。雷真を『暗殺』してまで勝とうとする、彼女の事情だ！

（くそ……そんな理由——）

「雷真！」

苦い感傷を断ち切ったのは、小紫の叫び声だった。

前方、闇の中に何かが見えている。

ちらちらと揺れる光。おぼろげに暗がりを照らすのは、ランプのあかり！

猛烈な殺気を感じる。雷真は小紫の頭を抱え込み、そのまま水に潜った。

タイミングを合わせたように、頭上を何かがかすめていく。ジュツと水を蒸発させながら、壁に突き刺さったのは短剣だった。

第二射はこない。相手はこちらを見失ったようだ。暗さのせいで雷真に気付かないのか、

小紫の隠形が効いているのか。いずれにせよ、雷真は潜水して距離を詰め、いつの間にか

浅くなった水底を蹴り、飛び上がった。

狙い通り、相手の眼前だった。

やはり、敵は人形使いだ。マネキンのような機械人形を従えている。ケルビムとは違ふ人間のフォルムだが、肩から数本、棘とげのような短剣が生えている。

蹴りを見舞う。人形使いは防御もできずに蹴飛ばされ、すっ転んだ。

機械人形が困惑したように動きを止める。ケルビム同様、思考能力が弱い。足をすくつて転倒させ、背中の短剣を奪い取ろうとしたとき――

ばあんっ、と甲高い銃声が鼓膜を貫いた。

わき腹に鈍い衝撃。かすった……かもしれない。だが、アドレナリンと冷水の影響で痛みは感じない。雷真は素早く身を起こし、新手の方に向き直った。

黒服の男。銃口を向けている。自動人形は連れていない。

雷真は床を蹴り、男に向かって突進した。

そのとき、すかっとなぐさから力が抜けた。

冷水は、思いのほか体力を奪っていたようだ。脚がもつれ、動きが鈍る。

雷真はぎよっとした。銃口を目前にして、これは……危険じゃ、ないか？

直後、銃口が火を噴いた。

「夜々。しつかりしろ、夜々」

何度も名を呼ばれ、夜々はうつすら目を開けた。かすんで見える視界には、銅色の仔竜がいた。

「く……シグムント……？」

しだいに意識がはつきりしてくる。

と同時に、激しい痛みを思い出す。数万本もの針を刺されたような苦痛。痛みのひどい部位に目をやって、夜々はびくりとした。

胃のあたりを中心に、大穴があいている！

「どうだ、夜々。無事——のはずはないだろうが、どんな具合だ？」

「活動限界は、超え……てません……」

「それはよかった。こんなものを腹に受けて、よく生きのびたものだな」

かたわらを示す。そこに、どんぐりのような形の砲弾が投げ出してあった。夜々の胴体から、シグムントが引っこ抜いたのだろう。血でドロドロに汚れているが、表面はつるりとしていて、傷はない。

「夜々は……世界最高の、自動人形……です。このくらい……本当なら、傷も」  
微笑もうとして、できず、血を吐く。

「無理をするな。今、技師を呼んでくる」

「いえ……いいです。夜々は、普通の自動人形とは……違うんです」

「強がりを言っている場合では——いや、構造のことを言っているのだな？」

「はい……。普通の修理では……夜々は……直せません」

「では、どうすればいい？」

「雷真……雷真に……会いたいです……っ」

ぐすつと涙ぐむ。衰弱しているせいで、気持ちも弱くなっている。夜々は小さな子どものように、うえうえと泣き出した。

「ふむ。彼の魔力が頼みの綱か」

自動修復に任せるしかないようだ。シグムントは困ったようにこうべを巡らせ、ふと、庭園の端を行き過ぎようとする者に気付いた。

見目麗しい、金髪的女子学生。手足を不自然に縮めて、きよろきよろと落ち着きなく、何かを探している。

「シャル。こっちだ」

「シグムント！ 勝手にいなくならないで！ お昼のチキンを小エビにするわよ！ 心配したじゃない！ さっきの音は何？ ひとりで出歩かないで！」

「落ち着け。言いたいことはわかるが、そんな場合ではないのだ」  
シャルはぶつぶつ言いながら近付いてきて——ぴょんと跳んだ。

「何よ、これ……どうしたの!？」

「いいところへきた。手を貸してやってくれ」

「手をもって……こんなの、医者の仕事だわ!」

血の匂いにやられたのか、ふらりと貧血を起こしかける。

「ジャバンって国はどうなってるのよ。シグムントよりもナマモノだなんて」

「これでは、設計者でなければ修復できまい。つまり——」

「魔力が欲しいのね。わかったわ」

シャルはなるべく傷口を見ないようにして、腕まくりをした。

両手を夜々に向け、意識を集中させる。青白い光がてのひらに宿り、夜々に向かって流れ出した——直後、がくがくつとシャルの肩が暴れた。

「な……につ……これ、は……ああああああ!」

明らかな異常。シグムントが体当たりして、シャルを弾き飛ばす。

魔力の連絡が断たれ、シャルは自由を取り戻した。

己の手を見ると、爪が白化し、指先がカサカサになっていた。

水気が飛び、血色が悪くなっている。まるで老人の手のようだ。

「無理……しないで、ください……」

シャルの恐怖心を見透かしたように、弱々しくつぶやく夜々。

シャルはむつとして、再び夜々の前に座った。

「バカにしないで。このくらい、無理でも何でもないわ」

「でも……シャルロットさんは……敵……」

「私は女王陛下から一角獣の紋章を賜った、プリュー伯爵家のシャルロットよ。貴女たちとは、正々堂々、夜会の舞台で決着をつけるわ」

「でも……女狐のお世話になるなんて……」

「口の減らない子ね。黙って直されなさい」

氣迫を込め、魔力を振りしほる。

十分に魔力を集中させると、肉体の損耗は起きなかった。だが、代わりに魔力を奪われる。見る見る力を吸い出され、さしものシャルも息が上がった。

それでも、誇りをかけて魔力を練る。夜々のボディはただちに修復を始め、おそるべき速さで傷をふさいでいく。

「もう、いいです……」

という声で我に返る。氣がつくと、夜々の傷には薄皮が張っていた。

「ありがとうございます、シャルロットさん。夜々はもう大丈夫です」

氣が抜ける。シャルはくたつ、として、へたり込んだ。

いつの間にか、周囲にやじ馬がたかっている。風紀委員の姿もある。彼らは手早く庭園

を封鎖し、学生たちから聞き取りを始めた。

そこへ、仔竜がばさばさと降りてくる。

「シグムント。どこ行つてたのよ」

「探し物だ。何も発見できなかったがな」

砲弾に首を向ける。夜々もシャルもはっとした。

「……この砲弾、七十ポンドはあるわね。これを撃つ大砲だけでも、かなりの大きさよ。どこに設置したのかしら？」

「大砲とは限らない。その砲弾は尖頭形だが、旋条痕がないだろう？」

シグムントが言う通り、砲弾はつるんとして、綺麗なままだ。

「滑空砲を用いたのであれば、砲身を必要としない発射方法があるのだ」

「じゃあ、これをぶつ放した不埒者は、どこからでも攻撃できるってこと？」

「おそらく、そういうことに——まずいな」

不意に、シグムントの声が硬くなった。

「学院の外で狙う方が、はるかに楽だ。もしも敵——ひとりとは限るまい——の目的が、雷真を棄権させることだとすれば」

意識が朦朧としているのか、夜々は理解できず、首をひねった。

シャルがじれったそうに、その肩を揺さぶる。

「ライシンが危ないってことよ！　こんなの食らったら、いくらあいつが野蛮人<sup>やばんじん</sup>の変態でも、ペしゃんこだわ！」

「——雷真<sup>らいしん</sup>！」

夜々<sup>やや</sup>は駆け出そうとして、ばたん、とコケた。まだ体力が戻っていない。

あわてて助け起こすシャルとシグムント。その様子を、人だかりの中から、真珠色の髪の乙女が青ざめた顔で見つめていた。

## 4

銃声はどぎつい残響<sup>ざんきやう</sup>をともなつて、下水道にこだしました。

それはすぐさま、悲鳴に取って代わられる。

悲鳴をあげたのは雷真ではなく、目の前の男だ。腕に老犬が噛<sup>か</sup>みついている。その際に、雷真は銃をもぎ取り、男を蹴<sup>け</sup>り倒した。

——しかし、それはいささか、油断のある行為だった。

敵は二人きりだと、無意識に決めつけていた。

背後で魔力が膨れ上がる。気付いたときにはもう遅い。そこから先のことは、すべて、スローモーションのように感じられた。



背後にいたのはマネキンっぽい自動人形<sup>オートマトン</sup>、そして人形使い。四本の短剣がマネキンの肩から射出され、雷真めがけて飛んでくる。

反応できない。だめだ。死ぬ！

そのとき、黒い影が雷真の視野をさえぎった。

ずとどんつ、と突き刺さる短剣。それは瞬時に影を焼き、引き裂く。

短剣は勢いを失い、あるいは軌道がそれて、雷真には当たらなかった。

考えている余裕はない。雷真は迷わず発砲し、人形使いを撃った。

軍事訓練以来の発砲。しかも暗がりの中での射撃だったが、弾丸は命中した。ふとももを撃たれ、人形使いがのたうち回る。

死んではいけない。だが、魔術を使える状態ではないだろう。

動きを止めるマネキンを無視して、雷真は黒い影——ヨミに駆け寄った。

ひと目見て、ひどい有様だった。

下半身がない。どんなふうに当たったものか、見事に分断されていた。本物の犬ならば即死だが、ヨミは自動人形<sup>オートマトン</sup>。まだ意識がある。

断ち切られた上半身から、いくつかコードがはみ出していた。だが、漂う臭気はまぎれもなく血のにおい。コードを包み込んでいるのは、本物の肉！

道理で泳げるわけだ。ヨミのボディは、大部分、生体部品でできていた。

いや、これはまるで、逆のような――

「しっかりしろ。何で俺をかばった。俺が死ねば、フレイは不戦勝だぞ?」

ヨミは笑うだけで答えなかった。

じっくり容態を確かめている暇はない。今の戦闘音を聞きつけて、足音が響いてくる。

ランプの光が三つ、四つ。人数が多い。見つかったら、一巻の終わりだ。

「雷真、こっちにハシゴがあるよ! ここから上がれそう!」

小紫がすぐ横の暗がりを示す。

「背負うぞ、ヨミ。少し揺れるが、我慢してく――」

がじつ、と腕に噛みつかれ、雷真はヨミを取り落としてしまった。

「さっさと行きな……ぐずな小僧だね……!」

ヨミの瞳から輝きが失せ、瞳孔が開いていく。

もはや〈生命〉を維持することができないのだ。〈イブの心臓〉を破損したのか。雷真

が魔力を送り込んでも、魔術回路は反応しなかった。

「最期に、楽しい……時間が過……せた。礼……を言う……よ!」

「礼を言うのは俺だ。思は必ず返す。ここを切り抜けた後で――」

「行ってくれ……!」

懇願するような、強い言葉。思わず、手を止めてしまう。

「私は、ここで眠りたい……のさ。子どもたちと、一緒にね……」

ようやく、雷真は理解した。

先ほどの抜け穴を、ヨミは「ゴミ箱」だと言った。

その言葉が意味することはひとつ。Dワークスの連中は、魔棄が決まった〈ガルム〉を、公<sup>おおやけ</sup>にできないパーツと下水道に流していたのだ！

この水路は、棄<sup>す</sup>てられた〈ガルム〉の墓場。

「雷真！ 相手が近付いてくるよ！」

「……くそったれ！」

引き裂かれるような痛みを振り切り、雷真はハシゴに手をかけた。

ヨミの厚意を無にしたくない。その一心で、彼女を見棄てた。

一心<sup>いっしん</sup>不乱<sup>ふらん</sup>にハシゴを上げる。そうして、感覚的には十メートルも上がった頃、耳を塞<sup>ふさ</sup>がれるような違和感にとらわれ、直後、足もとから爆音が響いた。

下水道の天井が崩れたらしい。察するに、それはヨミの仕業<sup>しわざ</sup>だ。最期の力を振りしほり、魔術で敵を足止めたのだろう。

（くそったれ……くそったれ！）

己の無力を呪いながら、奥歯をきつく噛みしめながら。

ほかにどうすることもできず、雷真は逃げた。

## 5

鮮やかな夕焼けが、リヴァプールの市街を照らす。

重厚な学院のゲートもまた、オレンジ色に染まっている。

そのゲートの真下で、真珠色の髪カミの少女が、ぼんやり立ち尽くしていた。

フレイド。かたわらには〈お座り〉したラビもいる。

警備員が長銃を構え、あからさまに狙いをつけているが、二人は気にしたふうもなく、じつと通りを眺めていた。誰かを待っているようだ。

「こんなところで何をしている」

不意の声に飛び上がる。ビクつきながら振り向くと、背後にロキが立っていた。敵対的な視線が怖くて、フレイドは思わず目をそらした。

「寮に戻れ。警備の手を煩わせるな。一体、何がしたいんだ」

「う……ライシン……待ってる」

「あいつなら、もう戻ってこない」

フレイドは驚き、怖いのも忘れて、ロキに視線を戻した。

ロキは無表情のまま、淡々と言った。

「よかったな。あんたが手を汚すまでもなく、あいつはこの世から消えた。これでもう、心置きなく夜会に集中できるだろう」

「彼を……どうしたの？ 何が……あつたの？」

珍しく顔色を変え、フレイはロキに詰め寄った。

「さっき、彼の自動人形を攻撃したのも、ロキ？」

「そうだと言ったら、どうなんだ？」

ぎらりとロキの眼が光る。あからさまな威圧。フレイはひるみ——そんな自分を恥じるように、歯を食いしばって、ロキをにらみ返した。

「（下から二番目）は薄汚いネズミだ。オレたちのホームに忍び込み、秘密をかき回っていた。だから、お父さまが排除した。あいつは死んだんだ」

「勝手に他人を殺すなよ」

突然、横槍が入る。姉弟はそろって振り向いた。

ゲートの向こうに、夕陽を背に受け、立っている者がいる。

服は薄汚れ、ぼろぼろ。わき腹には血の染み。なぜか裸足。まるで浮浪者のようなりだ。憔悴した表情は、普段の彼とはずいぶん違う。

しかし、まぎれもなく、雷真だった。

ロキは目を見開き、そして憎々しげに舌打ちした。

ふいっと背を向け、去っていく。

「何だ、愛想のない奴だな」

「う……ごめんなさい……」

「何であんたが謝るんだ」

「ロキは……私の、弟だから」

「……だからって」

そのとき、〈お座り〉していたラビが立ち上がり、ふんふんと鼻を鳴らして、雷真の手  
に顔を近づけた。においをかぎ、バタバタとしつぽを振る。

「……貴方から、仲間のにおいがするみたい」

ずん、と重たいものが雷真の胃に落ちた。

反射的に言いわけを探し——あきらめる。

「……あんたに、謝らなくちゃ、ならない」

覚悟は一瞬で決まる。雷真はこうべを垂れ、罪を告白した。

「ヨミが、死んだ」

「——」

「すまない。俺が、巻き込んだ。俺が、あいつを……連れ出した」  
フレイの紅い瞳に、いくつもの疑問が浮かぶ。

なぜ、雷真がヨミのことを知っているのか。なぜ、彼は（ホーム）に行ったのか。なぜ——ヨミが死んだのか。

フレイは困惑した様子だったが、雷真の苦しげな表情、重々しい口ぶりから、彼が嘘を言っているのではないと、わかってしまったようだ。

ぼろり、と涙がひとすじ、こぼれ落ちた。

ぼろぼろ。ぼろぼろ。

「場所を変えよう。詳しく話す」

「聞きたい……けど……夜会が……始まっちゃう」

フレイは気丈に涙を拭き、時計塔を振り仰いだ。時刻は午後五時を過ぎている。夜会の開始は六時だが、間もなく、開催のセレモニーが始まるだろう。

「そうだな……悪い。詳しい話は、後です」

「……ありが、とう」

雷真は自分の耳を疑った。今、フレイは何て言った？

「……何を、言ってる？」

「ヨミ……檻の外に、出してくれたんでしょ？」

「出したは、出したが、それは俺のわがままで——」

「ヨミは、もう何年も……閉じ込められたままだったの。だから、きっと……少し、楽し

かったと思うから……」

確かに、ヨミは言った。最期に楽しい時間が過ごせたと。

雷真はきつくこぶしを握りしめた。肉が裂けそうなほど、強く握った。

「う……また、後で」

ラビに寄り添われ、とほとほと去っていくフレイ。

そのか細い肩を、はかなげな後ろ姿を、雷真は見送ることしかできなかった。

「……責めろよ、俺を！」

礼なんか言うな。俺を責めて、呪え。罵倒しろ。

責めてくれれば。ポロクソに罵ってくれれば。

悪役になりきって、倒してしまえるのに。

雷真は鉛のような足を引きずり、トータス寮へと歩き出した。

6

自室に戻った雷真を、クチナシの香りが迎えた。

「あ、お帰りなさい雷真♡」

雷真に気付き、夜々が身を起こす。まだ夕方なのに、ベッドで寝ていたようだ。はらり



と落ちた布団の下には、包帯が巻かれた胴体があった。

「どうしたんだ、おまえ！」

雷真はあわててベッドに駆け寄り、夜々の具合を確かめた。

「妙に体が重いと思ったんだ。怪我したのか。大丈夫か。痛むか？」

「夜々は平気です。もう、傷はふさがりました」

心配されるのが嬉しいらしく、夜々はにこにこしていた。

——が、雷真の格好に目を留めた途端、その笑顔が凍りついた。

「雷真こそ、どうしたんですかー ボロボロです！」

「ちよつとドジ踏んでな」

「え……小紫は？」

「あいつなら、軍のセーフハウスに置いてきたぞ」

「そうじゃありません！ 小紫が一緒だったのに！」

「そう言うな。あいつは戦闘向きじゃない——」

「はっ！ まさか、小紫といやらしいことをしていて、変な隙が……!?」

「バカなこと言ってるな。俺はどんな色魔だ」

「ああ見えて小紫は危険なんです。確かめなくちゃ……パンツを脱いでください！」

「またそれか！ 誰が脱ぐか！」

お互いの怪我<sup>けが</sup>もかえりみず、つかみ合う二人の背後から、女の声がかかった。

「お帰りなさい、坊や。遅かったわね」

硝子<sup>しょうし</sup>だ。その後ろにはいろいろもいる。夜々<sup>やや</sup>の看護をしていたらしく、いろいろは洗面器を持っていた。

夜々はしつこく雷真<sup>らいしん</sup>の腰にしがみつこうとしていたが、いろりにげんこつを落とされ、一応は大人<sup>おとな</sup>しくなった。

硝子はゆったりと椅子<sup>いす</sup>に腰かけ、じっと雷真を見つめた。

「知りたかったことは、つかめたかしら？」

「……ああ」

「彼らが何をしていたのか、理解できた？」

「……ああ」

「軍がなぜ坊やをあそこに行かせたのか、どうしてフレイの背後関係を探っていたのか、もうわかったでしょうね？」

「……軍の、課報活動<sup>くわほう</sup>」

「ええ、そう。D社の研究内容を知りたかったのよ」

「それで、俺<sup>おれ</sup>を囿<sup>かこ</sup>にして、軍は秘密をつかんだのか？」

「ふふ、お利口なこと。そこまでわかっていたなんて」

にっこりと微笑み、誉めてくれる。少しも嬉しくなかったが。

「俺は文句を言ってるわけじゃない。軍がヘマしたせいで、こっちは危ない目にも遭った。……死んだ奴もいる。それでも、二年前、俺をすくい上げてくれたのは硝子さんだ。だから、文句を言う資格なんざ、ない……!」

肩がわななく。そんな雷真を、腫れ物に触るように、夜々が見つめる。

「自分を責めるのはお門違いよ、坊や。そして自惚れ。坊やが少しくらい優秀でも、夜々がとなりでいたとしても、死にゆく者を救えたなんて、思い上がりだわ」

「だが、俺があるとき——!」

かつんつ、と硝子のキセルが窓枠を打ち、灰を落とす。

硝子の気迫にのまれ、雷真は言葉を失った。

「話を続けるわ。もうわかったと思うけれど、フレイが連れているのは禁忌人形よ」  
やはり、ラビもヨミと同じか。

「人間の〈部品〉を機巧に組み込み、長期に渡って生かし続けるのは、とても難しいわ。でも、使い捨てを前提とするなら、面白い方法もある」

「……生き物を、入れ物にするんだな」

「そう。〈部品〉を生かすのに必要な養分や水分を、生体に供給させればいい。〈入れ物〉が死んでしまうまでの短い時間なら、〈部品〉を維持できるわ」

ラビは犬に似せて造られたのではない。

犬として生まれながら、自動人形に改造されたのだ。

雷真の脳裏に、地下の暗闇がフラッシュバックする。

氷室。いくつもの容器。液体の中に浮かんでいた、子どもの遺体。

あれが、〈ガルム〉タイプの中に存在する？

「〈音圧操作〉の魔術回路は優秀よ。探知にも、隠密にも、攻撃にも使える。でも、その優秀さゆえに、普通に使うには『重い』のね。より少ない魔力で起動できるようにすれば、使い勝手が向上し、使い手の負担も減る」

「そのための、生体機巧……」

「そんなものを英国軍が採用したら、日本のお偉いさんも黙ってはいられない」

「なぜだ。英国は同盟国だろう？」

「今はね」

含んだものいい。雷真は背中に氷を落とされたような気がした。

「……軍は何をしようとしてるんだ。まさか、列強相手に戦争を」

「坊やは軍の走狗。犬はご主人さまに従っていいばいいのよ」

そう言われてしまつては、黙るしかない。

「状況がのみ込めたなら、次の任務を伝えるわ。〈ラビ〉の魔術回路を強奪しなさい」

「――！」

「破片<sup>はへん</sup>でいいわ。でも、英国にも学院にも勘付かれてはいけない。夜会の試合に乗じて、かすめ取るのよ。軍の研究者が解析するから――」

「待てよ！ 魔術回路は〈心臓〉に直<sup>じき</sup>づけされてるんだ。強引にはぎ取ったら、〈心臓〉も無事じゃすまねーぞ」

「愚かな子。誰<sup>だれ</sup>に向かって講釈を垂れているの？」

「ラビを、殺せ……ってのか？」

「二度も言わせないで」

自然と呼吸が速くなる。雷真は荒れ狂う激情をおし殺し、歯<sup>は</sup>噛<sup>が</sup>みした。盾<sup>たて</sup>になってくれたヨミを、あんなふう<sup>しやう</sup>に死なせて――

この上、ラビまで、フレイから奪えと言うのか？

ヨミに救われた命を、そんなことに使えと？

「……そろそろ時間ね。もう行きなさい。パーティが始まるわ」

硝子<sup>しよつこ</sup>はにこりともしせず、冷淡に命じた。反論も、反抗も、許されてはいない。雷真は口答<sup>くた</sup>えせず、無言で服を脱ぎ捨て、替えの制服に着替えた。

夜々<sup>やや</sup>は氣遣<sup>きぢ</sup>わしげに雷真を見ていたが、何も言わず、ブーツに足を通した。

準備が終わると、雷真は硝子<sup>しよつこ</sup>をにらみ、しかし目を背け、

「……行くぞ、夜々」

「はい」

制服を引っかけ、部屋を出た。

7

夜会の交戦フィールドに指定されているのは、野戦演習場ではない。

中央講堂の裏手、医学部と法学部に挟まれた芝生の広場が、当面の舞台だ。白い石柱がストーンヘンジのように突き刺さり、交戦フィールドを仕切っている。

その手前に、既に学生たちが整列していた。

奇異の視線を浴びながら、そちらに向かう雷真。学生たちの正面、一段高い壇上では、学院長がこんなことを言っていた。

「――諸君らの活躍、研鑽に期待する」

ちょうど、〈お言葉〉が終わったところだ。どうやら、セレモニーには遅れてしまった。

教授陣は一樣にあきれ顔。シャルがものすごい形相でにらんできたが、雷真は何食わぬ顔で列の最後尾に並んだ。

セレモニーへの参加が義務付けられているのは〈手袋持ち〉だけ。それなのに、参列者

は千人を超えているようだ。ただし、全員が真面目くさっているかと言えば、そうでもない。購買部が露店を出し、あたりは〈フェスタ〉のように飾りつけされている。戦わない者にとっては、気楽な見せ物なのだろう。

学院長のスピーチが終わると、夜会参加者による宣誓の儀が執り行われる。

代表者は主席——言わずもがな、マグナスだ。

六体ものゴスロリ乙女を連れている。花のように可憐だが、彼女たちは〈戦隊〉。その戦力は、戦艦数隻に匹敵するだろう。

「我らヴァルブルギスに集いし者、魔術の火種を護らんがため、血で血を洗わんと欲す。王か、然らずんば無。我ら、真の闘争を誓う」

楽隊がファンファーレを演奏し、カラスの群れが夕暮れの空を舞った。見物の学生から拍手が巻き起こり、はかったように時計塔が鐘を鳴らした。

ひとつ、二つ、三つ——やがて、六つ目の鐘が鳴ったとき、

「ここに、第四九回〈ヴァルブルギスの夕べ〉開催を宣言する」

学院長の宣言と同時に、〈手袋持ち〉全員が一斉に手袋を取った。段取りはとつくに忘れていたが、雷真も〈Second Last〉の手袋を脱ぎ、そしてはめ直した。

執行部の女子学生が進み出て、オペラ歌手のように通る声でコールする。

「第百位〈下から二番目〉、舞台へ」

早速、お呼びがかかった。雷真は列を離れ、入口らしき花輪をぐぐり、交戦フィールドに入った。もちろん、その後には夜々も続く。

フィールドの中ほどまで進んだところで、今度は対戦者がコールされた。

「第九九位〈自ら廻る炎の剣〉、舞台へ」

「何だと？」

それまでの苦々しい気分、鬱屈した気分が一瞬で吹っ飛んでしまう。

群集のどよめきを背に受けて、見覚えのある少年が現れた。

アナウンスに間違いはない。〈十三人〉のひとり〈剣帝〉ロキだ。かしやんかしやんと音を立てる、鋼鉄製の自動人形を連れている。

ロキはにらみ殺すような目をして、いまいましげに言った。

「棄権しろと言ったぞ、オレは」

「……断ると言っただけ、俺は」

視線がぶつかる。かくして、夜会最初の夜が始まった。





## Chapter 5 ヴァルブルギスの夕べ

1

いくつものガス灯が交戦フィールドをライトアップしている。

その光の下、鋼鉄の輝きをきらめかせ、ケルビムが動いた。

ロキはポケットに手を突っ込んだまま、ケルビムに手をかざすこともしない。それでも、魔力の連絡は確保されているらしい。巨大なブレードが精確に夜々を狙う。夜々はあわて、とんぼを切ってかわした。

雷真にしてみれば不意打ちだが、見物の誰からも非難の声はあがらなかった。察するに、これは不正行為でも何でもない。夜会はもう始まっているのだ。

雷真は礼服コトを脱ぎ捨て、丹田たん でんで魔力を練った。

「こつちも行くぞ、夜々。吹鳴すいめい にじゅう よんしやう二四衝！」

「はい！」

驚異的な瞬発力で突っ込む夜々。飛び蹴りとびげ気味に身を浮かせ、ブーツの底でケルビムを



狙う。強烈な一撃だったが、ケルビムは難なくかわした。

(……やっぱりだ)

ケルビムが動いた際に、不自然な気流が生じる。ケルビムの機動を助けるような空気の流れ——風を操る魔術回路か？

体が泳いだ夜々を、今度はケルビムのブレードが狙う。

夜々は身軽にかわしたが、相手はどんどん踏み込んでくる。追い詰められる前に、雷真は魔力の出力を上げ、コマンドを切り替えた。

「天喰四八結！」

夜々の剛性が増す。夜々は素手でブレードを受け止め、ガッチリとつかんだ。ケルビムは逆の手を振りかぶり、もう一本のブレードを夜々にぶつける。夜々もまた、もう片方の手でそれを受け止めた。

そして始まる力比べ。その拮抗こそ、雷真が望んだものだった。

夜々が両方のブレードを封じた瞬間、雷真はもう駆け出している。

夜々の背中を踏み台にして、高く跳躍。夜々を跳び越え、ケルビムの頭部に蹴りを叩き込んだ。首の支柱がたわみ、揺れる。やはり首が弱い！

ロキが舌打ちした。彼の注意が雷真に向く——その一瞬が狙い目だ。

雷真は後方に反転しながら、空中で魔力を練り上げた。

「光焰二一四衝！」  
こうえんにじゅうよんしやう

練った魔力を送り込む。夜々はケルビムのブレードをいなし、攻撃に転じた。蹴って、蹴って、回って蹴って、猛火のごとく攻め立てる。

ケルビムは巧みにブレードを操り、夜々の蹴りをさばきつつ、後退した。その移動はすべるようになめらか。不自然なほど身が軽い。

そして、精密すぎる動作。夜々の剛力に真つ向から逆らうのではなく、横から力を加え、バクトルを巧みにそらすことで、衝撃を殺している。

雷真は舌を巻いた。やはりロキは凄腕だ。自律しているかどうかともわからない自動人形オートマトンで、そんな芸当をやつてのけるとは！

驚愕し、集中を欠いた一瞬に、ケルビムの背面から短剣が飛び出した。空を裂き、夜々に向かつて飛んでくる。

（念動!?）

これと同じ攻撃を、先ほど下水道で見た。Dワークスの連中が仕掛けてきたものだ。これほどの速度で撃ち出されるからには、ただの念動ではない。

おそらくは汎用的な魔術。ケルビムに搭載された魔術回路だろう。とすれば、やはり風を操る魔術だろうか？

軌道は見えている。余裕をもって回避——しようとして、気付く。

夜々がよけたら、短剣は雷真に突き刺さる！

いつの間にか、射線上に並んでいた。いや、そうなるように仕向けられたのだ。人形使いを魔術で狙うのは規約違反だが、執行部の審判も、これを反則とは見なさないだろう。やむなく、雷真は夜々に防御を命じた。

短剣は夜々の体に当たり、跳ね返った。夜々の肌には傷もつかない。ロキは面倒くさそうに眉をひそめた。

「ふん。厄介な装甲だな」

「刃物で夜々は切れません」

夜々は誇らしげに胸を張る。だが、ロキは鼻で笑って、  
「切れるさ。ケルビムに切れないものなど存在しない」

ポケットから手を抜き、初めて、ケルビムに向かって手を伸ばす。

「ケルビム——廻れ！」

「I'm ready」

ごうっ、という音とともに、ケルビムから爆風が生じた。

陽炎が立ち、空気がゆがむ。焦げ臭いにおい——雷真の嫌いな、炎のおいがあった。漂う。ケルビムは熱風を噴き出しながら宙に浮き上がった。

異形の天使を思わせるシルエット。それが唐突に変化する。

肩が、腕が、ブレードが一体化し、一枚の板になる。全身のパーツがパズルのように組み合わさり、一瞬後、天使は〈剣〉に姿を変えた。

大人の背丈ほどもある大剣。美しい曲線を描く両刃は、意外にも磨き上げられ、くもりがない。刀身の根元にケルビムの顔が露出していて、何とも不気味だ。

雷真は目をむいた。一方で納得もしている。やたらと鋼板が目立つ、ケルビムの特異なフォルムは、このためのものだったのだ！

ロキが右手を振り上げ、そして振り下ろす。

その動きに連動し、大剣が襲いかかってきた。あたかも、見えない巨人に振り回されているかのよう。大剣はぶんぶんと廻り、夜々に迫りくる。

「——かわせ！」

重量が集中しているだけに、これまでの攻撃とは威力が違う。

夜々がかわすと、地面に亀裂が走り、摩擦が何かで芝が焦げた。

大剣は勢いを止めず、くるりと回転して、さらに夜々に斬りかかる。

雷真は急いで魔力を練った。夜々が超硬にまで強度を高める。この状態なら、艦砲射撃にも耐えられるはずだが——

確信が揺らぐ。とつさに、夜々を〈強制支配〉した。

夜々は驚いたようだが、逆らわず、コントロールを雷真に委ねた。

飛び退いてかわす夜々。大剣が夜々の胸をかすめ、血の糸が伸びる。

雷真は絶句した。夜々の《金剛力》が、よもや切り裂かれるとは！

かすって、これだ。直撃していたら、勝負が決まっていたかもしれない。

「ふん、カンのいい奴だ」

舌打ちするロキの前で大剣が回転する。炎が剣先に宿り、熱風を生む。まさに聖書に書かれた通り、《自ら廻る炎の剣》だ。

再び、大剣が攻撃態勢に移る。雷真は思わず腰を引いた。

夜々はもどかしそうに、

「どうしたんですか、雷真！ 魔力をください！ さっきは傷つきましたけど、あのくらの攻撃、夜々はきつと耐えてみせます！」

「——かわせ！ 吹鳴二四衛！」

強度を増すためではなく、敏捷性を増すために《金剛力》を使う。夜々はやはり逆らわ

ず、次々と繰り出される大剣の攻撃を、右へ左へ回避した。

気がつけば、夜々の背中が目の前だ。追い詰められ、手が届く距離にまで押し下げられている。これ以上は下がれない。

不意に、がくん、と雷真の腰から力が抜けた。

もちろん、すぐさま立て直す。しかし、冷たい汗が背筋を伝った。昼間のドタバタで、

体力、魔力ともに減退ぎみだ。このままではまずい！

状況が不利になると、自然と気持ち（切り札）に傾く。

（一撃で仕留めれば……いや、だめだ。この状況じゃ、当てられない）

では、自分にできることをするか？

五本の指に意識を向ける。血管を流れる血のような、魔力の流れが認識できる。だが、その流れは絶望的に「雑」だ。あの男のようには、とてもいくまい。

やはり、夜々が言う通り、受け止めるしか……ない。

「雷真！ これ以上は無理ですー」

「……わかった。天嶮 九六 衝！」

夜々の背中に直接手を当て、渾身の魔力を注ぎ込む――

その瞬間、雷真を襲った戦慄は、底なしの淵のように暗かった。

得体の知れない不安。闇の中、どこまでも落ちていく、恐怖、恐怖、恐怖。

大剣は落雷のごとき威圧感をもって、夜々に振り下ろされようとしている。夜々は既に

受け止める体勢。雷真もまた、そのための魔力を送り込んでしまった。

とっさに夜々の肩を引き寄せ、体の位置を入れ替える。

どうしてそんなことをしたのか、自分でもわからない。

雷真には果たすべき目的があり、倒すべき宿敵がいた。それなのに。

体が勝手に動いた。たぶん、夜々を死なせたくない一心だった。

ざんつ、と重たく、刃が胸を撫でていった。

鉄は右肩から左胸へ抜ける。脳髓が一瞬で灼熱し、痛覚という痛覚を焼き尽くしてしまふ。内臓を引きずり出されるような感覚。何かがふところから飛び出し、宙を舞う。それはシャルからもらったお守りで、鎖がぶつ切り切れていた。

気がつく、と、地べたに這いつくばって、ぼんやり芝を眺めていた。

体が動かない。寒い。だるくて、しびれる。何やら温かいものが体から抜けていき、血なまぐさいにおいが鼻腔を刺した。

視界がかすみ、何もかもが遠い世界のできごとに感じられる。

「雷真……雷真……！」

必死な声。泣き濡れた夜々の顔が、ふと、記憶の中の誰かに重なった。

## 2

「……な、撫子？」





背中を取られるのは気分が悪い。とつさに妹を引きはがそうとしたが、妹はいやいやをして、今度は雷真の胸にしがみついていた。

「行かないでください……」

雷真はぼりぼりと頬をかき、

「……って言っても、なあ？ 親父さまに追い出されたんじゃ、仕方ないだろ」

「兄さまの嘘つき！」

いきなり、怒鳴られる。

「来年も両国の花火を見に行こうって言ったのに！ 撫子がお嫁にいくまで、ずっと側に

いてくれるって言ったのに！」

「そう言うな。家にはいないが、花火くらい連れてってやるからさ」

「嫌いです……」

撫子はぼろぼろ涙をこぼしながら、目を閉じて叫んだ。

「兄さまのこと、嫌いになりました！」

「ああ、そうかい。いつまでも兄離れできない妹なんか、俺だって嫌いだ」

「——」

撫子の指から力が抜け、雷真の着物をするりと離す。

傷ついたような顔。しまった……と思ったが、もう遅い。雷真が何か言う前に、撫子は

きびすを返し、門の向こうに消えていった。

雷真はため息をつき、苦笑して、生まれた家に背を向けた。  
何てことはない、他愛もないすれ違い。

こんなものは、すぐに埋め合わせることができる。  
修復、できる。

父や母とも、また会える。今生の別れではないと、そんなわけがないと、心のどこかで、  
たかをくくっていた。

これが、妹と交わした、最後の言葉だった。

### 3

どすつ、と大剣の切っ先が地面に突き立った。

「雷真！ 目を開けてください雷真！」

自動人形の少女が泣き喚いている。主にすがりついて、滑稽なくらい必死だ。しかし、  
あふれ出る血は止まらない。芝がぬらぬらと黒く光る。

見物の学生たちは静まり返り、固唾をのんで、なりゆきを見守っていた。

ロキは横たわる雷真を冷たく見下ろし、きびすを返した。

「……ケルビム、こい」

「Yes, Yes... hmn...?」

ケルビムが首を傾ける。勝利を確定させないのか、とたずねている様子だ。

「確かに、今のはこのバカの過失だ。オレが責めを負う問題じゃない。だが、こいつに死なれたら、オレは参加資格を失う。今は治療させてやる。それだけだ」

「I'm ready」

納得したようだ。バラバラとパーツの結合がゆるみ、人間に近いフォルムへと変貌する。そんなケルビムを引き連れ、ロキは交戦フィールドを出た。

上位者の退場で休戦が成立し、医療班が駆け込んでくる。

思い出したように騒がしくなる学生たち。大量の血を見て、卒倒する者もいた。ロキはくさくさした心持ちで人垣を抜け、メインストリートを南へ向かった。

ひと気のない通りを歩いて、学院のゲートを目指す。

警備の歩哨に入場許可をもらい、ゲートの中へ入る。階段を上がり、応接室の扉を開けると、壮年の紳士が優雅に紅茶を飲んでいた。

「終わったようだな」

不機嫌そうにも思える、硬い声。ロキは喉の渇きをおぼえた。

「電信で報告を受けたよ。いささか、興奮めな終わり方だったな」

「……すみません、お父さま」

「なぜ、彼の手袋を奪わなかった？」

冷たい瞳がこちらを向く。強大な魔力の波長を感じ、ロキは畏縮した。

「……奪おうとすれば、あの自動人形が抵抗していました」

「そんなものは蹴散らせばいい。私のケルビムが、操者をなくした人形などに、おくれを取ると思うのか？」

「あれは禁忌人形だと、お父さまがおっしゃったのです」

紳士が口をつぐみ、ロキを見据える。ロキは重ねて、

「抵抗が長引けば、使い手の方が死んでいました。対戦相手を死に至らしめた者は、理由の如何を問わず、参加資格を剥奪される。だから……」

「……まあ、いい。この件に関しては、おまえの判断を尊重しよう。だが」

ロキの首筋に鳥肌が立つ。紳士は底冷えのする声で、

「なぜ、勝手なことをした？」

とつさに返事ができない。ロキの手に汗がにじむ。

「七位の位を捨て、自ら九九位に降りたのはなぜだと訊いている」

「……計画に必要なことだと、判断しました」

「ほう。それはどういう意味だ？」

「フレイが勝つ可能性は、万に一つもなかった。(ガルム)と(エンジェル)を性能比較するために、(下から二番目)を排除しなければならないと」

「余計なことだ」

「……すみません」

「まあいい。おまえは私の自慢の息子だ。この程度のことには目をつぶろう。軍のうるさ型からもかばってやれる。しかし——この次、このようなことをすれば、おまえの心臓を止めねばならない」

「……はい」

「おまえが意図した通り、明日はラビとケルビムがぶつかることになるだろう。手加減はしない。叩き潰すつもりでやれ」

「はい」

「おまえには期待している。存分に力を発揮しろ。それがフレイのためにもなる」  
びく、とロキの眉が痙攣したことに、紳士は気付いたのだろうか。

「……もちろんです、お父さま」

戻れ、と言われ、一礼して退出する。

紳士に背を向けたロキは、きつく、きつく、奥歯を噛んでいた。

医務室に運び込まれる雷真を、シャルは走って追いかけた。

雷真が乗せられているのは、医学部が考案したキヤスターつき簡易ベッド。段差や凸凹にも対応し、衝撃を殺してくれる優れもの。高さの調整も自在だ。

医務室では、医療班の女子学生が数名と、クルーエル医師が待機していた。

クルーエルはさわやかな笑みを浮かべ、医療班の労をねぎらっていたが、シャルの顔を見ると、急に内股になった。以前、痛い目を見たからだろう。

雷真は医務室のさらに奥、〈処置室〉に運び込まれた。そこから先は医療班しか入れない。引き離されそうになると、夜々は半狂乱で雷真にすがりついた。

「雷真！ 雷真！」

夜々の体から魔力が漏れ出し、ひとりでに魔術回路が起動しかける。

（バカな子！ 禁忌人形だってバレルじゃない！）

あわててシャルが止めようとしたとき、誰かが夜々を引き止めた。

なめらかな銀髪が美しい。まるで本物の銀のように、きらきらと輝いている。

その姿、衣装、体形は、驚くほど夜々に似ていた。

予想通り、夜々はその乙女を見て、「いろいろ姉さま……」と言った。

姉妹——いや、自動人形に血のつながりはないだろう。同じ画家の描く人物が似るようには、この二人にも、同じ創造主の作為を感じるだけだ。

「落ち着け、夜々」

「だって、雷真が！ あのとときと同じ……夜々をかばって、また……血が！ 夜々が怪我なんかして、負担をかけたから……夜々のせいで……雷真、雷真っ！」  
「ばちんっ、と小気味よい音が鳴り、夜々の頬が片方だけ赤くなった。

「落ち着け」

冷気さえ感じさせる、凄みのある声。夜々はひるみ、そして我に返った。

「おまえが騒いでどうなると言うのだ」

夜々は見ると見る元気を失くし、うつむいた。ひく、ひく、としゃくり上げる。

そんな夜々を、「いろいろ姉さま」はそつと抱きしめ、優しくささやいた。

「雷真殿を信じろ。信じて待て。なに、案ずるな。雷真殿はお心の強い方。天全殿を倒すまで、決して死にはしない」

こらえきれなくなったように、夜々は姉の胸に顔を埋めた。

どうやら、落ち着いたようだ。ほっとすると同時に、シャルも今の言葉で勇気づけられたことに気付いた。「テンゼン」というのが誰かは想像の域を出ないのだが——いずれに



せよ、雷真はまだ死なない。きっと。

シャルは祈るような気持ちで、処置室の壁を見つめた。

はっとして目を開ける。

すぐ目の前に、毛布をくわえたシグムントがいた。運んできてくれたようだ。

「すまない。起こしてしまったか」

「私、眠ってた？ どのくらい？ ライシンは？」

「まだ意識が戻らないようだ」

シャルはこしこしと目をこすった。不自然な姿勢だったのか、首が痛む。

気がつくと、シャルは医務室前の長椅子に座っていた。廊下の照明は落とされているが、医務室から漏れる光で、ほんやり明るい。

「どのみち、彼も普段は眠っている時間だろう。君も休め」

「うん……」

シャルは毛布にくるまり、長椅子の上で膝を抱えた。

「本当にバカ。まぶしいバカ。天をつくバカ。考えたらわかることよ。あの子の肌を切るような攻撃、生身で受けたら、無事で済むわけないじゃない」

「……そのことだが」

のそのそと毛布に上がり、猫のように丸まりながら、シグムントは言った。

「夜々は極めて堅固な防御能力を持っている。本人も言っていただろう。刃物で傷つけることはできないと」

「でも、すっぱり切れたわよ。すばつとね」

「そこだ。夜々を傷つけるほどの斬撃を受けながら、雷真は両断されなかった」

「——ということ？」

「対戦相手を殺してしまつては失格になる。ロキは手加減をしたのではないか？」

「手加減つて……あの状況で、あの勢いだったのよ？ ケルビムはもう攻撃モーションに入っていたわ。あそこから、どうやって手加減するっていうのよ」

雷真は夜々を引き寄せた。飛び込んだわけではない。ゆえに、切っ先をかすめるだけで済んだ。単に傷が浅かっただけでは？

「たとえ、魔術をオフにしたつて——いえ、オフにするも何も、既に十分な慣性がついていたはずだわ。あの状況で〈念動力〉を解除したつて……あ」

シグムントが何を言いたかったのか、そこで気付く。

「そう。ケルビムの魔術回路は〈念動力〉などではない」

ケルビムはDワークスが自信を持って送り込んできた、最新鋭の試作機だ。あの複雑な変形機構は、最新の機械工学に支えられている。ならば当然、搭載している魔術回路も、

最新鋭のものだろう。

夜々のボディを切り裂く魔術。それでいて、重力にも逆らえる魔術。巨大な剣を自在に浮かせ、短剣を飛ばすことのできる魔術。それは一体、何だろう？

「そこに（剣帝）<sup>けんてい</sup> 攻略の鍵が隠されているかもしれないな」

「そうね。あのバカが復活したら、教えてあげましょ」

「いいのか？」

「え？」

シグムントは思慮深そうな目でシャルを見つめた。

「勝ち残れば、彼はまた一段、強くなる。経験は人間を磨く研磨剤だ。特に雷真のようなタイプは、戦いを経るごとに、どんどん力をつけていく」

それは、わかる。雷真は公式を知らない数学者のようなものだ。それでいて、あの戦闘能力。経験を積み、飛躍的に成長するだろう。

「君は（十三人）<sup>じゅうさんにん</sup>の第六位——ロキのように自ら順位を下げない限り、雷真と当たるのは当分先だ。それまでに、彼がどれほど力をつけるか、想像もつかないぞ」

「……何度も言わせないで。私は誇り高きブリュール伯爵家のシャルロットよ。あのバカがどれだけ力をつけようと、正面から叩き潰すわ。それに」

ふふ、と、この夜初めてシャルは笑った。

「貴方だつて、彼のことが入つてゐるくせに」

「私「だつて」ということは、君も氣に入つてゐるのだな？」

「なつ、こつ、ばつ——」

「いや、すまない。今のは少々、意地悪が過ぎた。ここ最近の君を見ていれば、火を見るよりも明らかだった」

「もう黙りなさい！ お昼のチキンを粉ミルクにするわよ！」

シグムントは苦笑しつつ、聞こえないふりをして、しつぽで顔を隠した。

シャルはムスツとした。シグムントの羽を思い切り引つ張りたくなる。

（何よ……少しくらい、氣に入つたつて、いいじゃない）

雷真は、この学院で初めてできた友達なのだ。

シャルは顔を上げ、医務室のあかりを眺めた。

死ぬんじゃないわよ、ライシン。

「……この私が、こんなに心配してあげてゐるんだから」

誰にも聞こえないくらいの言葉で、そつとつぶやく。

シャルは赤面し、ばさばさと毛布を引き上げ、頭からかぶった。

夜明け前。もつとも冷え込む時間帯。

ひっそりと静まり返る医学部校舎。そのエントランスに、白衣の教授——キンバリーが入ってきた。白衣を叩き、朝露を払い落とす。

ふと、その視線が廊下の奥に留まる。

「神さま、仏さま、いらっしやるのなら、どうか雷真を助けてください……！」

少女がひとり、沈みかけた月に祈りを捧げている。つややかな黒髪がほんやりと光り、どこことなく神聖なものを漂わせていた。

「夜々はもう、わがままを言いません。雷真が人間の女の子と仲良くしても、やきもちを焼きません。雷真のシャツから他の子のおいがしても、夜々を置いてきぼりにしても、ある日突然『恋人ができたんだ』とか言い出しても——」

言っているうちに声から抑揚が消え、瞳からハイライトが消える。

夜々ははつと我に返り、あわてて言い足した。

「今のは間違いです。フェイントです。こんなのに騙されないでください。夜々は本当にやきもちなんか焼かないので、どうか雷真を助けてください……！」

「ご利益がなさそうなお祈りだな」

ぎくつとして、振り返る。

「元氣そうだな。まったくおまえには驚かされる。操者があんな状態なのに、稼動レベルが落ちていないとは」

状況を考えれば、嫌みにしか聞こえないだろう。あんな状態の主から魔力を吸い上げているのだと、そう責めたも同然だ。

夜々はしゅんとして、うつむいた。

チクリと罪悪感が胸を刺す。別に夜々を嫌っているわけではないのだが、どうしても、優秀すぎる自動人形には、当たりが冷たくなってしまいうらしい。

「まあ、そう心配するな。あいつはプラナリアなみにしぶといんだ。胸が割れたくらい、どうということはないさ」

下手な慰めを言って、夜々の横をすり抜ける。

医務室に入ると、血と消毒薬のにおいが鼻についた。

処置室に通じるドアの前に、クルーエル医師が陣取っていた。

いかにも不機嫌そうな仏頂面で、分厚い医学書を広げている。

「ご機嫌斜めだな」

「当たり前だ。野郎の命なんか救って、何が楽しい」

顔も上げずに吐き捨てる。口ではそう言いながら、徹夜で怪我人を見守っているあたり、彼もプロだ。

「〔下から二番目〕はどんな按配だ？」

「つくづく、悪運の強い野郎だよ」

カルテを投げて寄越す。クルーエルは眼鏡を拭きながら、説明した。

「あとほんの数ミリ深けりゃ、肺が裂けてたな。一センチなら心臓がアウトだ」  
「ほう」

「角度もよかった。右の鎖骨が折れたが、肋骨は二本で済んだし、中身も無事。ゴツイ剣でぶった切られたわりに、切断面もキレイだ。おかげで縫合できたわけだが——神がかり的な強運だよ。何かがあいつを護った……そんな感じだな」

「では、命はつないだのか？」

「今のところは」

慎重な言い回し。珍しく医者顔でクルーエルは言った。

「けっこう血を失くした。血圧は下がりがすぎた。おかしな後遺症が出ないとも限らない。あと怖いのは敗血症。自動人形なんぞ雑菌まみれだからな。それを取り切っても、意識が戻るかどうかは神さまにしかわからんさ。ついでに」

声を潜め、耳打ちするようにつぶやく。

「例の『バイタル吸い取り』が、今回も出てる」

キンバリーは廊下の夜々に意識を向けた。先ほどの様子を見る限り、夜々本人はまだ、

雷真の《生命力》を奪っていることまでは、気付いていないようだ。もし知っていたら、もっと取り乱しているだろう。

「というわけで、いつ死んでもおかしくはない。ちつともな」

キンバリーは処置室のドアをにらみ、考え込んだ。

（そう簡単に、あいつが死ぬとは思えんが……）

死にそうにない者も、やはり死ぬ。そのことを、キンバリーはよく知っている。

「生き残ったとしても、しばらくは戦えねえよ。やれやれ、また野郎の入院患者だ。男の入院患者なんぞ、臭いわ、汚いわでロクなもんじゃない。着替えも包帯換えも触診も、何ひとつ楽しくない」

「ほう。君は普段、それを楽しんでやっているのかね？」

「当たり前——もちろん冗談です、サー」

キンバリーがハサミをもてあそんでいるのを見て、急いで言い直す。

それから、心底から腹立たしげに愚痴った。

「ったく、あいつは一体何なんだ！ 疫病神め！ 人がせつかく治してやって、ようやく追いついたと思ったらのに、すぐさま戻ってきやがって。エロ可愛い自動人形はちつとも俺になつかねえし。それどころか俺は『握りつぶされる』ところだったんだぞ？ ああくそ、（下から二番目）呪われろー 爆発しろー」



呪いの言葉を吐くクルーエル。キンバリーは相手をするのも馬鹿らしくなって、窓の外に視線をやった。

既に空は白んでいゝる。間もなく、夜が明ける。

「さて……夜会に復帰できるかな、君は」

処置室の雷真に問いかける。

処置室はひどく静かで、物音ひとつしなかった。

## 6

雷真の意識が戻らないまま迎えた、夜会二日目。

この日は月曜だった。夜会が始まったとは言え、関係するのは一部の学生だけ。当然、平常通りに授業がある。

その授業がすべて終わった、放課後。日が沈み、時刻が午後六時を回る頃、夜会の交戦フィールドに、再び学生が集まり出した。

見物の者もいれば、研究目的の者もある。昨日ほどの賑わいはないが、やはり露店が出たりして、それなりに盛況だ。

その賑わいの中に、シャルもいた。

雷真が復讐したときのために、ロキの弱点を探っておいてやろう……などというつもりはない。もちろん、違う。違うったら、違う。

昨晩から何も食べていないので、すきつ腹に油の香りがこたえる。シャルは露店の前を三往復したあげく、結局は香りに負け、ドーナツを買った。シグムントと分け合いながら、戦いが始まるのを待つ。

今夜は〈静かなる騒音〉——フレイが参戦する夜だ。

既に、交戦フィールドにはロキがいる。ケルピムを従え、ポケットに手をつ込んで、フレイが現れるのを待っている。

見物の学生たちが、ひそひそと噂話をかわす。

「見ろ。〈剣帝〉陛下はやる気十分だぞ」

「そんな気張らなくなつていいのにな。五十位以下の連中が東になつても、〈剣帝〉には敵わないぜ。昨日の〈下から二番目〉も、前評判ほどじゃなかったしな」

「これじゃ、〈静かなる騒音〉は現れないかも。実力が違いすぎるよ」

「大体、何だつてこんな底辺まで〈自主降格〉してくるんだ？ 一度順位を変更したら、もう元の地位には戻れないぞ？」

「知らないよ。〈下から二番目〉が気に入らなかつたんだろ」

「しっ。〈静かなる騒音〉のお出ました」

話し声がやむ。学生たちの注目が集まる方に、シャルも顔を向けた。

真珠色の髪をなびかせて、気弱そうな女子学生が歩いてくる。その後ろに、オオカミのような毛並みの、大型自動人形オートマチック人形が続く。

フレイだ。シャルより一年先輩だが、そういう感じはしない。むしろ、後輩を応援するような気持ちで、シャルはフレイの入場を見守った。

開始の合図などは存在しない。交戦フィールドは既に戦場だ。しかし、ロキはすぐには攻撃しなかった。

感慨深げにフレイを見て、ふう、と氣だるげにため息をつく。

「正直、意外だ」

かろうじて声が聞き取れた。ぴくりとするフレイに、ロキはさらに言う。

「あんたは現れないと思っていた。この戦いから逃げるだろうと」

「……そんなこと、しない」

「それが意外なんだ。あんたらしくない。ガキの頃から、あんたは何をやっても鈍くて、不器用で、そのうえあきらめが早かった。いつも何かに怯えて、オレの後ろに隠れていた。そのあんたが、オレとやり合うつもりなのか？」

「……ロキは、子どもの頃から、何でもできたね」

フレイはうつむき、ぼそぼそつぶやいた。

「いつもはきはきしてて……頭がよくて……力が強くて……器用だった。私はロキの後ろにくっついて、隠れていればよかった」

喘みしめるような沈黙。それから、そっと、かぶりを振った。

「でも、今は。私だって、この学院の学生。……魔王を目指す、人形使い」  
きりつと目線を上げ、ロキを正面から見据える。

ロキは驚いたようだ。シャルもまた意外の念に打たれる。先刻までの弱々しい雰囲気はどこへやら、今のフレイは毅然として、凛々しいほどだ。

「ロキは……私を、憎んでる、かもしれないけど」

フレイは豊かな胸——シャルの劣等感を刺激する——をぽよんと叩き、

「私は、戦う。ロキの後ろにいるだけじゃ、誰も護れないから」

「護る？ 何を言ってる——」

「ラビ！」

「がう！」

青白い光。魔力の導線が伸び、ラビとフレイを連絡する。

戦闘開始。大方の予想を裏切り、先手を取ったのはフレイだった。

ラビの吠え声が衝撃波を生み、〈砲弾〉となつて飛ぶ。それはドリルさながらに、芝生を耕し、土を巻き上げながら突き進んだ。

ロキは突っ立っているだけだ。しかし、ケルビムが反応し、主をかばった。

ブレードを叩きつけ、謎の〈砲弾〉をかき消す。その一瞬、かすかに、ロキから魔力の波動を感じた。シャルでもかすかにしか感じなかったのだから、ほとんどの学生たちは、ロキが魔術を使ったことにも気付かないだろう。

「ぬるいな」

ケルビムの背中から短剣がせり出し、次々に射出された。

「ラビ！」

襲いくる短剣を、ラビは思いのほか敏捷にかわす。しかし、短剣はそれぞれ意志を持つかのごとく、かわすそばから進路を変え、しつこく追いつがってきた。

そのうちの一本が、ラビの足をかすった。

浅くは、ない。血が流れ、ラビの動きが鈍る。

フレイは取り乱さない。気を落ち着け、魔力を練った。

「ラビ！ もう一度！」

指示に合わせ、ラビが〈砲弾〉を放つ。それは短剣を巻き込みつつ、飛んだ。

先ほどと同様、ケルビムはブレードを叩きつけ、やはり〈砲弾〉を霧散させた。

「ぬるいと言った」

ロキから魔力が飛び、再び短剣が宙を舞った。

もう、かわしきれない。ラビはあちこち切り裂かれ、甲高く鳴いた。

「ラビ！」

フレイが駆け寄り、抱き起こす。そこに、ロキの影がかかった。

嘲笑うでも、勝ち誇るでもなく。

ただ冷静な目で、ロキはフレイを見下ろしていた。

「目を閉じろ。これで終わりだ」

ケルビムがブレードを振り上げる。その重い刃を振り下ろし、ラビの胴体を真っ二つに

しようとした——まさにそのとき、異変が起こった。

ブレードを弾き飛ばすほどの魔力が、フレイの全身から噴き上がる。

濃い！ 空気が黒く濁って見える！

シャルは目を見張った。シグムントが翼を広げ、警戒感をあらわにする。

（何て魔力……！ これが人間に出せる出力なの……!?）

ロキとケルビムがそろって飛び退き、距離を取った。

やがて、あまりにも唐突に、ラビの姿が変わった。

肩が隆起し、爪が伸びる。はりねずみのように逆立つ体毛。体はふた回りも大きくなり、

犬よりも虎に近い。何より顔つきが違う。牙をむいた顔はまさに猛獣。神話のケルベロス

が実在したら、こんな顔かもしれない。

「ラビ……ラビ……!?」

膨大な魔力を放出しながら、フレイはあからさまに動揺していた。

（様子が変だわ。これは、フレイの魔術じゃ、ない……?）

がとおおおおんつ、とラビが吠える。

咆哮は大気を震わせ、びりびりと、肌に痛いほどの魔力が飛んできた。

「う……あ……れ？」

フレイが膝をつく。あれほどの魔力を放出しているのだから、体にかかる負担は相当のものだろう。フレイの肌はあちこち破れ、血がにじんだ。

「あ……ああ……あああああ!？」

悲鳴をあげ、もがき、苦しむ。たちまち血だるまと化すフレイの横で、ラビがガチガチと牙を鳴らし、ケルビムを威嚇した。

そして、誰も予想しなかった、ラビの猛攻が始まった。



## Chapter 6 愚か者の選択



1

獣の咆哮<sup>ほうりゅう</sup>。それは瞬時に魔力を帯び、迫撃砲のごとく撃ち出された。

ケルビムとロキは跳躍してかわす。流れ弾が交戦フィールドを飛び出し、〈仕切り〉の石柱を破砕した。破片<sup>はへん</sup>が飛んで、シャルの顔を傷つける。

(何なのよ、あれは……!?)

シャルの視線は戦場に釘付け<sup>くぎづけ</sup>になっていた。ラビが一方的に押している。突進、そして砲撃。矢継ぎ早の攻撃を、ケルビムはいなししているだけだ。

ラビが大きな力を使うたび、フレイの肌が破れ、出血する。

フレイはもう歩くこともできない。その場にうずくまり、もがき、苦しんでいる。シャルの頭の上で、シグムントが低くうなった。

「まずいな。フレイは魔力を強引に引き出されている」

「強引に……って、どういうこと？」



「あのままでは、あの娘——死ぬぞ！」

ラビは猛り、ケルビムに攻めかかる。ふと、その足首を短剣が切り裂いた。ケルビムの短剣が縦横に飛び、たまらずラビは後退した。

八本の短剣が宙を漂い、ロキを中心に、ゆっくりと輪を描く。

「あれが〈剣の結果〉……！」

ロキがマグナスの対抗馬と目される理由。侵入者を自動的に攻撃する結果だ。

ラビが足を出した途端、短剣は鋭く動き、容赦なく切り裂いた。

刺さり、貫き、肉片を飛ばす。だが——

傷つけるそばから、ぶくぶくと泡が立ち、ラビの傷口は修復される。

何という再生能力！　だが、それは無償のものではないらしい。ラビが傷を負うたび、フレイの体から血があふれ、その血液が蒸発して、黒い霧へと変化した。

（血が、魔力に変換されてる……！）

生き血は高純度の魔術マテリアル。ガソリンのようなものだ。特別な機巧か、あるいは魔術プログラムで、強制的に変換しているらしい。

言うまでもなく、血液の量は有限だ。このままでは、フレイは死ぬ！

「ケルビム、止まれ！」

「Yes..?」

ロキの命を受け、ケルビムは攻撃をやめた。

その隙を見逃してくれるほど、今のラビは優しくない。

ラビは弾かれたように突進した。強烈な頭突きをケルビムに見舞い、吹っ飛ばす。そのままロキに飛びかかり、馬乗りになった。

喉笛を噛みちぎろうと、鋭い犬歯が迫る。ロキはラビの首を両手で締め上げ、対抗した。

だが、所詮は人間の力。今にも押し負けそうだ！

「う……ラビ……だめ……」

血を流しながら、フレイが叫ぶ。しかし、ラビは言うことを聞かない。シャルはじっとしていられず、フィールドに向かって駆け出した。

「待て、シャル。どうするつもりだ」

シグムントが帽子に爪を立てる。シャルは返事をするのもどうかしく、

「どう見ても普通じゃないわ！ 高貴なる者の義務として、人命救助——」

「だめだ！」

シグムントだけではない。もうひとり、別の声がシャルを制した。

「身の程をわきまえろ、シャルロット」

振り向くと、背後にキンバリーが立っていた。

「夜会の舞台に立てるのは招待された者だけだ。君の出番はまだまだ先……。呼ばれても

いない舞台上上がるのは無作法というものだぞ」

「お言葉ですが、先生！ そんなことを言ってる場合じゃないわ！」

「いいから、引つ込め。ちゃんと適任の者がいるんだよ」

にやりとする。その視線はシャルを突き抜け、フィールドに向けられていた。嫌な予感とともに振り返る。

そうだ。今夜、夜会の舞台上に上られる者が、もうひとりだけ、いる。

立ち尽くすケルビムのわきをすり抜け、何かが走った。

それはラビを蹴<sup>け</sup>つ飛ばし、ロキを解放する。

そのまま跳躍。謎<sup>謎</sup>の影は二つに分離して、それぞれ着地した。

一方は、黒髪が美しい最高級の自動人形<sup>オートマトン</sup>。そして、もう一方は――

「……あ・の・バ・カー」

シャルの頭から湯気が立つ。

そのバカは、にやつと笑って、のんきな調子でこう言った。

「俺<sup>かれ</sup>も交せてくれよ。ダンスの相手がいないんだ」

かくして、重傷のはずの（下<sup>サカ</sup>から二番目<sup>ニバンメ</sup>）が、戦場のど真ん中に現れた。

じんっ、じんっ、と脈打つ胸の傷は、燃えるように熱かった。  
刺し貫かれるような痛みを覚えつつ、雷真は笑っていた。

笑っているのが自分でも不思議だが、笑ってでもいなければ、やってられないのも事実だ。気を抜けば、顔より膝が笑い出す。縫われた胸は糸が突っ張り、今にも裂けそうだ。その上、利き腕が使えない。

それでも、やるしかない。

ぐるぐるとなる、熊のような体躯のラビ。雷真はその前に進み出て、

「行くぞ、夜々。吹鳴にじゅっ!!」

突然、真横から体当たりがきた。弱っているのに、なす術もなくすっ転ぶ。

格好つけて登場したのに、これはかなり恥ずかしい。雷真はあわてて起き上がり、自分を突き飛ばした犯人——ロキに食ってかかった。

「何しやる!」

「こちらの台詞だ。部外者がしゃばるな。ケルビム!」

『I'm ready』

ロキの命に応じ、ケルビムが宙に浮き上がる。鋼鉄の自動人形が何かする前に、雷真は

ロキの後頭部を叩き、その行動を妨害した。

「何をするー」

「こっちの台詞だー 何をする気だよ、おまえはー」

「貴様は本物のバカだなー ラビを止めるに決まっているだろうー」

「バカはおまえだー おまえが攻撃すると、そのぶんフレイの命が縮むんだよー」

「貴様は何もわかっていないー バカは黙ってオレのやることを見ているー」

「おまえが見てるー」「いや貴様だー」「おまえー」

またしても、子どものケンカだ。そんなことをしている場合ではないのだが、よほど馬が合わないらしい。そこへラビが突っ込んできた……が、夜々とケルビムは見事に連携して、ラビをブロックした。

「貴様、どうあっても邪魔する気か？」

ロキが殺気をぶつけてくる。雷真も目をそらさず、

「当たり前だ。おまえ——ラビを殺す気だろ」

「……そうしなければ、周囲に被害が出る。フレイも、死ぬ」

「だったら、もうおまえの出る幕じゃない。あいつは俺が止めてやる」

次の瞬間、ロキの脚が弧を描いた。

雷真の腰に鋭い蹴りをかます。激痛が鎖骨に響き、雷真は身悶えした。

「見ろ。そんなザマで何ができる。フレイを救うには、こうするしかない」  
てのひらをケルビムに向ける。ケルビムは瞬時に変形した。

「ごとおおつ、と嵐あらしのような音を立てながら、大剣が浮揚する。

「一撃で〈心臓〉を破壊すれば、あの化け物も止まる。フレイは助か——」

「助からねえ！」

雷真らいしんは声の限りに、叩きつけるように叫んだ。

「わかれよ！ あいつはラビを可愛かわいがつてる……家族だと思ってる！ ラビが死んで自分だけ助かるなんて結末、あいつが救われるわけねーだろ！」

「——では、どうする！ フレイを見殺しにするのか!？」

「しない！」

吠えはえると同時、夜々ややの背中(すいめいじにせうやんとく)に手を当て、直接魔力を送り込む。

「俺はどっちも助ける。吹鳴ふいめい——四衝！」

「はい！」

姿勢を低くして、夜々が駆ける。一陣の風のように。

野生のカンか、ラビは危険を察知しようだ。左右にステップを踏み、夜々をかわす。しかし、夜々は身軽に向きを変え、追いつがった。

鳥と鳥の戦いにも似た鬼ごっこ。その速さに、ギャラリーがどよめいた。

「頼むぞ、夜々。そいつを押さえ込め！」

夜々はラビを牽制し、注意を惹きつける。その際に、雷真は駆け出した。うずくまったままのフレイに駆け寄り、抱き起こす。

ラビを殺さずに、ラビを止める方法は、これしかない。

ラビを傷つけるのではなく――フレイを気絶させるのだ。

気絶した魔術師は、ほとんど魔力を放出しない。動物が魔力を持たないのと同じ理屈だ。意識レベルが低下し、知性が落ちた人間に魔力はない。

フレイの目は虚ろで、焦点が合っていない。雷真はごく短い時間、躊躇した。落とすのは初めてではないが、相手が少女では覚悟も鈍る。

だが、やるしかない。

ここでやれないような半端者には、誰も守れない。

雷真はフレイの首にしがみつき、マフラーの上から腕を巻きつけた。

突然、ラビが方向転換し、雷真に向かって突っ込んできた。

とっさにフレイを突き飛ばし、自分もかわす。踏ん張りがきかず、転倒する雷真の上に、ラビの影が覆いかぶさった。

鋭い牙が首筋に迫る。夜々は……間に合わない！

「雷真！」

夜々の悲鳴が聞こえ、そして――

がちんつ、と、硬い音が響き渡った。

それは牙が噛み合う音ではなく、太剣が牙を受けた音だった。

雷真をかばうように、誰かの背中が立っている。それはもちろんロキで、ラビを止めたのは彼が手にした太剣だった。

「ロキ……」

「オレは謙虚で寛大だが……口だけの男はぶっ殺したくなる！」

ラビと力比べを続けながら、ロキは吐き捨てるように言った。

「とっととこいつを片付けて、貴様を殺させろ！」

雷真は苦笑して、跳ね起きながら、それに応えた。

「上等だ。返り討ちにしてやる！」

「ぬかせ！」

二人同時に、動く。

ロキは軽々と太剣を振り、ラビの巨体を弾き飛ばした。ただちにケルビムの変形を解除して、ラビに向かって突撃させる。

切り裂きはしない。刃物をちらつかせるだけだ。後ずさるラビの背後には、既に夜々がスタンバイしている。ラビは二体の自動人形に挟まれ、動けなくなった。



そのときにはもう、雷真もフレイのもとに到着している。先ほどと同様、彼女の首に取りつき、頸動脈を締め上げた。

ほほ一瞬。脳への血流が途絶えたフレイは、くたっと手足を投げ出した。

ラビが苦しげによろめく。

前足で土をかき、首を振る。足もとはおぼつかず、尾には力がない。

あれほど膨れ上がっていた筋肉が、見る間にしほむ。

そして、ぱたり、と倒れた。あっけないほど、あっさりと。

やった……と誰もが思った、そのとき。

ラビの肩が弾け飛び、血と肉片が散乱した。

### 3

うやむやのうちに戦いは終わり——それからわずか十数分後。

医学部のエントランスを、せわしなく往復する者がいた。

雷真だ。雷真は落ち着かない様子で誰かを待っている。そんな彼を、夜々が気遣わしげに見つめていた。主の怪我が心配なのだろう。

やがて、雷真の足がびたりと止まる。鋭敏な聴覚が足音をとらえたのだ。視覚も裏切らない。屋外灯の光の下、ふらりと現れる二人連れがいる。艶やかな着物姿は見間違うはずもない。硝子というりだ。

雷真はエントランスから飛び出し、二人を出迎えた。

「すまない。ありがとう。俺は……硝子さんしか、頼れる人間がいない……」

「お説教は後回しよ。壊れかけの子はどこ？」

雷真は小走りになってしまいがちながら、硝子を医務室へ案内した。

医務室のドアを開けると、四人分の人影が視野に飛び込んできた。

眼鏡の医師。壁にもたれてキンパリィ。医療班の女子学生が二人ほど。その向こうでは、

簡易ベッドに寝かされて、フレイが手当てを受けている。

最初に反応したのはクルーエル医師だった。

「女神……!?」

と言ってしまったから、あわてて体裁を取り繕い、さわやかな笑顔を向ける。フレイの処置をする手は止めないまま、

「初めましてお嬢さん。こんなむさくるしいところに何の御用ですか？ 今ちょっと立て込んでいるのですが、よろしければ後で——」

「初めまして。しつけのなっていない坊や」

「坊や?」

「私を口説きたいなら、人間の作法を覚えてからいらつしやい」

硝子はクルーエルの前を素通りし、医務室の中央へと進んだ。

テーブルの上にラビが横たわっている。

ラビは自動人形、本来は医務室の担当ではない。だが、生物的な材料が多く使われていたため、技術科でも工学部でもなく、ここに運び込まれたのだ。使い手のフレイから引き離さないためでもある。

硝子はちらりと、かたわらのキンバリーに流し目をくれた。

「私がしゃしゃり出てもいいのかしら?」

「かまわんよ。むしろ光栄だ。ご高名な花柳斎殿の腕が見られるのだから」

了解を得ると、硝子は眼帯を操作して、レンズ越しにラビを見つめた。

どうやら、ラビの体内を透視しているようだ。硝子の眼帯は魔力の流れを直視できると聞いたことがある。

硝子は顔を上げずに、鋭い声で指示を飛ばした。

「絶縁鉗子。伝導カテーテル。エタノールに蒸留水。あと、たっぷりのお塩が欲しいわ。」

いろいろ、洗面器一杯の水を用意なさい。それから、キンバリー先生、そこに寝ている子の髪をひとふさ、切り分けてもらえるかしら?」

言いながら、袖口から包みを取り出す。ばさっと開くと、中には大小さまざまな工具が詰め込まれていた。バラバラとテーブルの上に転がったのは宝石で、雷真はその妖しさに目を見張った。

「石……？」

「君は本当に無知だな。どう見ても魔石だろう。魔力をたくわえる天然のバッテリーだよ。結晶構造と組成によって、たくわえられる魔力の質が決まる」

フレイの髪を切りながら、キンバリーが耳打ちする。

硝子の手は止まらない。腰に巻いていた鎖を外し、ラビを囲むように置いた。

結界だ。赤羽一門の儀式でも似たようなことをやる。

それから、硝子はヒモをくわえ、着物の袖をたすきで結わえた。

硝子の腕はほっそりとして、白かった。指はすらりと長く、女性にしては少し骨ばっている。よく使い込まれた、職人の指だった。

そして、硝子の『手業』が始まった。

その手つきは洗練されていて、一切の無駄がない。何より、迷いがなかった。何をどうすればいいのか、全部わかっているようだ。

まるでピアノ奏者の手さばきを見る気分。ギャラリーが息をつく暇もなく、ほんの十分足らずで、ラビの処置は終わった。

縫合にはフレイの髪を使う。硝子は手早く傷口を縫い合わせ、

「包帯を巻いておいて」

医療班の女子学生に指示を下し、ラビの前を離れた。

いろりが差し出す洗面器で、血に汚れた手を洗う。

「お見事」

嫌みではなく驚嘆した様子で、キンバリーがねぎらった。

「あの自動人形は生き永らえそうかね？」

「まず無理でしょうね」

「——それは、何と言うか、意外だな」

「内臓がめちゃくちゃだもの。〈心臓〉があれば、どうにもならないわ」

雷真は思わずフレイを見やり、彼女の意識がないことに、少しほっとした。

「でも、私は万全を尽くす主義なの。命をつないだときのために、欠損した部位を修復したいわ。樫材を都合してもらえるかしら」

「樫？ 木彫りでもするつもりかね？」

「私は人形師。お医者者の真似ごとなんかより、木型を作る方がお似合いよ」

「わかった。急ぎ、用意しよう」

キンバリーが医務室を出て行く。その背中を見送ると、硝子は雷真を振り返った。

「それじゃ、次はお説教ね」

## 4

不思議と慣れた足取りで、硝子は廊下を歩いていった。

雷真は夜々と二人、呼び出された問題児のようについていく。

やがて、硝子はひと気のないバルコニーに落ち着いた。いろりが差し出す小箱を開き、中から煙草を取り出す。

キセルに詰め、火をつける。吸い、吐き、灰を捨てる。

ひと仕事終えた硝子は、くつろいでいるようにも見えた。だが、その沈黙が恐ろしい。

雷真は軍の指令を果たせなかったし、あやうく夜々を破壊されるところだった。油断から重傷を負った。ラビを救いたいばかりに、学院にマークされることを承知の上で、硝子を呼び出した。叱られるネタには不自由しない。

雷真は沈黙に耐えかね、自分から口を開いた。

「その……助かった。恩に着る……」

「まだ助かってないわ。でも、貸しにしておくわね」

硝子は次の煙草を詰めながら、怒ったふうもなく言った。

それから、そつと、てのひらで小さな石を転がして見せた。

紋様が刻まれた小石。それを見て、雷真と夜々はそろって目をむいた。

「魔術回路！ まさか、ラビの……!?」

「軍の目的は果たせたわ。私があの子を生かしても、文句は言わないでしょう」  
生かしても。その意味するところを知り、雷真はどっと脱力した。

「あ……ありがとう……。ありがとう、硝子さん……!」

「お礼を言うのはまだ早いわ。助かる見込みはほとんどないのよ!」

それでも、硝子は手を尽くしてくれたのだ。それだけで胸が一杯だった。

気が抜けたせいで、忘れていた痛みを思い出す。本来、雷真も立ち歩けるような体ではない。思わず、その場に膝をついてしまった。

「……気に入らないわね」

硝子の言葉に驚き、顔を上げる。だが、どうやら、雷真のことを言ったわけではない。

硝子はどこか遠くに視線を投げていた。

「坊やもとつくに気付いていたわね。D社は〈ガルム〉と〈エンジェル〉を比較するために、夜会に参加したのだと」

「……ああ。ヨミが、そんなことを言っていた」

「でも、それはごまかし。あの子たちを利用するための、方便」

あの子たち。フレイと、ロキか？

「D社の目的は二機種の性能比較なんかじゃないわ。ロキには本当に魔王ワイスマンの座を狙ねらわせているようだけど——フレイの方は実験だったのよ」

一瞬、言われたことがわからなかった。

いや、本当はわかりかけていた。いくつもの事実が、事象が、雷真らいしんに真実を告げている。ラビの暴走。フレイを襲った苦痛。おびただしい出血……。

「……さっきのあれは、何なんだ。なぜ、ラビは急に暴走した？」

「逆よ、坊や。暴走したのはフレイの方」

「え……？」

「ラビは許容量を超える魔力を送り込まれて、理性を押し流されてしまったんでしょう。その過負荷に耐えられず、最終的に〈心臓〉が破裂した」

「……わからない。どういふことなんだ？」

「本当にわからないの？」

強い視線に射すくめられ、雷真は怯ひるんだ。

「フレイの心臓には、魔術回路が組み込まれているわ」

「なん——」

雷真のとなりで、夜々ややが口を覆おほった。



ラビの〈心臓〉？

いや、違う。聞き間違いない。硝子は確かに、フレイの心臓と言った！

「宿主の魔力を強制的に引き出して、使おうとする魔術回路ね。宿主の魔力親和性を高め、いずれは体の組成さえ作り替える」

その意味するところは、もう、わかっている。

この目で見たじゃないか。孤児院とは名ばかりの施設で。おぞましいものを。

「白神子」——この国では〈約束された子ども〉（プロミストナル・ブレン）と言うそうね。生まれつき魔力に富む子ども。それを『量産』できたら、素敵だと思わない？」

思わない。思うはずがない。

だが、企業は。軍は。思う……かもしれない。

強力な兵士を量産できるなら、万々歳だ。

「つまり、フレイと、ロキは……」

「人造の〈白神子〉。D社の実験動物よ」

どすん、と胃袋をぶん殴られた気がした。

夜々が真っ青になる。いりりでさえ顔をしかめた。

硝子は淡々と言葉を続ける。

「あの子たちの魔力循環を視ればわかるわ。人為的に整除された、不自然な魔力の流れ。」

間違はなく、心臓を機巧化されている」

「人間に、機巧を仕込んだ……ってのか」

「体色の変化はその副産物ね。肉体に負荷がかかって、色素が壊れたのよ」

「それは、簡単にできる……ものなのか？」

「まさか。坊やは見たはずよ。手術に失敗した子どもたちが、どうなったのか」

地下の氷室に保管された、子どもの遺体。

おそらくは〈ガルム〉の材料にも使われた、あの遺体は。

「無駄がないわね。本当に、嫌になるくらいね」

どす黒い怒りが膨れ上がり、雷真の胸を埋め尽くした。

何だ、それは。

何だ、それは！

雷真は弾かれたように立ち上がり、駆け出そうとした。

「待ちなさい」

有無を言わせぬ鋭い言葉。それは雷真の足を縫い止め、身動きを封じた。

硝子はゆっくりと穏やかに、しかし、かつてないほど厳しく言った。

「今夜はもうお休みなさい。しばらく、学院の外に出ることは許さないわ」

「なぜだ！」

「なぜ……と問うの、坊や？」

冷たい双眸。銃口を向けられたような恐怖を感じる。夜々もまた、仔兎のように小さくなった。はつきりと怯えている。

「D社の〈孤児院〉にどうして小紫を同行させたのか——どうして夜々を置いて行かせたのか、わかっていないようね」

「……どうして、だったんだ」

「坊やに、愚かなことをさせないためよ」

「愚行を犯しているのは連中だ！ あんな奴らをのさばらせておくのか！」

「自惚れるなど言っているのよ。坊やにできることなんて何もない。はつきり言ってあげましょうか？ 坊やは彼の敵じゃないわ」

「彼……？」

「ブロンソン。かつて、魔王の座に手をかけた男」

その名前は聞いたことがある。確か、シャルが口にした。

「五回前の夜会だから、二十年前の話ね。彼はのちの魔王に敗れ、夜会を去った」

「そいつが、Dワークスを興した……のか」

「今の坊やでは逆立ちしたって勝てないわ。あの〈剣帝〉ロキでもね。まして坊やは重傷を負っている。迂闊にも、私との『賭け』を忘れたの？」

ぐうの音も出ない。雷真はうつむき、こぶしを握った。

「わかったら、しばらく謹慎なさい」

硝子はキセルをしまい、冷淡に背を向けて、バルコニーを後にした。

## 5

雷真はふらふらと、医学部の校舎をさまよった。夜々が遠慮がちに追いかけてきたが、雷真が無視していると、いつの間にかいなくなった。

どのくらい、そうしていただろう。気がつくと、医務室の前に立っていた。

医務室はがらんとしていた。昨日の徹夜が堪えたのか、クルーエルはソファで爆睡中。医療班の女子学生は帰った後で、キンバリーの姿もない。

からっぽのベッドを見て、ときりとする。

ベッドで眠っているはずのフレイがいらない。あわてて中に入ってみると、処置室のドアの向こうに、真珠色のしっぽ——フレイの髪がのぞいていた。

彼女の白い肌には、あちこち包帯が巻かれ、大量の絆創膏が貼られている。

フレイはじつと、ラビのベッドを見つめていた。ラビは鼻筋にシワを寄せ、ヒゲの根元をひくつかせながら、ぐったりとしている。

「もう起き上がっていいのか？」

びくっと振り返る。怯えたようなフレイの眼は、ひどく充血していた。

「う……貴方こそ」

「キンバリー先生に言わせりゃ、俺は人間よりプラナリアに近いんだ」

冗談のつもりだったが、フレイは笑ってくれなかった。

やつれたように見える。雷真はどうしていいかわからず、

「硝子さんは世界一の人形師だ。だから、その、よ……」

きくと助かる——そんなふうに、無責任に請け負うことはできない。

生物の生き死には、人間がどんなに力を尽くしても、どれほどの技術があっても、どうにもならないときがある。二年前、雷真はそのことを知った。

だから。

「……助かると、いいな」

としか言えなかった。フレイはうなずき、同意してくれた。

「治ったら、シャルに触らせてやってくれよ。あいつ、犬が好きみたいなんだ」

「（暴竜）……っ」

「そんなふうに呼ばれてるけど、悪い奴じゃないぜ。素直じゃないけどさ。友達がいないと誤解されるんだよ、いろいろ」

「……私と、おんなじ」

そつとラビの首筋をなで、フレイはつぶやいた。

「でも、私は、寂しくなかった……。家族が……ラビが、いてくれたから」

「……ヨミも、家族だったのか？」

「ヨミは……私の、二人目の、お母さんだった」

「……悪い。俺が」

「違う……。私が、弱かったから……！」

きつく閉じたまぶたから、透明な涙があふれ出す。

「本当は、私が……ステージに、立つはずだった……。でも、怖くて……泣いて……私は、役を降りて……そうしたら、お母さんが……っ」

一瞬、フレイが錯乱しているのかと思った。

何を言っているのか、わからない。だが、フレイは必死に、

「ロキは、だから、私を……憎むの。私は、弱くて……だめだから、みんなを……不幸にして……殺して、護れない……。私が、ちゃんとして……れば、ロキだって、ケルビムの、操者に……なら、なくて……っ」

しゃくり上げながらの言葉は、ひどく聞き取りにくい。それに、意味も通じていない。だが、その後に漏れた言葉は、鋭利な刃物のように、雷真の胸をえぐった。



「ごめんね、ラビ……。ごめん……。みんなを、まも護れなくて……っ」

みんなを護れない。その意味するところを、雷真はもう知っている。

フレイが夜会に挑む理由だ。《ガルム》の量産計画が凍結されれば、牛舎の犬たち——フレイの《家族》が、廃棄されてしまう。

「私が弱いから……みんな、死んじゃう……。っ。ごめん、なさい……。お母さん……。ごめんなさい……。みんな……。ラビ……。っ」

もう、こらえることはできない。フレイはラビにすがりつき、むせび泣いた。

フレイの言葉に、涙に、その意味に、雷真はただ立ち尽くした。

Dワークスは。ブロンソンは。

フレイを実験動物にした。子どもたちを死なせて、《部品》にした。

人質を取ってフレイをたきつけ、無理やり夜会に参加させた。

フレイが死にかけたのも、ラビが死にかけているのも、フレイのせいじゃない。

それなのに——

今、フレイは泣いている。責任を、罪を引き受けて、詫わび、悲しんでいる。

抱きしめたいと思ったが、その資格がないことを、動かぬ右腕が教えてくれた。

だから、衝動が命じるまま、雷真は怒鳴った。

「違う！」



びくっとして、フレイが振り向く。

「……あんたは、悪くない。何も。何一つ」

雷真は顔を背け、逃げるように、医務室を後にした。

## 6

煮えたぎる怒りを抱えて、医務室を出る。

廊下では、何もかもを了解している顔で、夜々が立っていた。

しばし、見つめ合う。

「……夜々」

「はい」

「俺は、バカだな？」

夜々はふんわりと、つばみが開くように微笑んだ。

「はい」

それだけで通じる。

エントランスへと歩き出す雷真。その後ろを、夜々がとことことついていく。

二人がエントランスに入ったとき、月光の中に人影が浮かび上がった。

「まったく、今回の夜会はどうかしてるわ」

人影が皮肉げにつぶやく。細い体。おぼろげな月光を浴び、神秘的に光る金髪。その頭には四本の角——否、四枚の羽がある。

「初日は九九位が試合放棄。今日は九八位がドクターストップでお流れ。二日続けて決着がつかないなんて、スツキリしないわね」

シャルは半眼はんがんになって、鋭くたずねた。

「こんな夜更けに、どこに行くつもり？」

「……ちよいと散歩にな」

「Dワークスの〈孤児院〉に行くのね。ラビの兄弟機が廃棄される前に、強奪するつもりなんでしょう」

「……あのな。盗み聞きなんて、お嬢さまがすることじゃないぞ？」

「バカな男。本当にバカ。バカ史上に燦然さんぜんと輝く、バカの金字塔ね」

シャルはこめかみを押さえ、頭痛をこらえるような仕草しこうをした。

「自分がどういう状態かもわからないの？ 立って歩けるような状態じゃないって、あのヤブ医者も言ってたわよ。そんな状態で夜会に出るなんてバカの極み。もう十分死にかけてるくせに、この上まだ無茶むちゃする気？ 死にたいの？ 死ぬの？」

雷真らいしんが黙って聞き流していると、シャルの目尻めじりが吊り上がった。

「いい加減にして。さっきの戦いを見たでしょう。あんなことを平気で仕出かす連中なのよ。人間なんて平気で殺す。まして、侵入者なんか」

「マスケット銃で蜂の巣だ」

「銃なんて序の口よ。戦闘用の自動人形が待ち構えてるわ」

「なら、心配ご無用だ。俺には、世界最高の自動人形がついてる」

「だからバカだったのよ！ Dワークスの前に、ここの警備に見つかるわ。持ち出しがバレたら除籍じゃすまない。その子を没収されて、解体されちゃうわよ」

「見つからなきゃいいんだらう？」

「……貴方はキングスフォート家の恨みを買ったのよ。ひよっとしたら、その背後にいたかもしれない、政府の恨みも。貴方を殺したがってる連中が——その機会を待ちわびてる連中が、たくさんいるのに」

「おまえだって、わかってるはずだぜ」

「——え？」

「家族ってのは、簡単に失くしちゃっていいもんじゃない」

失くしてしまえば、取り戻せない。

後悔は、永遠に消えない。

「それに、おまえも言ってたろ。サムライの仁義ってヤツだよ」

出会ったばかりの雷真を、ヨミは身を呈して救ってくれた。それはきつと、託してくれたからだ。

雷真は信じられると、雷真になら任せられると、思ってくれたから。だから、雷真は行く。

この身を危険にさらしても、フレイの足かせを断つ。

「……行かせないわ」

シャルはシグムントを腕にとまらせ、魔力をたぎらせつつ、恫喝するように言った。

「どうしても行くって言うなら、私を倒してから行きなさい」

シグムントの目が光り、牙の隙間からまばゆい光が漏れる。

前に出ようとする夜々を手で制し、雷真は冷静な声で言った。

「何をムキになってんだよ。俺がどうなろうと、おまえに損はないだろ」

「……サムライの仁義よ。貴方は私を救ってくれた」

と言ってしまったから、あわててそっぽを向く。

「一度ね。一度だけね。だから、当然のお返しとして、私も貴方を護らないといけないわ。それでこそフェアなものよ。もちろん一度だけよ。でも、一度だけなら——どんなことをしても護るわ。たとえ、憎まれることになっても」

再び、にらみ合う。



シャルは本気らしい。シグムントもその意を汲み、既に臨戦態勢だ。

二人の心遣いには感じるものがあつた。夜々もまた、切なげに目を伏せた。だが、雷真も引き下がるわけにはいかない。

雷真は左手をふところに差し入れ、銀のペンダントを引っ張り出した。

「おまえがくれたお守り。鎖が切れちまつてるけど」

「ケルビムに斬られたとき……？」

「こいつで俺は命をつないだ。おまえはちゃんと、一度は俺を護ってくれたよ」

「——そういうことを言ってるんじゃないわー」

「俺もそういうつもりじゃない。そうじゃなくて、信じろってことさ。俺を、じゃないぜ。おまえがくれた、こいつのご利益をさ」

ペンダントが揺れる。その輝きを見つめるうち、シャルの表情が変わった。

ムスツとして、唇をとがらせる。

「……ずるいわよ。卑怯じゃない。今、それを持ち出すなんて」

このペンダントは、嫌でも、雷真に救われたことを思い出させる。

あのとき、雷真は自分の命を顧みず、シャルのために戦ってくれた。

今も同じだ。雷真はまた命を懸けて、誰かを救おうとしている。それを止める権利は、

資格は、シャルにはない。シャルも彼に救われたのだ。

「……ふん。どこへでも、勝手に行きなさいよ。勝手に行つて、勝手に野垂れ死にすればいいわ。野垂れ死にして、野良犬に食われなさい」

「一八〇度、方向性が変わったな」

苦笑する雷真。その横を不機嫌にすり抜けながら、シャルは刺すように言った。

「貴方<sup>あなた</sup>つて、本当に、ビッグベン級のバカ！」

走り去る。その頬が光ったような気がしたが、もう確かめることはできない。

雷真は夜々と視線を交わし、闇の中へと飛び出した。

それから、小一時間ほどが過ぎ――

雷真と夜々を乗せた馬は、夜道を疾風のごとく駆け抜け、〈孤児院〉にほど近い小麦畑に到着した。

馬上の二人には小紫の〈八重霞〉が効いている。しかし、馬は別だ。ひづめが泥を蹴飛ばす音も、息遣いも、かなり遠くまで響いてしまう。

そんなわけで、目的地より少し手前で馬を止める。肩を刺す痛みに顔をしかめながら、それでも笑つて、雷真は馬を下りた。

「やれやれ。こんな場所、二度ときたくなかったぜ」

問題の〈孤児院〉は明るかった。部屋という部屋にあかりがともっている。

「ずいぶん、見張りがいます」

「昼間のアレで、相当ビリビリしてるらしいな」

「雷真が小紫といちゃいちゃしていたアレですか？」

「それは歪曲された事実だからな？ 俺は死にかけたから――」

危険信号。本능が命ずるまま、二人はその場を飛び退いた。

足もとに撃ち込まれる鉄の塊。短剣だ！

土砂が舞い上がる。衝撃に驚いた馬が一目散に逃げて行った。勝手に持ち出した軍の備品なのだが、つかまえている余裕はない。

見上げれば、〈孤児院〉の屋根の上から、こちらを見下ろす影がある。ざっと見て、八から十。半分が自動人形だとすれば、それは侮れない戦力だ。

取り囲まれる前に、こちらから動く。雷真は夜々にてのひらに向け、魔力を送り込んだ。小紫の〈八重霞〉を解除して、夜々の〈金剛力〉を起動する。

「暴れるぞ、夜々」

「はい！ 得意ですー」

「……うん、普段は少し加減しろ？」

二人は紫電のように空気を裂き、〈孤児院〉の敷地に突入した。





## Chapter 7 てのひらで踊る魔剣



## 1

雷真が敵地に乗り込む、少し前のこと――

死に絶えたように静かな街を、小紫が屋根伝いに移動していた。

小紫の感覚器官は野生動物をも上回る。夜の闇の中でも、まったく不自由しない。夜々ほどではないが、そこらの人間よりは身も軽い。小紫はびよんびよんと軽やかに、確実な跳躍を繰り返して、学院へと急いだ。

知覚を駆使して警備の手薄なポイントを割り出す。自力での隠形も可能だが、用心に越したことはない。見張りの隙を突いて、こっそり敷地に忍び込んだ。

大通りを駆けていくと、やがて雷真の姿が見えた。

夜々の腕に何かを巻きつけている。雷真はすぐにこちらに気付き、

「よくきてくれたな、小紫。悪いが、何も訊かずに、俺に力を貸してくれ」

「……硝子は、何て？」

「硝子しょう子さんには、内緒なんだ」

「え、でも……」

ちらつと、二人の背後に目をやる。

暗い木立こだたちに同化して、銀髪の乙女——いろりが立っていた。

雷真らいしんの顔が強張る。しかし、いろりは独り言のような調子で、

「私は何も見ていません」

「……恩に着る。それじゃ頼む、小紫こむらさき」

雷真は小紫に向き直り、拝むような仕草しぐさをした。

正直なところ、硝子の意向を無視するのは怖かった。だが――

「……雷真が、そこまで言うなら」

昼間の一件が響いている。軍が動いていると知りながら、それを雷真に伝えなかったこと。結果、雷真はヨミを死なせてしまい、傷ついた。

その負い目が、小紫の背中を押した。

雷真から魔力を受け取り、適度な波長に変換して、（八重霞やえがすみ）を起動する。魔術はただちに効果を発揮し、雷真と夜々ややを包み込んだ。

普通の人間には、もう二人の姿をとらえることはできない。

「ありがとよ。行くぞ、夜々」

「はい」

二人はすぐに駆け出していく。その背中を見送って、少し寂しい気分になった。妹の心情を鋭く察して、いろりが近付いてくる。

「どうした、小紫」

「……姉さまは、いいなあ。私にも、戦う力があればいいのになあ」

「そう言うな。おまえにも、私にも、それぞれに役目があるのだ」

「私の役目って？」

「おまえがいるから、主は自由に出歩ける。おまえは立派に役目を果たしているよ」

「じゃ、いろり姉さまの役目は？」

「……そうだな、さしあたって」

ふっと、いつになく優しい笑みを浮かべ、いろりは言った。

「雷真殿を許してくれるよう、主をお願いすることかな」

姉妹は仲よく手をつなぎ、闇の中を歩き出した。

## 2

そろりと足音を殺して、フレイは病室に入った。

カーテンで仕切られたベッドは四つ。だが、患者はひとりもない。

「あのバカなら、いないわよ」

突然、背後から言われ、伸び上がってしまう。

振り向くと、病室のすみに美少女が座っていた。仔竜こりゅうを頭に乗せている。

「う……（暴竜）」

シャルは「ふん」とそっぽを向き、ちよつと頬ほを染めて、ぼそりと言った。

「貴女あなたの犬、その……どうなの？」

フレイはうつむき、スカートのすそを握りしめた。

押し込めていた不安が呼び起こされ、我慢できない涙がにじむ。

「ラビが死んだら……私……ひとりぼっちに……」

「……ふん。貴女はひとりぼっちじゃないわ。最初から」

意外なことを言われ、フレイは顔を上げた。シャルはちよつと不機嫌に、

「貴女には、貴女のことを一番に考えてくれる、大事な人だいじなひとがいると思うけど？」

「……………」

「『持つてる』子にはわからないのかもね。それより、あの変態の話よ」

「どいに……行つたの？」

「さあね？　今頃はどこぞの孤児院で、犬泥棒でもやってるんじゃない？」

孤児院。犬泥棒。

その言葉の意味を、ずいぶんかかって、理解する。

「どうして……!?」

「ほんつつつと、どうしてかしらねー！ でも、あいつはそういう奴なの。泣いている女の子を放っておけるほど、心が強くないのよ。ヘタレなのよ」

くさすように言う。そのくせ、瞳の奥には優しい光がほの見えた。

「現在進行形で死にかけてるつてのに。まして、自動人形オートマトンを持ち出すなんて、命知らずもいいところよ。警備や教授に知られたら、一卷の終わり——」

「残念だが、もう知っているよ」

シャルも、フレイも、腰を抜かすほど驚いた。

病室の戸口のとこに、キンバリーが立っていた。

いつもの白衣姿ではない。金の縁取りがゴージャスな、見慣れない黒マントを羽織っている。その意匠は幾何学的で、かつ神秘的だった。

「この格好か？ もちろん外出するんだよ。学院の教授には監督責任というものがあつてね。馬鹿どもをとつちめに行かなきゃならん」

——雷真らいしんのところへ行くつもりだ！

「そう構えるな。あの馬鹿どもを今すぐどうしようってわけじゃない。ひとまず、馬

鹿どもの安全を確保するのが目的だ」

シャルとフレイは互いに顔を見合わせた。

「おや、二人とも興味津々だ。いくつか約束を守るなら、連れて行ってやるぞ。どうだ、シャルロット？ 仲良しの〈下から二番目〉が気になるだろう？」

「どっ、どどどうして私があんな変態とっ、な、なか、なかかつ」

「行かないのか？」

少し迷った末、シャルはかぶりを振り、きっぱりと告げた。

「行きません。私は、信じてますから」

「アツアツだな」

「ちち違うわっ！ あのバカじゃなくて、ディフェンシブ防御印の効果を信じてるのよ！」

「フレイ、君はどうするね？」

フレイは病室のとなり、医務室の方を見やった。

ラビの意識はまだ戻っていない。容態が急変するかもしれない。

だが、それでも。

自分には、ちいしん雷真がやろうとしていることを、見届ける義務があるはずだ。

フレイはきりつと顔を上げ、「行きます」と答えた。

「光焰十二結！」

夜々に攻撃を命じると同時、雷真も全力で駆け出した。

敵の数は多い。囲まれては不利だ。ゆえに、先に動く！

一番近い相手を狙う。夜々が飛びかかり、体勢を崩す。雷真が足を払い、夜々がとどめの蹴りを見舞う。自動人形は一瞬でスクラップになった。

だが、敵もやられっぱなしではない。

雷真を包囲すべく、半数が背後に回り込んでいる。

幸い、あちらは連携が取れていない。飛ばしてくる短剣も直線的。回収にも時間がかかる。自在に操っていたロキとは大違いだ。

雷真と夜々は呼吸を合わせ、端から順に攻撃した。一体を胴体から粉碎、一体の頭部をつぶし、一体を彼方へ吹っ飛ばす。四体を蹴散らしたところで、相手の戦意はがくと落ちた。逃げ腰になるのがはっきりわかる。

その隙を突き、スタングレネードを叩きつけた。

飛び散る閃光。雷真は素早く方向転換し、夜々と一緒に牛舎へ走った。

閉ざされた扉を体当たりで押し開け、中にすべり込む。

寒い。妙に静かだ。

急いでランプを点灯。あかりをかざして見て、静けさの理由がわかった。すべてのケージが、からっぽだ！

最悪の想像が脳裏をよぎる。まさか、もう廃棄された……!?

「雷真！ 敵がこちらに向かっています」

夜々が扉の向こうを示す。雷真は目をつぶった。

落ち着け。まだ望みはある。そう信じろ。

この嚴重すぎる警備態勢は、何に対する警戒なのか。

彼らは秘密が外部に漏れることを怖れている。禁忌実験の存在が明るみに出ることを。つまり、司直の手が伸びることを怖れているのだ。

証拠を消そうにも、《ガラム》は禁忌人形、簡単には捨てられまい――

そのとき、天啓のように閃くものがあった。

多くの自動人形や、白い子どもたちを、こっそり運搬する方法。

うってつけの《設備》が、この施設にはある！

その瞬間、バリッと天井が破れた。

何かが屋根に突き刺さったようだ。刀剣の切っ先らしきものが、ひょっこり頭を出している。それは巨大な缶切りのように、天井をぐるりと一周した。



「――夜々―」

「はい！」

夜々が跳躍。落ちてくる天井、巨大な質量を蹴りで打ち砕く。

破片が飛び散り、壁が崩れる。雷真は頭をかばいつつ、ほこりが暗れるのを待った。

やがて、見たくもなかったものが見えた。

傭兵……だろう。服装も体格もバラバラな男たちが十数人、ぐるりと牛舎を取り囲んでいた。無論、彼らは自動人形を連れている。ゴーレム型から、四足歩行の猛獣型、細身の人間型まで、さまざまだ。

身構える雷真の前に、とすんつ、と大剣が突き刺さった。

その柄の上に立ち、こちらを見下ろす者がいる。

「オレは謙虚で寛大だ。……が、どうにも許せないものが三つある。オレに命令する奴。

オレに齒向かう奴。そして、命知らずのネズミ野郎だ」

フレイの弟ロキ。〈剣帝〉さまのお出ました。

どんな手を使ったのか、ケルビムを学院外に持ち出したようだ。宙を舞うのはケルビムの得意技。ロキ一人くらいなら、乗せて飛べるかもしれない。

ロキは真珠色の髪をふわりと揺らし、大剣の上から飛び降りた。

彼の言葉通り、今の雷真は袋のネズミだ。十数人からの人形使いに包囲され、目の前に

《劍帝》<sup>けんてい</sup>がいる。

さすがにまずいか、と思ったとき、ケルビムが短剣を射出した。心臓を貫かれ、自動人形<sup>オートマトン</sup>が木偶のように倒れる。

倒れたのは、夜々ではない。短剣は傭兵<sup>ようへい</sup>の自動人形<sup>オートマトン</sup>を狙った！

雷真<sup>らいしん</sup>が唖然<sup>おぜん</sup>としているあいだに、短剣は別の人形<sup>じんぎょう</sup>を狙って飛ぶ。

「何しやがる！」<sup>あれ</sup>「俺たちは味方だぞ！」

動揺<sup>どうぶい</sup>と狼狽<sup>ろうばい</sup>。だが、ロキは無言で殺戮<sup>ころく</sup>を続ける。

ようやく事態を悟り、傭兵<sup>ようへい</sup>たちは怒声をあげ、ロキに攻撃を開始した。

ある人形は突進し、ある人形は火炎を吐く。しかし、ロキには届かない。飛び回る短剣が、ケルビムのブレードが、彼らを切断し、分断し、両断する。

包囲の輪はたちまち崩れた。

雷真は素早く駆け出し、夜々を連れて包囲を突破した。

ロキと張り合うように突っ走り、《孤児院》の扉を蹴破<sup>けやぶ</sup>って内部に突入する。直後、銃弾の雨が降りそそいだ。

あわてて反転。夜々とケルビムにかばわれつつ、柱の陰に逃げ込む。

ほっと一息。安全を確保すると、雷真はロキに向かって怒鳴った。

「おまえ！ いきなり現れて何だ！ 敵か味方かはつきり——」

「貴様は底抜けにバカだな！ 少しは後先あとよりを考えて行動しろ！」

怒鳴り返され、鼻白むはなしろ。ロキは続けて、

「学院生が民間人に手を出した——などと知れたら極刑だぞバカが！」

「うるせーそのくらい計算に入ってたんだよ西洋バカ！ こっちは禁忌実験の証拠を握ってるんだぞ？ 連中が法に訴えられるわけねーだろ！」

「心底おめでたい世界バカだな！ Dワークスが司法に根回ししないと思うのか？ 貴様の『証拠』など法廷で採用されるわけがない。国教会の魔女裁判にかけられて、火あぶりにされるのがオチだ！」

「ああ！ おまえは救いようのない銀河バカだな！ そのときは——」

雷真は軽く笑って、言い切った。

「神って野郎と、戦うだけだ」

さすがのロキも唾然あざんとした。それから、不快そうに眉まゆをひそめた。

「格好をつけやがって。反吐へどが出る。いっそ胃がハミ出る」

「ああ出してみろよ。つか、そう言うおまえはどうなんだ。偉そうに説教垂れやがって、おまえこそやりたい放題じゃねーか。言っとくが、おまえはもう八人も斬きってるからお巡りさん、ここに凶悪犯がいます！」

「黙れ卑怯者ひきょうもの！ 刑事さん、主犯格はコイツですよ！」

にらみ合う。そんな二人の後ろから、先ほどの傭兵たちが迫ってきていた。雷真らいしんはそちらに気を配りながら、

「十三人」に列せられるような奴が、何の目的で犯罪行為に加担する？」

「知るか。オレはただ、気に食わない連中を気の済むようにするだけだ」

「……そんな理由で、火あぶりも辞さねーってのか？」

視線が交差する。一瞬後、どちらからともなく、噴き出した。

「何だ」

二人の声が重なる。

「どっちもバカだ」

同時に飛び出している。特に打ち合わせをしたわけでもないのに、二人は背中合わせに立ち、それぞれが別の方向に攻撃した。

夜々が銃弾を阻み、雷真らいしんがその背を跳び越え、蹴けって、殴うって、打ち倒す。短剣を踊らせ、血しぶきをかくぐり、ロキが人形使いをなぎ払う。

まったく連携が取れていないのに、勢いだけは同調している。後ろの傭兵たちも、前の射撃手たちも、二人の勢いに押され、やがて総崩れとなった。

後退する射撃手たちを追撃し、奥へと進む。その先は別棟へと続く渡り廊下だ。二人はひと息に廊下を駆け抜け、広い中庭に飛び出した。



ここを突っ切れば、地下への階段がある。あと少しで――

「雷真！ 下がって！」

夜々が急ブレーキをかけ、背中で雷真を押し返す。

次の瞬間、あたかも落雷のごとく、真上から剣が落ちてきた。

大きい。まぶしい。金色の刀身は美しい……が、同じくらいに禍々しい。そのフォルム、

意匠には、どこか見覚えがあった。

「これは……ケルビム？」

「いや――ルシファーだ」

そう答えたロキのひたいに、冷や汗が光る。

（こいつが冷や汗を……!?）

それほどに恐ろしい敵なのか。雷真はあわてて敵の姿を探した。

そして、見つける。

頭上、三階の窓辺。すらりとした紳士がひとり、泰然とこちらを見下ろしている。

紳士は窓枠に足をかけ、虚空に身を躍らせた。

羽毛のようにゆつくりと、中庭に降りてくる。

雷真は目をむいた。あれが〈念動〉によるものなら、すさまじい魔力だ！

「私は幸運なのだろうな」

紳士は彫りの深い顔を向け、冷然と言いつつ。

「おまえほどの〈部品〉を、勞せず調達できるのだから」

## 4

その光景を、フレイは屋上からのぞき見ていた。

養父の姿に悲鳴をあげそうになり、あわてて口を押さえる。

キンバリーとの約束だ。フレイに許されているのは見えていることだけ。どのみち、ラビがない今、フレイにできることなどない。

ロキは激しい怒りをたぎらせ、養父ブロンソンをにらんだ。

対するブロンソンは余裕たっぷりの刃物のように鋭い一瞥をくれ、

「気でも触れたのか、息子よ」

「……それは今までのオレだ。何の疑問も持たず、あんたに尻尾を振っていた」

ロキの憤激に反応し、ケルビムが左右のブレードを構える。

「だが、今は正気だ。地獄に落ちろ！」

魔力を放ち、ケルビムを突撃させる。

見た目以上にケルビムの処理は「重い」。百キロのおもりを提げて一輪車に乗っている

ようなイメージだ。少しの乱れで制御不能になる。

だが、ロキはその不利をもともしない。鋼鉄のブレードがうなりを上げ、極めて精確にブロンソンの首を狙った。しかし――

養父の実力はわかっていたが、フレイは驚愕を禁じ得なかった。

ケルビムの斬撃を防いだのは、空中に浮遊する、小さな短剣だった。

何という支配力！ 今の一撃にビクともしない！

ロキがケルビムを後退させる。だが、それは相手の狙い通りだった。

飛び退く先には、突き立った大剣がある。

大剣が瞬時に姿を変え、人の姿になった。金色の天使ルシファー。ケルビム同様、両手に巨大なブレードを持っている。

ガラ空きの背中にブレードが迫る。ケルビムの背骨が音を立てて碎ける――

いや、大丈夫だ。夜々がブレードを受け止め、必殺の一撃を阻んだ。

ロキのとなりで、雷真が皮肉げに笑う。

「どうした、キツそうだな？」

「……バカを言え。貴様が入りやすいようにしてやったんだ。気配りだ」

共犯めいた視線の交差。直後、二人が同時に魔力を練った。

先陣を切ったのは夜々だ。ルシファーのブレードを蹴り上げ、自らも跳躍する。



それは雷真が体得している技なのだろう。訓練された武術家の動きで、くるりと前方に一回転。全体重を乗せ、かかとを振り下ろす。

ブーツの底がルシファアの頭に直撃した。……のだが。

するり、と不自然に表面をすべり、夜々の蹴りは流された。

ルシファアは素早く反撃に転じる。ブレードが空中の夜々をとらえ、夜々は十メートルも吹っ飛ばされた。

フレイは呆然とした。岩をも砕く夜々の蹴りを、どうやってそらした？

（魔術……？）

ルシファアに搭載されているのは、ケルビムと同じ〈熱風操作〉の魔術回路だ。できるとすれば、蹴りを食らう瞬間に――

（高密度の熱風を……ぶつけた？）

信じられない。飛来する弾丸に弾丸を当て、軌道修正するような芸当だ。

「ケルビム――廻れ！」

ロキの命令を受け、ケルビムが大剣に姿を変える。

刹那、フレイの第六感が見えない〈噴射口〉をとらえた。灼熱した空気が集中し、吐き出される様子を、見えるくらいリアルに認識する。

噴射、そして反作用。巨大な推力を得て、大剣は飛んだ。

ノズルはひとつだけではない。複数の推力が組み合わさり、複雑な機動を可能にする。大きく弧を描きながら、大剣はルシファーに斬りかかった。

ルシファーは受けず、後退した。と同時に、四本の短剣を射出する。

それはケルビムを素通りし、背後のロキへと殺到した。

フレイはとっさに口を覆った。あやうく、悲鳴をあげてしまうところだ。

肩を裂き、腹をえぐり、四本の短剣がロキを貫通する。ロキは地べたに打ちつけられ、ぐったりとした。

苦悶にあえぐロキを見て、ブロンソンは失望したように言った。

「愚かだな。実戦においては、術者を狙うのが定石だ」

「そいつはいいことを聞いたぜ」

という雷真の声は、ブロンソンの背後から聞こえた。

ブロンソンの背中を取った！ブロンソンが動けば、即応して攻撃するつもりだろう。明らかに素手の間合い。ルシファーには夜々がついている。これなら……？

——いや、違う！ 罠だ！

短剣は全部で八本。ロキを貫いた短剣は四本。では、残りの四本は？

あぶないっ、という警告が喉まで出かけた。

だが、その暇もない。短剣が地中から飛び出して、雷真を切り裂いた。

雷真は無様に転がった。衝撃で傷口が開き、胸が裂ける。

出血がひどい。どう見ても、立ち上がれそうにない。

「雷真っ！ 大丈夫ですか雷真！」

取り乱す夜々。その隙を逃さず、ルシファーが夜々を跳び越えた。

雷真に追い打ちをかける気だ。そうはさせじと、ロキがケルビムを差し向ける。そして、自らはブロンソンに殴りかかった。

だが、そんな努力は、すべて無駄だった。

ルシファーはたやすくケルビムをいなし、弾き飛ばす。

ブロンソンはロキのこぶしを払いのけ、掌底であごを突き上げた。

「いらだたしいものだ。飼犬に手を噛まれるというのは」

そのままロキをつかみ上げ、ぶんと振り回して、壁に叩きつける。

後頭部がレンガを直撃。フレイは思わず目を閉じた。その拍子に涙がこぼれた。

（ロキ……！ ライシン……！）

無事を祈るしかない。そんな自分が情けない。私に力が……ロキみたいな才能があれば。

ああ、私はロキのお姉ちゃんなのに。血をわけた姉弟なのに。どうして、いつもいつも、私はこんなにダメなんだろう？

ブロンソンは侮蔑と愛憎が入り混じったような目でロキを見た。

「解せないな。なぜ齒向かう？ おまえには十分な報酬を与えていただろう？」

「……オレは……オレたちは……あんたの言いなりだった」

だらり、と手足をぶら下げながら、ロキはうめくように言った。

「ある日、仲間がいなくなっても……死ぬような実験をされても」

「ますますわからんな。ではなぜ、今になって私を裏切る？」

「……オレは謙虚で寛大だ。……が、どうにも我慢ならないものが三つある。オレに命令する奴。オレに齒向かう奴。そして」

唇の両端を歪め、にやりと笑う。

「姉貴を裏切る、クソ野郎だ」

その瞬間、稲妻のようなものがフレイの全身を貫いた。

先ほどのシャルの言葉が、ようやく理解できた。

目頭が熱い。燃えそうなほど。後から後から、涙が涙を連れてくる。

嫌われていると思っていたのに。ずっと、疎まれていると思っていたのに。

駄目な姉だと。情けない、弱い姉だと。

両親を死なせた、仇だと。

だが、ロキは。

憎むどころか――

「……残念だよ。おまえはもったも成功した個体だった」

ブロンソンは嘆息し、かぶりを振った。

「おまえたち姉弟は、調達にも手間のかかった素体だった。わざわざ新大陸まで出向き、つまらない細工をしてまで、確保したというのに」

え、と思った。

フレイはまばたきも忘れ、真下の養父を見下ろした。

細工。その単語がぐるぐると回る。細工。細工。まさか。まさか——  
まさか。

「う……うおおおおおおお！」

ロキが吠える。ケルビムが跳ね起き、ブロンソンに突進した。

しかし、結果は先ほどと同じだ。ケルビムはルシファーに叩き伏せられてしまう。

ブロンソンがロキを投げ飛ばす。ゴミを放るように、無造作に。

「大人しくしている。心配せずとも、ここで殺しはしない。おまえの〈部品〉はすこぶる貴重だ。生きたまま分解しなければ、もったいないからな」

フレイはその場にうずくまった。呪わしい。この身の無力！ 弟が痛めつけられる姿を、黙って見ていることしかできないなんて！

ああ、誰か……神さま！

ロキをお救いください。どうか、どうか——  
果たして、その折りが届いたのかどうか。

不意に、ブロンソンが興味深げな声を出した。

「……まだ動けるのか。あきれた東洋人だな。特殊な個体か？」

視線の先には、ゆらりと立ち上がる、血だらけの雷真らいしんがいた。

位置は、ロキのすぐ後ろ。夜々ややを従えて、肩を激しく揺らしながら、立てるはずのない  
彼が、きちんと二本の足で立っている。

フレイの視界が涙でゆがんだ。

どうして、と思った。どうして、彼は。

私たちのために、そこまでしてくれるの？

私は彼を傷つけようとしたのに！

気がつくと、ロキも立ち上がっていた。自分だけ寝ているのは我慢ならなかったのだろ  
う。ケルビムもまた、主の意志あるじにこたえ、再び動き出した。

雷真はブロンソンをにらんだまま、ロキに向かってささやいた。

「……まだ、やれるか？」

「ふん……誰だれに言っている」

「なら、ひと口、乗れ」

そして、作戦を告げる。フレイには聞こえなかったが、ロキはうなずいた。

「……いいだろう。今は貴様に賭けてやる」

「損はさせねーよ。賭けに勝ったら、メシをおごれ」

「ぬかせ。貴様と一緒にではメシが不味くなる」

ブロンソンはうんざりした様子で、小さく肩をすくめた。

「ご苦勞なことだ。小賢しい策でも思いついたのかね？」

「その小賢しい策であんたは終わるぜ。その前に答えろ。なぜ、フレイを騙した？」

雷真が鋭い声で問いかける。いや、問い詰めると言った方が正しい。

「〈ガルム〉を生かしておくつもりがないのに、なぜフレイを戦わせた？　なぜ、フレイの心臓を改造した？　なぜ、あいつを——泣かせた？」

ブロンソンは退屈そうに雷真を眺め、そして、

「不可逆だからだ」と答えた。

「……不可逆？」

「科学の発展とは進歩の積み重ねだ。逆はない。後退も停滞も許されない。人類にとって停滞とは即ち停止、滅びを意味するのだよ。神祕の究明、真理の探究、科学の発展こそ、我ら人類の歩む道。魔術師はその発展に寄与しなくてはならない。学院はそのために存在するし、魔王の座もまた、そのために存在する」

うっすら笑って、断言する。

「そのためなら、多少の嘘も方便というものだよ」

その言葉は、重い銃弾となって、フレイの胸を貫いた。

発展？ 進歩？ そんな理由——それだけの理由で？

お父さんと、お母さんは。

ロキは。私は。

フレイの心が真つ二つに裂けた、そのとき。

どんっ、と雷真の魔力が膨れ上がった。

今まで感じたことのない、途方もない力が、雷真の体を通して湧き出してくる。

「子どもから家族を奪うのが『進歩』なら——」

雷真の瞳が紅く光る。〈約束された子ども〉と同じように——いや、もっと強く！

「人類なんざ、滅びろ！」

夜々が地を蹴った。

すさまじい加速。夜々は一気に間合いを詰め、ルシファーに肉迫した。

鋭い蹴り。蹴り。蹴り。ルシファーはいずれもさばき、かわす。だが、それは作戦通り。

既にケルビムが変形し、大剣がそちらに飛んでいる。

あれほど熱くなっていたのに、雷真は深追いせず、夜々を回避に専念させた。続いて、



標的を見失ったルシファーにケルビムがぶち当たる。

その連携をブロンソンは予期していたようだ。ルシファーがブレードを交差して、大剣の一撃をブロックする。

すかさずルシファーを変形させ、反撃に移った。

熱風を推力に変換し、自在に宙を舞いながら、ふた振りの大剣が斬り結ぶ。

そして魔術の発動。刃と刃が激突する瞬間、ルシファーから超高温の熱風が噴き出し、ケルビムの表面を焼いた。

熱風の先端は数千度を超え、数千気圧にも達する。どんな鋼鉄をも焼き切る一撃、これが《熱風操作》の真骨頂だ。

しかし、刃がちんつと噛み合っただけで、切断されなかった。

お互いに数センチも食い込む……が、それだけだ。

とつさに、フレイは《熱風操作》の知識を掘り返した。

鋼鉄を焼き切るには、熱が一点に集中していなければならない。ルシファーが噴出する熱風を、ケルビムが噴出する熱風で散らしてやれば……当然、熱は集中できず、融点を大きく超えるには至らない。

あぶられた刃が噛み合い、溶接される。その一瞬が隙となる。ルシファーの真下に、夜々が出現した。

空中のルシファーに防御手段はない。——取ったか？

「惜しかったな」

ブロンソンは動じもせず、ルシファーの変形を解除した。

人間型に戻ってみると、溶接されていたのはブレード一本だけだった。まだ、もう片方のブレードが自由だ！

ルシファーが振りかぶるブレードに、強烈な魔力が集中している。(熱風操作)で夜々を断ち切るつもりだ。

夜々は左腕を上げ、頭をかばう。無茶だ！

ブレードが夜々の左腕に食い込み、切断する——寸前。

はむっ、と夜々の左腕が爆発した。

ブレードは夜々の腕で止まっていた。切断されていない。

(ライシンは……気付いていた？)

そうだ。(熱風操作)のタネを見抜いて、周到に準備していたのだ。

超高熱の収束が万物を焼き切る。その一撃を防ぐには、同じく超高熱の噴射によって、熱を散らしてやればいい。先ほどロキがやったように。

雷真はそのことを理解して、夜々の袖に爆薬を隠していた。

そして、その切り札を、このタイミングまで温存した。

何という胆力。これが、《魔術喰い》を倒した人形使いか！

「吹鳴絶衝——」

動かないはずの右腕を、雷真は夜々に向けていた。

膨大な魔力を受け、夜々の下肢に恐るべき力が蓄えられる。

ほんの一瞬、ルシファアの挙動がまごついた。

ブレードを捨てて逃げようとしたのだろう。だが、不運なことに、爆発の衝撃で指関節がイカれたようだ。いや、不運などという言葉で片付けるのは間違いだ。雷真の計算が、あるいは誰かの想いが、ルシファアを呪縛したに違いない。

フレイの目には、ルシファアの首に噛みつく、老犬の幻影が見えた。

「《ひさぎ太刀影》」

夜々は燐光を放ちつつ、下肢の力を解放した。

閃光が走る。

夜々の姿はこつ然と消え、ルシファアの胴体が夜々の形に欠け落ちた。

夜々が超高速で通り抜けたのだと、果たして養父は認識できただろうか？

今の速度は、人間の認識能力をはるかに超えていた。《熱風操作》で威力を殺ぐことはもちろん、使い手たる雷真でさえ、まともにコントロールできないだろう。

だからこそ、絶対に外さない状況を作り出す必要があったのだ。

やがて、ずいぶん時間がかかって、夜々が下りてきた。

ずどんっ、と流星のように着地する。地響きが傷に響いたのか、ロキと雷真はそろってよろめき、そろって前のめりに倒れた。

どちらもかなり出血している。はつきり言って重傷だ。そんな状況でも、互いに弱みを見せたくないらしい。二人は平気そうな声で言い合いを始めた。

「生きているか、〈下から二番目〉。もう気絶したか？」

「こっちの台詞だ。だらしなく伸びやがって。もう立てねーんだろ？」

「バカめ。これはちよつとした休憩だ。貴様こそ瀕死じゃないか」

「バカ、これはアレだ、星を見てるんだ星を。俺は天体観測が趣味なんだ」

「うつぶせで星が見えるものか。本当は死にかけているんだろ？　もうすぐ貴様がお星

さまになるんだろ？」

「誰がなるか。おまえこそ、もう相当に具合悪いんだろ？　さっさと帰って病院に行け。

そのまま長期入院しろ。白衣の天使にちやほやされろ」

「貴様がされろ。手ずからメシを食わせてもらって、優しく体を拭いてもらえ」

「阿呆、そんなことしたら……アレだぞ阿呆。夜々に殺されるんだぞ阿呆め」

「雷真！　もうしゃべらないでくださいー」

夜々は異変を感じたらしい。雷真にすがりついて、泣き出した。

ロキも雷真も、わけのわからないことを言っている。頭が回っていないのだ。フレイはいても立ってもいられず、階段へと駆け出した。

動揺した夜々の声が聞こえる。

ロキの意識は途切れたようだ。もう、雷真を罵る声も聞こえない。それは雷真も同じだ。中庭に響くのは、もう夜々の悲鳴ばかり――

(二人とも、死なないで……！)

死んだ両親が、その笑顔が、網膜にチラつき、胸が張り裂けそうになる。

フレイは涙のしずくを振りまきながら、一心不乱に駆け続けた。

## 4

「……つまらぬ幕切れだな」

泣き叫ぶ自動人形をにらみながら、ブロンソンはつぶやいた。

ふところから拳銃を取り出し、そつと狙いをつける。

自動人形の少女は混乱していて、こちらには気付かない。使い手があの状態なら、鉄壁の防御力も発揮されず、銃弾でもやれるはずだ。

あれを止めてしまえば、結局はこちらの勝ち。ルシファーを失ったのは損だが、代わり

にケルビムが残った。コンペティションには問題なく参加できる。

やれやれという気分で引き金を引いた、そのとき。

腕にダガーが突き刺さり、狙いがそれた。

銃声。しかし、当たらない。

痛みに筋肉が引きつり、拳銃を取り落としてしまう。

今になって気配を感じた。驚いて見回すと、彼らの姿が次々と目に入った。

ずらりと並ぶ黒い影。窓辺にも、屋上にも、その姿がある。

いずれもそろいの黒コート。金糸で縫い取りがされた、優雅なコートだ。フードを目深にかぶっていて、顔は見えない。どこかの宗教団体のようにも見える。

いつの間に現れたのか。そして、いつの間に包囲したのか。

「つまらん幕切れですまないな、ブロンソンくん」

そう言いながら、黒コートのひとりが歩み出てくる。

フードを外す。その下にあったのは、皮肉げな女の顔だった。

自動人形の少女が驚き、びよこんと腰を浮かす。

「キンバリー先生！」

言われてみれば、学院でキンバリーと呼ばれている、あの教授と同じ顔だ。

「……何の真似だね、これは。君たちは何者だ？」

「我々は〈灰十字〉。魔術師協会の番犬だ——と言えば、わかるかね？」

さしものブロンソンも平静ではいられない。目をむき、口を半開きにした。視線が泳ぎ、逃げ道を探す。そして、そんな自分に苦笑した。

ネクトルの名前が本物ならば——逃げ道など、どこにもない！

「協会が……わざわざ、学院生の身辺を嗅ぎ回る……だど？」

「なに、今度の夜会は少々ゴタついて——っと、君に話すことではないな」

女は苦笑し、感慨深げにあたりを見回した。

「やれやれ。とんだ家庭訪問になってしまった」

自動人形の少女と目が合い、一瞬、緊張が走る。女は「心配するな」と言うように手で

制し、再びブロンソンの方を向いた。

「デイバインワークス——神の御業とは思ひ上がったものだ。君を〈禁忌〉の容疑で拘

束させてもらうぞ」

「……禁忌、だど？」

「とほけるよりも黙秘した方が利口だよ。君が我慢強い男なら特にね。生爪をはがされたり、そこに釘を打たれたり、そういう遊びは好きなクチかね？」

女はサデイスティックに唇をゆがめ、楽しげに言った。

「まあ、どのみち証拠はそろっているんだがね。人体の改造、人体の解体、人体の廃棄、

人体の実験。君の場合は誘拐と殺人の罪もついてくる」

ふと、ルシファアの残骸に目を留め、

「……ふむ、こいつはロキが連れてくるものより、さらに精度が高いようだな。こいつを使っても、あいつを止められなかったのか」

にやりと、嗜虐的な笑みを頬に刻む。

「月日の流れとは残酷なものだ。天使ともてはやされた美少年が中年になり、念動で剣を操った者が機巧に頼るようになる。魔王などと未練たらしく名づけておいて、このザマでは——心中お察しするよ、〈剣を統べる天使〉」

「……未練ではない。戒めと、わずかな後悔があるだけだ」

「ほう？」

ブロンソンは抵抗する気力も失せて、ぼんやりと夜空を仰いだ。

「今はただ、失望している。あのときの己の弱さに。あのとき魔王の座に届いていれば、この程度の禁忌で罪に問われることもなかった」

「これは驚いた。あきれた馬鹿者だよ、君は。君のような間抜けが、私の講義に出ていればよかったな。そうすれば、少しはマシになれたものを」

「……どういう意味だね？」

「魔王は確かに、魔術師倫理規定の埒外。とは言え、法の埒外ではない」



あからさまな侮蔑よべつをにじませ、なじるように言う。

「人体実験には被験者の合意が不可欠だ。君は年端としはもいかぬ子どもを、犯罪まがいの——もしくは犯罪そのものの手段で集め、強制的に協力させた。魔王ワイスマンであっても許されることではない。進歩などという幻想に憑つかれ、神のてのひらで踊らされた愚か者。君には魔王ワイスマンの座なんかより、処刑台がお似合いだよ」

ブロンソンは目を閉じ、肺をカラにするような、深いため息をついた。  
すべてが、終わったのだ。

黒コートの人形使いたちが音もなく近付いてくる。彼らはブロンソンを拘束し、中庭の外へ引き立てていった。

ブロンソンが去ると、女は倒れている少年たちを振り返った。

既に応急手当が始まっているが、どちらも明らかに死にかけた。自動人形オートマートンの少女がめそめそやっていて、うざったいことこの上ない。

「まったく手のかかる生徒だよ、君たちは」

口ぶりとは裏腹に、女はくすりとやわらかく、笑みをこぼした。

ようやく中庭に下りてきたフレイが、息を切らしながら、少年たちに駆け寄った。



# Epilogue

## 白い殺人鬼



「さあ、雷真。服を脱いでください♡」

西日が差し込む病室に、夜々の嬉しそうな声が響いた。

看護服を着て、ナースになりきった夜々が、蒸しタオルを持って迫ってくる。

「大人しくパンツを脱がないと、眼球にお注射しちゃいますよ？」

「そんな白衣の天使はいないからな？　むしろ悪魔だからな？」

反抗的な患者に業を煮やし、ナース夜々は実力行使に出た。

雷真の腰にしがみつき、病衣の下を脱がしにかかる。

雷真はギブス固定された足を振り下ろし、夜々の暴挙を中断させた。

夜々は蹴られた頭を押さえつつ、涙目になって、

「天井のシミでも数えてれば、すぐに終わります！」

「暴漢の台詞だろそれ！　つか、となりに人がいるんだぞ！」

「望むところです！」

「俺は望んでないからな？　そんな痴女はおまえだけだからな？」

そのとき、ぱさっと仕切りのカーテンが開き、凍てつく殺気が飛んできた。



となりのベッドには、今にも抜剣しそうな形相のロキがいた。

「オレは謙虚で寛大だ。……が、どうにも許せないものが三つある。オレに命令する奴。」

オレに歯向かう奴。そして、病室でナースとエロ行為に及ぶ奴だ」

「ナースじゃねーし、まだ寸止めだ！ 許せないなら助けろ！」

「ふざけるな。貴様の自動人形だろうが」

「そうです！ 夜々は雷真のお人形です！ いつもみたいに可愛がってくださいー」

「信じるなよロキ!? そんな事実はないからな!?」

ぎゃあぎゃああと大騒ぎになる。壁に立てかけられた大剣——〈剣〉形態のケルビムが、

迷惑そうに顔を背けた。

「まったく騒がしいな。元気が余っているのなら、夜会に復帰してはどうだ？」

戸口から声がかかる。声の主を見て、雷真とロキは『うげっ』となった。

「何だ、その顔は。大恩人である私が顔を出してやったというのに」

キンバリーはにやにや笑いながら、

「なあ、〈下から二番目〉。君の違法な外出が協会のテコ入れで不問とされ、おとがめなし

で済んだのは、一体誰のおかげだったかな？」

「……すべて、キンバリー先生ののおかげデス」

「では、〈自ら廻る焔の剣〉。本来なら不正の証拠品として押収されるべき、君たち姉弟の

自動人形が、今なお夜会で使えるのは？」

「……すべて、キンバリー先生のおかげデス」

雷真はロキの首をつかみ寄せ、腹立たしげに耳打ちした。

「おまえが大騒ぎしたせいで、余計な借りを作っちゃったじゃねーか」

「バカが。もとはと言えば、貴様が起こした騒動だろう」

ぴきぴきと血管が浮き出る二人。今にもつかみ合いを始めそうだ。

「まあ、その話はまた今度だ。用件はほかにある」

「用件？」

「面会謝絶の君たちに、見舞いの者を連れてきてやったのさ。教授権限でな」

あっさりとは病室を出て行く。入れ替わりで入ってきたのは、五頭もの犬を連れた、気弱

そうな少女だった。夜々があらゆる警戒モードになる。

ロキの姉フレイ。連れているのはコリーにシェパード、グレートデン、ダックスフンド、

そしてオオカミ犬。どれも毛づやがよく、キラキラしている。

犬たちにまわりつかれながら、フレイはじっと雷真を見つめた。

紅い瞳がしつとりと湿り気を帯び、熱っぽくうるんでいる。

「う……ありがとう、ライシン」

「……礼なんか言わない。俺はヨミを死なせたし、それに」

「でも、ありがとう」

ふんわりと、微笑む。

初めて見るフレイの笑顔は、こぶしの花のようにのどかで、愛らしかった。尾を振る犬たちも嬉しそうで、雷真はそれ以上、強く言えなかった。

「……聞いたぜ。〈多重なる騒音〉は快進撃らしいな」

救出された十二頭のうち四頭を、フレイは新たに戦力として加えた。

群れをなした〈ガルム〉は想像以上に強力だった。禁忌人形であるがゆえに自律性が高く、量産機であるがゆえに要求スペックが低い。これだけの数を同時に扱っても、フレイにかかる負担が少ないのだ。

群れによる〈狩り〉でフレイは勝ち星を積み上げ、雷真とロキが傷病欠場しているうちに五戦全勝。昨晚、九三位を打倒した。

「ずいぶん増えたな。名前は何ていうんだ？」

「ラビ、リビエラ、ルビー、レビーナ、ロビン」

「……悪い。覚えられねーから、ラリルレロでいいか？」

フレイは困ったような顔をして、「う……それより」と話題を変えた。すつと、提げていたバスケットを差し出す。

「これ、お昼。サンドイッチ」

既視感のある光景。だが、今のフレイは好意的だ。罨ではないだろう。

「おう、ありがたく食わせてもらう——」

受け取ろうとしたとき、夜々が横からかすめ取った。

ブラックホールのような瞳孔を向け、抑揚のない声で言う。

「これは夜々が毒見します。しかるのち、口移しで食べさせます」

「それは断る。だが、毒見はしてもいい」

「ひどいです雷真……っ！ 夜々を利用するだけ利用して……っ！」

こんなもの一つ、とばかりに、サンドイッチを片っ端からほおぼる。直後、夜々の顔色が変わった。こんっ、こんっ、と激しく咳き込む。

「大丈夫か!? おい、何入れた!？」

「う……惚れ薬——が調達できなかったので、ラム酒をたっぷり」と

「……酒？」

「お酒に酔った勢いで、間違いが起くるのではと……」

「間違いはあんたの頭に起きてるからな? つか、やっぱり吐き出すからな?」

フレイは残念そうにうつむいた。悪気はなかったようだが……いや、その前に惚れ薬というのは何なんだ? 俺を隷属させて、夜会を有利に進めるつもりか?

雷真が頭を悩ませていると、フレイはとことごと移動して、何となくふてくされている

ロキの前に立った。

「ロキ、ありがとう。この子たち、護まもってくれて」

「……オレは何もしていない。礼はそっちのバカに言え」

素直じゃない。夜々の背中をさすってやりながら、雷真らいしんは横から口を出した。

「フレイ、こいつはな、あんたが殺されかけたことにブチキレて——」

じゃきつ、と鋭い金属音。ケルビムが変形し、雷真の首にブレードを突きつけた。

ロキのひたいに青筋が立ち、紅い双眸あふめうが危険な光を宿す。

「死ぬか？」

「上等だ。こないだの借りを返してやる」

夜々とケルビムが魔力を帯び、臨戦態勢になる。まさに一触即発いっしょくそくはつ。そんな二人のあいだに、フレイがあわてて割って入った。

「ロキ、ケンカは、めっ。ライシンは、家族になるかも、なんだから！」

しん、と静まり返る室内。

「う……あ……う??」

視線を左右にさまよわせ——ようやく失言に気付いたらしく、ぼんつとフレイの顔から火が出た。ぐるぐると目を回し、パニックを起こす。

フレイは何やら両手を振り上げ、悪魔召喚っぽいジェスチャーをしたあげく、逃げるよ



うに病室を飛び出していった。

「……えーと、あいつ、今何だった？」

思考停止する雷真の前で、夜々が壊れた。ぼろぼろと涙をあふれさせ、

「やっぱり、二人は……そ・う・い・う、関係……っ！」

ごごご、と謎の地震が起き、天井からはりが落ちてくる。雷真は震え上がった。何だかよくわからないうちに、白衣の殺人鬼が誕生しようとしている！

痛む体に鞭打って、一目散に窓から飛び出す。

必死の逃走。どこをどう逃げたのか。必死すぎてルートを覚えていない。

気がつけば、屋上で小さくなっていた。息を潜めて下をのぞくと、羅刹と化した夜々が、うろうろと雷真を探している。雷真はあわてて首を引っ込めた。

夜々には悪いが、やはり、命も惜しい。

思えば、今回も夜々にはずいぶん世話になった。

今回の一件は、完全な命令違反だった。しかし、硝子は何も言わなかった。とりなしてくれたのは雪月花の三姉妹だ。

あのときの硝子を思い出すと、今でも身がすくむ。硝子は無言で雷真を見据えていた。たつぷり五分も。それは叱責されるより、はるかにつらい時間だった。硝子の目は、はつきりと、「二度目はない」と警告していた。

そのとき、背後で扉が開き、雷真の心臓が跳ね上がった。

「……あんたか。ロキをほっぽっていいのか？」

五頭の犬を連れたフレイが、ぼつんと立ち尽くしている。

フレイは雷真に気付くと、再び赤面し、逃げ出そうとした。

……が、思いとどまった。雷真に向き直り、深々と頭を下げる。

「ごめんなさい」

「あ？ 夜々のことなら別に、毎度のことだぞ」

「う……違う、ロキのこと。ロキが、あの子に、大砲の弾を……ぶつけて」

夜々に砲弾をブチ込んだことか。

雷真は目を閉じ、病室でのロキの様子を思い出した。

腕を吊り、松葉杖を突き、包帯だらけ。その上、あちこち腫れ上がっている。せつかく

美形に生まれついても、あの状態では台なしだ。

雷真は軽く笑って、あっけらかんとして言った。

「そのことなら、いずれキツチリ落とし前をつけるさ。夜会でな」

「……いいの？ 執行部に訴えれば……ロキは失格になる、のに？」

今にして思えば、ロキの行動は一貫していた。

夜会は命がチップのゼロサムゲーム——死ぬ危険もある。そのリスクを負わせないため、

フレイを夜会から遠ざけようとした。雷真のような危険人物は、自らの手で排除しようとした。

姉を想うその気持ちは、雷真が妹を想う気持ちと、きつと同じだ。

「あいつには一度負けてるからな。その借りを返すまで、消えられちゃ困る」  
フレイは目を丸くして、それから、なぜか恥ずかしそうにうつむいた。

雷真の視線から逃れるように、とことと屋上の端へ向かう。

柵に手をかけ、沈みゆく太陽を見つめるフレイ。

雷真も立ち上がり、そのとなりに立った。フレイの顔が真っ赤になるが、たぶん夕陽のせいだろう。雷真は燃えるような夕陽を眺めつつ、そっと問いかけた。

「続けるのか、夜会」

「う……禁忌の秘術が、必要だから」

「禁忌？」

「ロキや、私の心臓……もとに、戻すために」

いつ止まるかもわからず、暴走の危険もある、機巧の心臓。そんなものを、いつまでも抱えているわけにはいかない。

だが、外すには代わりの心臓がいる。そして、臓器の製造は禁忌だった。

「あんたがやるのか？ ロキの野郎も、たぶん同じことを考えてるぞ？」

「……お姉ちゃんらしいこと、何も、できてないから」

そう言ったフレイの横顔は、普段の弱気が嘘のように、きりつとしていた。

「私が、やる。ライシンにも、負けないから」

「おう、上等だ。夜会で決着つけようぜ」

動かない右手ではなく、左手で握手を求める。

フレイはびくつとした。何をそんなにあせっているのか、ぐるぐると目を回し、かなりいっぱいいっぱいになって、雷真らいしんの手を握る。

ぎゅうううつ、と妙に強い力で握ってくる。しかも両手で。フレイの表情は妙に必死で、

雷真は思わず笑ってしまった。

見上げる空には一番星。

今夜も、夜会が始まる――

そのとき、手を握り合う二人の後ろから、声がした。

「雷真……っ！」「ごっこい。」

「げっ」



## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

MF文庫J 今月の目玉（※ハッター）機巧少女2をお届けいたします。

いきなりですが、カバーの子をよく見てください。

実は今回、（控えめの君臨者）るろおさんに「たゆん」でオーダーを出しちゃいました。ひよえええ。るろおさんのファンは僕と庄司さん（担当）の蛮勇を崇めてくれてもよくつてよ——ああつ、石を投げないでっ。

蛮勇と言えば、今回どうしても変形ロボがやりたくてですね。

周囲を説得するため3Dで資料を作りました。「ポリゴン？ 何それうまいの？」状態からスタートし、三日がかりでしょぼい変形動画を作成。その執念に怖れをなし——憐れに思っ——庄司さんも生温かくGOサイン。最終的には、るろおさんがカッコよくデザインしてくださいました。ケルビムカッコいいよケルビム。

もちろん、ケルビム以外でも、るろおさんには頼りっぱなしです。

海冬レイジも目次のSDで萌え転がり、口絵のわんに萌え転がり、キャラ紹介の雷真に萌え転がりロキに萌え転——転がってばかりだな！

フレイのマフラ―設定、るろおさんのアイディアです。カバー絵の〈鎖〉アイディアをもらったときは、対応する一文を決めのシーンに仕込んでいました。

そして、今回の主題ね。

最初はもつとこう、とっちらかってバラバラなお話だったんです。それで困っていたら、るろおさんが急所を指摘してくださって、お話に背骨が入りました。

ちょ……主題ってテーマだよな!? とんだだけ絵描きさんに頼ってんの!?  
るろおさんありがとう！ もつと頑張るから見捨てないで！

ここで特報。機巧少女コミック版が月刊コミックアライブで連載開始！

描いてくださるのは高城計さん。るろおさんとはまた違った方向性で、可愛い夜々とかシグメントとかが堪能できますよ。コミカライズはアマチュア時代からの夢だったので、正直楽しみすぎて困る……！

まだ二冊目だというのに、この展開の速さは異常。これは庄司さんの体を張った全方位ラブアタックのおかげなんですすがが。

庄司さん、いつ休んでるのかわからない……つうか、休んでない。海冬レイジが恐竜を

狩ってるときも、変形ロボとたわむれてるときも、庄司しょうじさんはバリバリお仕事中でした。ありがたいーでも休んで！ すぐく後ろめたいー

そして先日、原田はらだひとみさんが歌う『MACHINE DOLL』が発売になりました。

力強くもはかない、しっとりしたボーカルに原作者はうっとりです。例によってヘビーローテで聴きまくっています。原田さんは天使！

作詞家の LINDENリンデンさんが素敵に可憐な歌詞をつけてくださったんですが、この歌詞がね、すごくて……意味深いみふしんなんです（今後の展開的な意味で）。気になる貴方あなたは是非チェックしてみてください。公式サイトでも聴けますよー。

手探りで始まった機巧少女も、何だかすごい勢いで広がっています。でも、読んでくださる貴方がいなければ、勢いなんて即座に吹き飛んでしまいます。

だから、こちらも必死です。この勢いが止まらないよう、必死でお話の続きを書きますので、どうかこれからもよろしく願いますねー

ではまた次回、機巧少女3でお会いできますように！



こんにちは、絵の人です。  
そんな訳で機巧少女の二巻です。

海冬センセの素敵変形人形でしたよ？  
作画資料に手製の変形ムービー作るセンセは素敵です。  
残念な事に大人の都合でそのへんの絵が少ない訳ですが  
構造的にはちゃんと変形出来るようになってたり。

そんな訳で？ 次巻も変形とかお嬢さんとか  
素敵クールにてんこ盛る筈ですので、乞う御期待。



機巧と魔術の香り立つ  
シンフォニック学園バトルアクション

コミカライズ決定!

コミックアライブ6月号(4/27発売)より

連載開始!!

高城計 Hakaru Takagi

原作 海冬レイジ キャラクター原案 るろお

機巧少女は  
傷つかない  
Unbreakable Machine-Doll

アライブはとっても健全な雑誌です！（念のため）





マシンドール  
機巧少女は傷つかない2  
Facing "Sword Angel"

発行	2010年3月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区銀座 8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2010 Reiji Kaito  
Printed in Japan ISBN 978-4-3401-3245-9 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・転送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱丁本・落丁本はお取替えいたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話:0570-002-001

受付時間:10:00~18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー  
MF文庫J編集部宛付 「海冬レイジ先生」係 「るるお先生」係



左記より本書に  
関するアンケートに  
ご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料待  
ち受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時  
にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保護者の方  
の了解を得てから回答してください。